

厚真町
浜^{はま} 厚^{あつ} 真^ま 3 遺跡

— 日高自動車道厚真門別道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成14年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

厚真町
浜^{はま} 厚^{あつ} 真^ま 3 遺 跡

—日高自動車道厚真門別道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成14年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



遺跡と遺跡周辺の空中写真（国土地理発行のものを複製したものである）1975年9月撮影



1 調査区完掘状況 (西から)



1 調査風景 (南西から)



2 Tピット検出状況 (西から)



1 TP-73 (手前)・74 (奥) 検出状況 (東から)



2 基本土層 H45区 (南西から)



3 基本土層 P31区 (北東から)

例 言

1. 本書は国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部が行う日高自動車道厚真門別道路工事に伴い財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成14年度に実施した厚真町^{アホマス}・^{アホマシ}厚真3遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は第1調査部第4調査課が担当した。
3. 本書の執筆は第I章；遠藤香澄・山中文雄、第II章；笠原 興・山中、第III章；鎌田 望・山中・芝田直人、第IV章；山中・鎌田・芝田、第V章；鎌田・芝田、第VI章；山中が担当し、鎌田が編集を担当した。文責は文末に記してある。
4. 現地調査時の写真撮影、整理作業時の遺物撮影および写真整理は笠原が行った。
5. 炭化物の放射性炭素年代については(株)地球科学研究所に依頼した。
6. Tピット内堆積物等の花粉分析および植物珪酸体分析についてはパリオ・サーヴェイ株式会社に依頼した。
7. 土器、石器などの実測・トレースは藤内まゆみ、河崎まなみが行った。
8. 調査報告終了後の出土資料および記録類については厚真町教育委員会が保管する。
9. 調査にあたっては下記の諸機関、各位からご協力、ご指導を頂いた（順不同、敬称略）。

北海道教育委員会、厚真町教育委員会、鶴川町教育委員会、早来町教育委員会、明治カルチュ・ヴィヴァン文化講座、日高山脈館、厚真町教育委員会 長橋政徳・乾 哲也・乾 希、門別町図書館郷土資料館 川内谷 修・橋本 晋、苫小牧市勇武津資料館 佐藤一夫、苫小牧市立博物館 赤石慎三・宮夫靖夫、苫小牧市教育委員会 兵藤千秋・工藤 肇、浦河町教育委員会 川内 基、平取町沙流川歴史館 森岡健治・長田佳宏、静内町郷土館 藪中剛司、鶴川町四季の館まなびランド図書室 高地美穂子、浦河町立浦河第二中学校 菊池 哲、苫小牧民報社 川村省二、厚真町 阿部栄乃進

記号等の説明

- 本文中の遺構の表記は以下に示す記号を使用し、原則として確認順に番号を付した。
T P : Tビット P : 土坑 F : 焼土
- 遺構図の方位は真北を示す。遺構平面図の+はグリッドラインの交点で、傍らの名称記号は右下のグリッドを示している。遺構平面図の小数字とセクションレベルは標高(単位m)である。
- 掲載した実測図の縮尺は原則として以下のとおりである。各図にはスケールを付けている。
遺構 1 : 40 土器拓本 1 : 3 剥片石器 1 : 2 礫石器 1 : 3 石斧 1 : 2
- 遺構の規模については以下の要領で示した。なお、一部破壊されているものについては現存長を()、不明のものは-で示した
Tビット・土坑
確認面での長径×短径/床面・底面での長径×短径/確認面からの最大深さ(単位m)
焼土
確認面での長径×短径/確認面からの最大厚さ(単位m)
- 土層の表記は、基本土層についてはローマ数字で、遺構の覆土についてはアラビア数字で表した。
- 石器の大きさは「最大長×最大幅×最大厚」(単位cm)で示した。なお、破損しているものについては現存最大値を()で示した。なお、実測図中でたたき痕は「V-V」、すり痕は「|ー|」で範囲を示した。

目 次

口絵カラー	
例 言	
記号等の説明	
目 次	
挿図目次	
表 目 次	
図版目次	
I 調査の概要	
1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査にいたる経緯	1
4 調査の経過と概要	5
5 調査結果の概要	7
II 遺跡の位置と環境	
1 位置と環境	8
2 地 形	8
3 歴史的環境	10
4 周辺の遺跡	14
III 調査の方法、遺物の分類	
1 調査区の設定と調査の方法	23
(1) 調査区(グリッド)の設定	23
(2) 調査の方法	25
2 土層の区分	27
3 遺物の分類	32
(1) 土 器	32
(2) 石 器 等	33
(3) 土製品・石製品	33
IV 遺構と遺構出土の遺物	
1 概 要	34
2 Tピット	34
3 土 坑	112
4 焼 土	112
V 包含層出土の遺物	
1 土 器	116
2 石 器	122
VI 自然科学的手法による分析	
1 放射性炭素年代測定	127
2 浜厚真3遺跡の古植生について	131
3 浜厚真3遺跡のフローテーション資料	140
VII 成果と問題点	
1 浜厚真3遺跡のTピットについて	141
写真図版	
引用・参考文献	
報告書抄録	
奥 付	

挿 図 目 次

I 調査の概要

図 I - 1 - 1	厚真町の位置と遺跡の位置	2
図 I - 1 - 2	日高自動車道と浜厚真3遺跡の位置	4

II 遺跡の位置と環境

図 II - 1 - 1	遺跡位置図	9
図 II - 3 - 1	5万分の1地形図(1)	12
図 II - 3 - 2	5万分の1地形図(2)	13
図 II - 4 - 1	厚真町の遺跡分布図(1)	16
図 II - 4 - 2	厚真町の遺跡分布図(2)	18
図 II - 4 - 3	厚真町の遺跡分布図(3)	19
図 II - 4 - 4	厚真町の遺跡分布図(4)	20
図 II - 4 - 5	苫小牧東部工業地帯遺跡分布図	22

III 調査の方法、遺物の分類

図 III - 1 - 1	調査区設定図	23
図 III - 1 - 2	調査範囲と周辺の地形図	24
図 III - 2 - 1	土層模式図	28
図 III - 2 - 2	土層断面図(1)	30
図 III - 2 - 3	土層断面図(2)	31

IV 遺構と遺構出土の遺物

図 IV - 2 - 1	Tピットの分類	35
図 IV - 2 - 2	地形断面図	36
図 IV - 2 - 3	Tピット分布図	37
図 IV - 2 - 4	Tピット底面における長径・短径の相関図	40
図 IV - 2 - 5	Tピット長短比・深さの相関図	42
図 IV - 2 - 6	A1-L型Tピット分布図	45
図 IV - 2 - 7	A型Tピット分布図	46
図 IV - 2 - 8	B型Tピット分布図	47
図 IV - 2 - 9	C型Tピット分布図	48
図 IV - 2 - 10	T P - 1 ~ 3	49
図 IV - 2 - 11	T P - 4 ~ 6	50
図 IV - 2 - 12	T P - 7 ~ 9	51
図 IV - 2 - 13	T P - 10 ~ 12	52
図 IV - 2 - 14	T P - 13 ~ 15	53
図 IV - 2 - 15	T P - 16 ~ 17	54
図 IV - 2 - 16	T P - 18 ~ 20	55
図 IV - 2 - 17	T P - 21 ~ 23	56
図 IV - 2 - 18	T P - 24 ~ 26	57
図 IV - 2 - 19	T P - 27 ~ 28	58
図 IV - 2 - 20	T P - 29 ~ 31	59
図 IV - 2 - 21	T P - 32 ~ 34	60
図 IV - 2 - 22	T P - 35 ~ 37	61
図 IV - 2 - 23	T P - 38 ~ 39	62

図 IV - 2 - 24	T P - 40 ~ 42	63
図 IV - 2 - 25	T P - 43 ~ 45	64
図 IV - 2 - 26	T P - 46 ~ 47	65
図 IV - 2 - 27	T P - 48 ~ 50	66
図 IV - 2 - 28	T P - 51 ~ 53	67
図 IV - 2 - 29	T P - 54 ~ 55 ~ 57	68
図 IV - 2 - 30	T P - 56 ~ 58 ~ 78	69
図 IV - 2 - 31	T P - 59 ~ 61	70
図 IV - 2 - 32	T P - 62 ~ 64	71
図 IV - 2 - 33	T P - 65 ~ 68	72
図 IV - 2 - 34	T P - 69 ~ 71	73
図 IV - 2 - 35	T P - 72 ~ 74	74
図 IV - 2 - 36	T P - 75 ~ 77	75
図 IV - 2 - 37	T P - 79 ~ 82 ~ 83	76
図 IV - 2 - 38	T P - 84 ~ 86	77
図 IV - 2 - 39	T P - 87 ~ 89	78
図 IV - 2 - 40	T P - 90 ~ 92	79
図 IV - 2 - 41	T P - 93 ~ 95	80
図 IV - 2 - 42	T P - 96 ~ 98	81
図 IV - 2 - 43	T P - 99 ~ 100	82
図 IV - 2 - 44	T P - 101 ~ 105	83
図 IV - 2 - 45	T P - 106 ~ 108 ~ 113	84
図 IV - 2 - 46	T P - 109 ~ 111	85
図 IV - 2 - 47	T P - 112 ~ 117 ~ 121	86
図 IV - 2 - 48	T P - 114 ~ 116	87
図 IV - 2 - 49	T P - 122 ~ 127	88
図 IV - 2 - 50	T P - 128 ~ 130	89
図 IV - 2 - 51	T P - 131 ~ 133	90
図 IV - 2 - 52	T P - 134 ~ 137 ~ 169	91
図 IV - 2 - 53	T P - 138 ~ 140	92
図 IV - 2 - 54	T P - 141 ~ 143 ~ 158	93
図 IV - 2 - 55	T P - 144 ~ 146	94
図 IV - 2 - 56	T P - 147 ~ 149	95
図 IV - 2 - 57	T P - 150 ~ 152	96
図 IV - 2 - 58	T P - 153 ~ 155	97
図 IV - 2 - 59	T P - 156 ~ 157 ~ 159	98
図 IV - 2 - 60	T P - 160 ~ 162 ~ 171	99
図 IV - 2 - 61	T P - 163 ~ 168	100
図 IV - 2 - 62	T P - 170 ~ 172	100
図 IV - 2 - 63	173、P - 1	101
図 IV - 2 - 64	Tピット出土の土器	110
図 IV - 4 - 1	Tピット出土の石器	111
図 IV - 4 - 1	焼土分布図とF - 1	113
図 IV - 4 - 2	~ 3 · 7	113
図 IV - 4 - 2	F - 4 ~ 6 · 8 ~ 14	114

V 包含層出土の遺物

図 V - 1 - 1	包含層出土土器分布図(1)	117
図 V - 1 - 2	包含層出土土器分布図(2)	118
図 V - 1 - 3	包含層出土の土器(1)	119
図 V - 1 - 4	包含層出土の土器(2)	120
図 V - 2 - 1	包含層出土土器等分布図(1)	120

図V-2-2	包含層出土石器等分布図(2)	123
図V-2-3	包含層出土の石器	125
VI	自然科学的手法による分析	
図1	花粉化石群集	134

図2	植物珪酸体群集	136
図3	分析試料採取位置	138
VII	成果と問題点	
図VII-1-1	Tピット底面における長径・短径の相関図(厚真・静川台地)	142

表 目 次

I 調査の概要

表I-5-1	検出遺構数一覧	7
表I-5-2	出土遺物点数一覧	7

II 遺跡の位置と環境

表II-3-1	厚真町の遺跡一覧	17
表II-3-2	苫小牧東部工業地帯遺跡一覧	21

III 調査の方法、遺物の分類

表III-2-1	土層観察表	29
----------	-------	----

IV 遺構と遺構出土の遺物

表IV-2-1	Tピット分類結果	35
表IV-2-2	Tピット分類別規模一覧	41
表IV-2-3	Tピットの重複一覧	43
表IV-2-4	Tピット一覧	102
表IV-2-5	Tピット出土遺物一覧	109
表IV-2-6	Tピット掲載土器一覧	110
表IV-2-7	Tピット掲載石器一覧	111
表IV-4-1	焼土一覧	112
表IV-4-2	焼土出土遺物一覧	115

表IV-4-3	焼土掲載土器一覧	115
表IV-4-4	焼土掲載石器一覧	115

V 包含層出土の遺物

表V-1-1	層別別出土土器点数一覧	116
表V-1-2	包含層出土掲載土器一覧	121
表V-2-1	層別別出土石器一覧	122
表V-2-2	包含層出土掲載石器一覧	126

VI 自然科学的手法による分析

VI-1	表1	厚真町浜厚真3遺跡放射性炭素年代測定分析試料一覧	128
VI-2	表1	分析試料	131
	表2	花粉分析結果	133
	表3	植物珪酸体分析結果	135
VI-3	表1	浜厚真3遺跡フローテーション資料一覧	140

VII 成果と問題点

表VII-1-1	「苫小牧東部工業地帯の遺跡群」Tピット一覧	144
----------	-----------------------	-----

図 版 目 次

口絵1	遺跡と遺跡周辺の空中写真
口絵2	1 調査区完掘状況(西から)
口絵3	1 調査風景(南西から)
	2 Tピット検出状況(西から)
口絵4	1 TP-73(手前)・74(奥)検出状況(東から)
	2 基本土層H45区(南西から)
	3 基本土層P31区(北東から)
図版1	1 調査風景(南西から)
	2 Tピット検出状況(北から)
図版2	1 Tピット検出状況(西から)
	2 西側拡張部Tピット検出状況(北西から)
図版3	1 調査区完掘(西から)
	2 東側拡張部完掘(北から)
図版4	1 西側拡張部完掘(北から)
	2 調査区全景(南西から)
図版5	1 基本土層(南西から)
	2 基本土層拡大

3	南北土層断面(南から)
図版6	1 西側拡張部調査区全景(北から)
	2 西側拡張部南北土層断面(西から)
	3 西側拡張部東西土層断面(北から)
図版7	1 TP-1土層断面(南東から)
	2 TP-1完掘(南東から)
	3 TP-2土層断面(南東から)
	4 TP-2完掘(南東から)
	5 TP-3土層断面(南東から)
	6 TP-3完掘(北から)
	7 TP-4土層断面(南東から)
	8 TP-4完掘(北西から)
	9 TP-5土層断面(南から)
図版8	1 TP-5完掘(南西から)
	2 TP-6土層断面(南西から)
	3 TP-6完掘(南西から)
	4 TP-7土層断面(南から)

	5	TP-7完掘(南から)		8	TP-59土層断面(南東から)
	6	TP-8土層断面(南東から)		9	TP-59完掘(南東から)
	7	TP-8完掘(南東から)	図版15	1	TP-62土層断面(南から)
図版9	8	TP-9土層断面(北東から)		2	TP-62完掘(北西から)
	1	TP-9完掘(南から)		3	TP-63土層断面(南から)
	2	TP-10完掘(南から)		4	TP-63完掘(南から)
	3	TP-11土層断面(南から)		5	TP-66土層断面(西から)
	4	TP-11完掘(南から)		6	TP-66完掘(南から)
	5	TP-12土層断面(南から)		7	TP-67土層断面(西から)
	6	TP-12完掘(南から)		8	TP-67完掘(西から)
	7	TP-13土層断面(南から)		9	TP-70土層断面(南から)
	8	TP-13完掘(南から)	図版16	1	TP-70完掘(南から)
	9	TP-14土層断面(南から)		2	TP-72土層断面(北から)
図版10	1	TP-14完掘(南から)		3	TP-72完掘(北から)
	2	TP-15土層断面(南から)		4	TP-75土層断面(南から)
	3	TP-15完掘(南東から)		5	TP-75完掘(南から)
	4	TP-16土層断面(東から)		6	TP-76土層断面(北東から)
	5	TP-16完掘(南東から)		7	TP-76完掘(北東から)
	6	TP-23土層断面(南から)		8	TP-78土層断面(南から)
	7	TP-23完掘(南から)		9	TP-78完掘(南東から)
	8	TP-24土層断面(南から)	図版17	1	TP-82土層断面(東から)
	9	TP-24完掘(南から)		2	TP-82完掘(東から)
図版11	1	TP-25土層断面(南から)		3	TP-85土層断面(北東から)
	2	TP-25完掘(南から)		4	TP-85完掘(北東から)
	3	TP-27土層断面(南から)		5	TP-88・89土層断面(南から)
	4	TP-27完掘(北西から)		6	TP-88完掘(西から)
	5	TP-28土層断面(東から)		7	TP-89完掘(北から)
	6	TP-28完掘(西から)		8	TP-91土層断面(南から)
	7	TP-29土層断面(南西から)		9	TP-91完掘(南から)
	8	TP-29完掘(南西から)	図版18	1	TP-97土層断面(南から)
	9	TP-31土層断面(南から)		2	TP-97完掘(南から)
図版12	1	TP-31完掘(南から)		3	TP-99土層断面(南から)
	2	TP-32土層断面(南から)		4	TP-99完掘(南から)
	3	TP-32完掘(南から)		5	TP-100土層断面(南から)
	4	TP-33土層断面(南西から)		6	TP-100完掘(南から)
	5	TP-33完掘(南西から)		7	TP-102土層断面(南から)
	6	TP-34土層断面(東から)		8	TP-102完掘(南西から)
	7	TP-34完掘(東から)		9	TP-103土層断面(南から)
	8	TP-35土層断面(南から)	図版19	1	TP-103完掘(南から)
	9	TP-35完掘(南から)		2	TP-104土層断面(南から)
図版13	1	TP-37土層断面(西から)		3	TP-104完掘(南から)
	2	TP-37完掘(西から)		4	TP-108土層断面(東から)
	3	TP-47土層断面(南東から)		5	TP-108完掘(西から)
	4	TP-47完掘(南東から)		6	TP-111土層断面(南から)
	5	TP-48土層断面(南東から)		7	TP-111完掘(北から)
	6	TP-48完掘(南東から)		8	TP-113土層断面(北から)
	7	TP-50土層断面(東から)		9	TP-113完掘(南から)
	8	TP-50完掘(北西から)	図版20	1	TP-114土層断面(南から)
	9	TP-54土層断面(南から)		2	TP-114完掘(北から)
図版14	1	TP-54完掘(南から)		3	TP-121土層断面(南から)
	2	TP-56土層断面(南から)		4	TP-121完掘(北から)
	3	TP-56完掘(南西から)		5	TP-125土層断面(北から)
	4	TP-57土層断面(南から)		6	TP-125完掘(北から)
	5	TP-57完掘(南から)		7	TP-127完掘(北から)
	6	TP-58土層断面(南から)		8	TP-128土層断面(南から)
	7	TP-58完掘(南から)		9	TP-128完掘(北から)

- | | | | | |
|------|---|--------------------------|-------|-------------------|
| 図版21 | 1 | TP-130土層断面 (北から) | 7 | TP-149土層断面 (南東から) |
| | 2 | TP-130完掘 (北から) | 8 | TP-149完掘 (北西から) |
| | 3 | TP-131土層断面 (北から) | 9 | TP-150完掘 (東から) |
| | 4 | TP-131完掘 (北から) | 図版25 | 1 |
| | 5 | TP-132土層断面 (北から) | | 1 |
| | 6 | TP-132完掘 (北から) | | 2 |
| | 7 | TP-134土層断面 (東から) | | 3 |
| | 8 | TP-134・169完掘 (北西から) | | 4 |
| | 9 | TP-135完掘 (南から) | | 5 |
| 図版22 | 1 | TP-136土層断面 (西から) | | 6 |
| | 2 | TP-137土層断面 (西から) | | 7 |
| | 3 | TP-138土層断面 (南から) | | 8 |
| | 4 | TP-138完掘 (北から) | 図版26 | 1 |
| | 5 | TP-139土層断面 (南から) | | 2 |
| | 6 | TP-139完掘 (北から) | | 3 |
| | 7 | TP-140土層断面 (東から) | | 4 |
| | 8 | TP-140完掘 (東から) | | 5 |
| | 9 | TP-141・158土層断面
(南東から) | | 6 |
| 図版23 | 1 | TP-141・158完掘 (南東から) | | 7 |
| | 2 | TP-142土層断面 (南から) | | 8 |
| | 3 | TP-142完掘 (南から) | 図版27 | 1 |
| | 4 | TP-143土層断面 (南から) | | 2 |
| | 5 | TP-143完掘 (南東から) | | 3 |
| | 6 | TP-144土層断面 (南から) | | 4 |
| | 7 | TP-144完掘 (南から) | 図版28 | 1 |
| | 8 | TP-145土層断面 (南から) | 図版29 | 1 |
| | 9 | TP-145完掘 (南から) | | 2 |
| 図版24 | 1 | TP-146土層断面 (東から) | 図版30 | 1 |
| | 2 | TP-146完掘 (東から) | 図版31 | 1 |
| | 3 | TP-147土層断面 (南東から) | | 2 |
| | 4 | TP-147完掘 (南東から) | | 3 |
| | 5 | TP-148土層断面 (南東から) | 図版32 | 1 |
| | 6 | TP-148完掘 (南東から) | VI章-2 | |
| | | | 図版1 | 花粉化石・植物珪酸体 |

I 調査の概要

1 調査要項

事業名：日高自動車道厚真門別道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部

受託者：財団法人北海道埋蔵文化財センター

遺跡名：^{厚真}厚真3遺跡（北海道教育委員会登録番号：J-13-72）

所在地：^{厚真}勇払郡厚真町字^{厚真}厚真525-1ほか

調査面積：3,390㎡

受託期間：平成14年4月1日～平成15年3月31日

発掘期間：平成14年7月29日～平成14年10月25日

整理期間：平成14年11月1日～平成15年3月31日

2 調査体制

財団法人北海道埋蔵文化財センター

理事長 大澤 満（6月31日まで）

森重 権一（7月1日から）

専務理事 宮崎 勝

常務理事 畑 宏明（6月1日から）

第1調査部長 畑 宏明（兼務）

第4調査課長 遠藤 香澄（発掘担当者）

主 査 鎌田 望（発掘担当者）

主 任 中田 裕香

主 任 笠原 興

主 任 芝田 直人

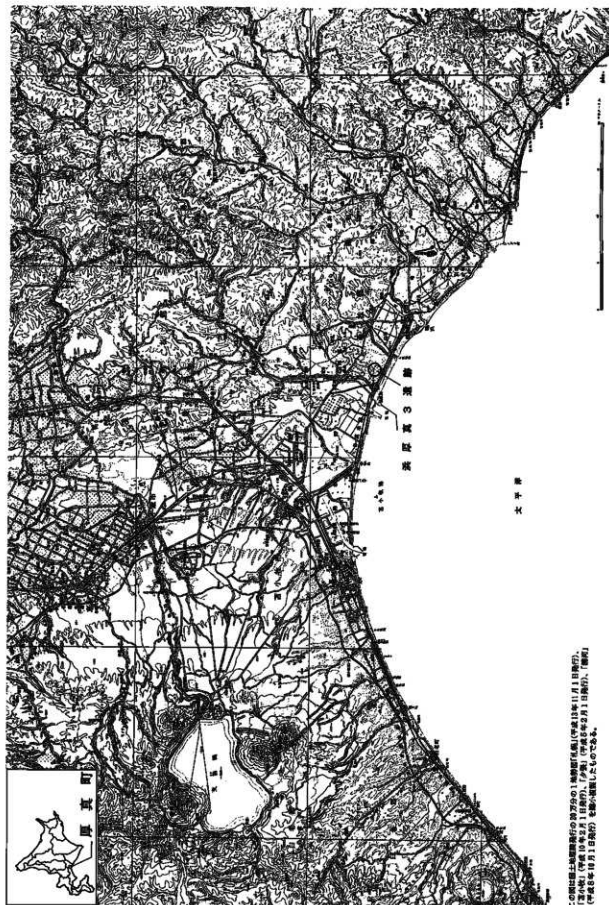
文化財保護主事 山中 文雄（発掘担当者）

3 調査にいたる経緯

日高自動車道は苫小牧市から浦河町まで、日高地方太平洋岸の町を通る総延長120kmの高規格幹線道路である。建設事業は昭和63（1988）年度から着手され、この間平成10（1998）年7月には苫小牧東ICから沼ノ端西ICまでの4kmが、続いて同10月に厚真ICに至る15.7kmが開通し、いずれも暫定供用区間となっている。厚真静内間の55kmが着工準備を含む事業区間で、その先浦河までは計画区間である。現在、厚真門別間20kmの建設工事が進められており、このうち厚真IC～鷗川IC（8.6km）間は平成15（2003）年夏に供用開始の予定である。

この厚真門別間の道路建設にかかる埋蔵文化財包蔵地に関しては平成5（1993）年6月に北海道開発局室蘭開発建設部と北海道教育委員会（以下道教委）の間で事前協議がなされた。これを受けた道教委文化課では平成5年8月に所在確認調査を実施し、平成8（1996）年8月以降、平成11（1999）年、平成12（2000）年および平成13（2001）年に厚真町、鷗川町、門別町内の遺跡について順次試掘による範囲確認調査を行っている。

範囲確認調査を行った遺跡で工事計画の変更が困難で発掘調査を必要とする埋蔵文化財包蔵地は厚



この図は上掲調査報告の図2の方角の1:50,000縮尺の地形図(平成13年11月1日発行)、「厚真町」(平成13年11月1日発行)、「厚真町」(平成13年11月1日発行)、「厚真町」(平成13年11月1日発行)を縮小して作成したものである。

真町内1か所（浜厚真3遺跡）、鷗川町内4か所（宮戸3遺跡、宮戸4遺跡、米原3遺跡、米原4遺跡）、門別町内2か所（チャシコツバナクシナイ遺跡、コムカラ遺跡）の計7か所である。

平成12（2000）年度より、室蘭開発建設部から財団法人北海道埋蔵文化財センターが委託を受け発掘調査を実施している。これまで平成12年度に鷗川町の4か所の遺跡を、平成13（2001）年度には宮戸4遺跡の調査を行い、それぞれ報告書が刊行されている（北埋調報153、北埋調報168）。このうち宮戸3遺跡と米原3遺跡の調査はすべて終了している。

浜厚真3遺跡については平成8年8月に最初の試掘調査が実施されている。今年度拡張調査した「西側部分」を含む37,500㎡を対象に行われているが、遺構・遺物ともに検出されていない。その後、工事計画が進展する中、平成13年6月には前回調査した東側に連続する範囲7,700㎡についての試掘調査が実施された。土壌、Tピットと土器片、フレイク等が検出され、この結果をもとに発掘調査を要する範囲約2,600㎡が提示された。

第3年次にあたる平成14（2002）年度の日高自動車道関連の調査については鷗川町宮戸4遺跡と米原4遺跡の2遺跡合わせて7,600㎡を対象に行う計画に基づき、5月7日から開始した。両遺跡ともに継続調査である。浜厚真3遺跡については平成15（2003）年度に調査を予定していた。

調査が順調に進む6月中旬、室蘭開発建設部苫小牧道路事務所（以下道路事務所）と埋文センターとの間で発掘進捗状況の報告等について打合せが行われた。この際、今年度調査予定の宮戸4遺跡「樹林部分」の調査にあたっては、樹木の伐採の前にイモッペ川の改修と町道切り替えの終了が前提条件であることが示された。樹木伐採については対外交渉が難航しており、7月中の伐採は困難な状況であった。5月、6月での調査の進捗状況から、8月中には2か所の現道部分を残り宮戸4遺跡と米原4遺跡の調査が終了する見通しであった。この時点で道路事務所側からは樹木の少ない範囲を調査する方法の検討等が提案された。

現地での打合せ後、調査担当者（埋蔵文化財センター）からの報告を受けた道教委文化課では道路事務所と協議を行った。宮戸4遺跡「樹林部分」の調査方法や着手時期については、不確定要素が多いこと等から、文化課ではこの段階で浜厚真3遺跡の調査を新たに取り込む内容の検討を道路事務所に打診している。発掘調査が進展する中、「樹林部分」等の取り扱いについては引き続き両者間で調整がなされていた。

7月4日、道路事務所から「樹林部分」については次年度以降に先送りし、浜厚真3遺跡（当初計画では2,600㎡）を取り込む内容が提示された。7月中旬には、宮戸4遺跡の樹林部分（1,300㎡）は次年度以降と決定された。

以上のような経過で、7月下旬から宮戸4遺跡の調査と並行して浜厚真3遺跡の表土、火山灰除去を始めとした設営準備や周辺の環境整備を始めている。本格的調査は宮戸4遺跡水田部分の調査が終了した9月上旬から開始した。包含層の残存状態は良くはなかったが、予想をはるかに上回る数のTピットが検出されたことから、調査中の9月下旬には道教委文化課の指導のもと、範囲確認の再試掘調査を実施している。この結果、Tピット群が当初予定範囲の東側と西側の両方向にさらに拡がっていることが確かめられたことから、これらの区域も今年度調査を行うこととした。最終的な調査面積は3,390㎡である。このような調査の経過は今年度刊行の宮戸4遺跡・米原4遺跡の報告書においても説明してある（北埋調報185）。

このほか、今年度は門別町内の遺跡について門別町教育委員会が、9月～11月にチャシコツバナクシナイ遺跡の調査を実施し、早期・中期の遺物とTピット9基が検出されている（発掘担当者；文化財係長川内谷 修氏）。

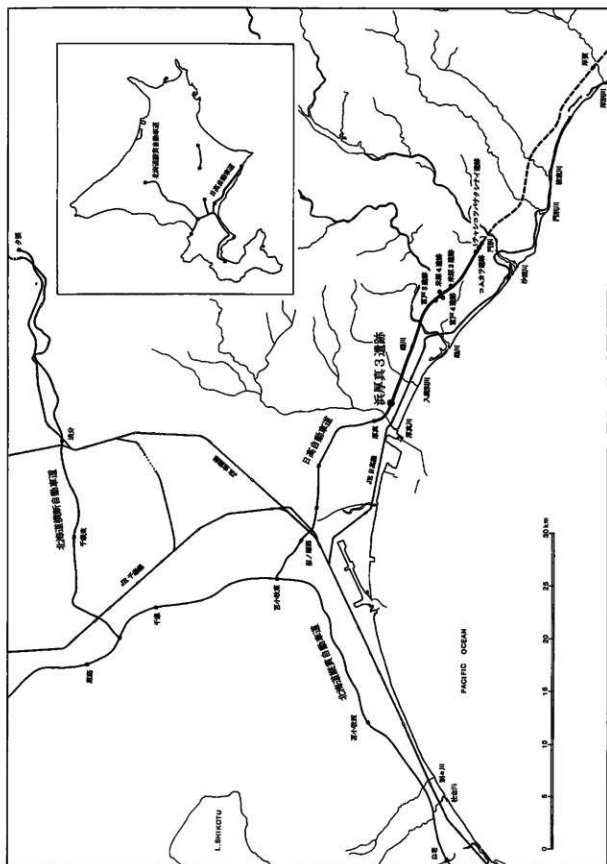


図 I-1-2 日高自動車道と浜厚真3道路の位置

4 調査の経過と概要

浜厚真3遺跡は厚真町市街地の15kmほど南西に位置する浜厚真地区にある。二級河川厚真川の左下流左岸にあたり、現海岸線から直線距離にして2kmほど内陸、標高7m～12mの台地縁部にある。調査前は農地で主に牧場として利用されていた。

前述のように浜厚真3遺跡に関する協議が進む7月中旬、室蘭開発開発建設部苫小牧道路事務所と現地打ち合わせを行い、8月上旬からは重機を導入して攪乱層を含む表土や残存部では厚さ40cm～50cmで堆積する火山灰（樽前a・樽前b・有珠b降下火山灰）層を除去する作業を開始した。

調査区のほぼ中央の平坦部では牧場として造成されていたため、(あるいはそれ以前の耕作による)削平がほぼ全域で認められた。北側では土砂採取により2m以下の深部まで掘削されており、大型ゴミが埋め立てられている攪乱部分もあった。平坦部から続く南東側は急激に落ち込む斜面で火山灰が1m以上もあり、泥炭層が厚く堆積する低湿地であった。掘り下げていくと常に水が溜まる状態であった。

表土、火山灰層除去の結果、上位の包含層（縄文時代晩期～アイヌ文化期）であるⅢ層はIラインよりも北側の11m～8mの斜面とそれに続く平坦部のごく限られた範囲にのみ残存していた。そして、調査区中央部の標高7m～8mの平坦面ではほぼ全域において、縄文時代の包含層であるV層の中心（Vb～Vc層）まで削平されている状態であることが分かった。また、調査範囲の西端（35ライン）に2か所3本、南東端（44ライン）にも1本電柱があり、さらに調査区東側の一部をエゾヤマザクラの記念植樹域が占めていた。いずれも表土掘削のできない状態であったことから、苫小牧道路事務所と道教委文化課に状況を報告した。これらの取り扱いについては将来的に「電柱」の移設計画が無いこと、「植樹部分」についても現状を保つ旨の回答が道路事務所側から示され、文化課の判断により、今年度の調査範囲から除外することとなった。

縄文時代の遺物包含層の残存状態は不良であったが、上部が削平されていることは遺構の有無の確認という観点からは好条件であった。平坦部では黒色土や黄褐色土の溝状や長楕円形を呈する落ち込みが密集して検出され、その形状からTピットが相当数あることが分かった。調査開始までの段階で確認できたTピットは75基余であり、当初予想をはるかに上回る数であった。

8月下旬、宮戸4遺跡の調査が現町道部分を残しほぼ終了した時点で、調査員、作業員ともに浜厚真3遺跡へ移動し、9月2日から本格的調査に着手した。終了予定は10月24日である。調査区全域をジョレンで清掃した後、北側斜面に残る包含層（Ⅲ層～V層）の調査と南東部泥炭層の堆積する低湿地の調査、および平坦部にある40数基のTピット精査を開始した。

北側斜面の包含層（Ⅲ層～V層）からは遺物はほとんど出土せず、Tピット数基が検出される程度であった。平坦部ではTピットの精査と並行して残存するV層の掘り下げを行った。V層中からは主に縄文早期後葉の遺物が散点的に出土する状態であった。全体として遺物が稀薄なことから遺構調査に主力を注ぎ調査を進めていった。

調査開始から10日ほど経過した9月中旬には、すでに90基を上回る数が検出されており、そしてTピットの連なりが当初予定範囲の東西両方向にさらに拡がっていることが予測できた。このような遺跡の状況については道教委文化課と苫小牧道路事務所の双方に報告した。文化課からはTピットの分布範囲の拡がりを確認するため1、2週間中に範囲確認の再試掘調査を実施したい旨が調査事務所に伝えられた。

調査事務所の報告を受け、9月26日には道教委文化課と苫小牧道路事務所および埋蔵文化財センターの三者で浜厚真3遺跡の調査範囲等についての打合せが行われた。この際「電柱」と「記念植樹」

部分の取り扱いについて、将来的な工事計画の有無を再度確認した。調査が進む中、「電柱」を保存した範囲とその周辺からTピットの一部分（P-94）が検出されていたからである。

再試掘調査については遺構検出が可能となるⅥ層まで重機で掘削する方法で実施することとなり、現地において文化課担当者と大まかな調査範囲についての確認を行った。後日、図面において調査が必要な範囲を示された。「西側部分」は25～34ライン間の約600㎡、「東側部分」はHライン以北の43～48ライン間約150㎡の範囲である（図Ⅲ-1-1）。

翌27日から、重機を導入しⅦ層またはⅧ層までの掘削を開始した。その後人力で掘削面を精査した結果、「西側部分」からは30基以上、「東側部分」からは20数基の落ち込みが検出された。「西側部分」ではTピットは丘状の微地形の裾部を取り巻くように検出され、Mラインよりさらに北側へも拡がるのが十分に予想できた（図Ⅳ-2-2）。また、26ライン以西の範囲においても同様であった。しかし、Mラインよりでは掘削は遺構の輪郭が捉えられる最小範囲に留めている。調査の進捗を予測すると、これ以上の広範な面積を掘削することは、10月下旬が調査終了予定であることから判断して無理な状況であった。また、すぐ傍らは排土の運搬通路にあっていた。

この再試掘の結果については、10月上旬に掘削範囲と検出状況の図面を添えて文化課と道路事務所へ報告した。道路事務所からは「西側部分」が最優先であることが先の打合せの際に伝えられていた。10月下旬までの発掘期間内にこの部分の遺構調査は概ね可能と判断できたことから、直ちに調査に着手した。標高の低い地点のTピットは掘り下げの度に水が溜まり、底面まで完掘できない状態でやや手間取ったが、調査は順調に進み、中旬には「東側部分」の遺構についても着手している。

調査日程を1日延長し、10月25日の発掘期間内に検出されたすべてのTピットの調査を終了した。最終的な調査面積は790㎡増の3,390㎡で、検出されたTピットは173基である。

なお、発掘調査期間の終了前日に、道路事務所から「本線に近い電柱2本（33ラインと36ライン間）の移設を行う予定である」との連絡が調査事務所に入った。先の打合せの場では移設計画が無いことから、調査対象から除外した部分である。このため、移設する場合は発掘調査が必要であるが、この件に関しては現地で対応することはできない旨を道路事務所側に伝え、同時に道教委文化課へはこの内容について連絡した。

冬季整理作業が進む平成14年12月上旬、道教委文化課から浜厚真3遺跡の来年度以降の発掘範囲について調査担当課としての試案を求められた。発掘範囲については、①33ラインと36ライン間にある電柱部分、②今年度拡張した調査区の西端である26ラインからさらに西側へ50mほど延長した北東へ延びる道路部分までの範囲、③Mラインより北側では工事用地範囲内の全域を調査対象とするのが望ましいとの見解をまとめ、図面を添えて報告した。

（遠藤香澄）

5 調査結果の概要

遺構はTピット173基、土坑1基、焼土14ヶ所が検出された。

Tピット(TP-1~173)の大半は台地と低湿地の間にある平坦部で検出された。形態は長径1.5~2mの溝状が大半を占め、底面が幅広いものは全体の1割程度である。後者の殆どには抗跡がみられ、抗跡どうしの重複例もある。Tピットどうしの重複は15件あり、土層断面で確認された限りでは、いずれも短い方が後に構築されている。覆土は自然埋没とみられるものが殆どであるが、埋め戻されたと考えられるTピットが3基確認された。規模や長軸方向の類似するTピットには、2基1組等、配列の想定されるものがある。時期の特定はできないが、厚真川を挟んで位置する「苫小牧東部工業地帯の遺跡群」での調査結果から類推すると、縄文時代中期後半~後期初頭の可能性がある。なお、Tピットが構築されたとみられる土層(Va層等)について、花粉分析・植物珪酸体分析を依頼したところ、当時の遺跡周辺はキク亜科やイネ科等の生息する開けた草地であったと推測されている(Ⅵ章-2参照)。

土坑(P-1)は皿状の形態であり、Tピットと判断されなかったものである。

焼土は白頭山-苫小牧テフラより上位のⅢ層で1ヶ所、Vc層上面・上位で13ヶ所検出された。Ⅲ層の焼土(F-1)は検出された層位から擦文時代~アイヌ文化期、Vc層の焼土(F-2~14)は周囲の遺物から、縄文時代早期後半、東銅路Ⅱ式期とみてよいであろう。Vc層の焼土(F-8・11)から採取した炭化クルミ殻、炭化材について放射性炭素年代測定(AMS法)を依頼したところ、どちらも6,890±40(yBP)と測定されている(Ⅵ章-1参照)。

遺物は土器780点、石器等1,868点、合計2,648点が出土している。土器は縄文時代早期後半、東銅路Ⅱ式に相当するものがVc層から多く出土している。他の東銅路式系や、縄文時代中期後半、同後期初頭・後葉、続縄文時代後半のものもあるが少ない。石器等の大部分は黒曜石製の微細なフレイクで、焼土(Vc層)の周囲から出土したものが多く、Vc層からは石鏝、石錐、スクレイパー等の他、2点ではあるが石鏝が出土している。これらの石器はVc層における土器の出土状況からみて、縄文時代早期のものであろう。(山中文雄)

表I-5-1 検出遺構数一覧

遺構種別	Tピット	土	坑	焼	土
基	数	173	1	14	

表I-5-2 出土遺物点数一覧

分 類	土 器		石 器 等					
	点 数	遺 構	分 類	点 数		分 類	点 数	
				遺 構	包含層		遺 構	包含層
I 群b-1類	82	321	石 鏝	3	40	石 斧	2	1
I 群b-3類	1		石 槍・ナイフ	1	3	た た き 石		4
I 群b-4類	18	2	石 錐		4	く ほ み 石	1	
I 群b類細分不能		66	スクレイパー		7	す り 石	2	1
Ⅲ 群b-2類		11	ピエス・エスキーユ	1		石 錘		2
Ⅲ 群b類細分不能		3	R フレイク	9	30	砥 石		3
Ⅳ 群a類ナゴブ式		87	U フレイク	15	47	加工痕のある礫		4
Ⅳ 群 c 類		183	石 核・原 石	3	5	礫・礫 片	11	22
Ⅵ 群 b 類		1	フ レ イ ク	423	1224			
分 類 不 能		5						
小 計	101	679	小 計				470	1398
合			計				571	2077

II 遺跡の位置と環境

1 位置と環境

遺跡の所在する厚真町は、北海道胆振地方の東部を流れる厚真川流域の町である(図I-1-1)。同川の中・下流域では早くから水稲栽培が行われ、現在では胆振管内有数の米作地帯として知られている。河口一帯は厚真と呼ばれ、かつては勇払原野から続く湿地帯であった。

厚真3遺跡は厚真川の河口から東北東へ約3km、現標高7~12mの台地縁部に位置する(図II-1-1)。旧地形図をみると、遺跡から現海岸線までは湿地帯となっており、遺跡が地形の境界部分に立地していることがわかる(図II-3-1)。5万分の1地形図から割り出した位置(世界測地系)は北緯42度36分36秒、東経141度51分37秒である。

旧地形図では遺跡付近の湿地帯からトッポ、パンケシュブン等の小川が流れ出している(図II-3-1)。安政5(1858)年、厚真川下流の右岸を通った松浦武四郎は、トッポについて「トツホ(右小川)、此邊落地(やち)多し」と記している(『東蝦夷日誌』)。なお、『厚真村史』によれば、トッポは「子・沼」「小沼」、パンケシュブンは「下流のシュブン川」(シュブンはウグイ)の意味とされる。パンケシュブンには昭和42(1967)年、大量のアカハラ(産卵期のウグイ)が遡上してきたという(『厚真の旧地名を尋ねて』)。

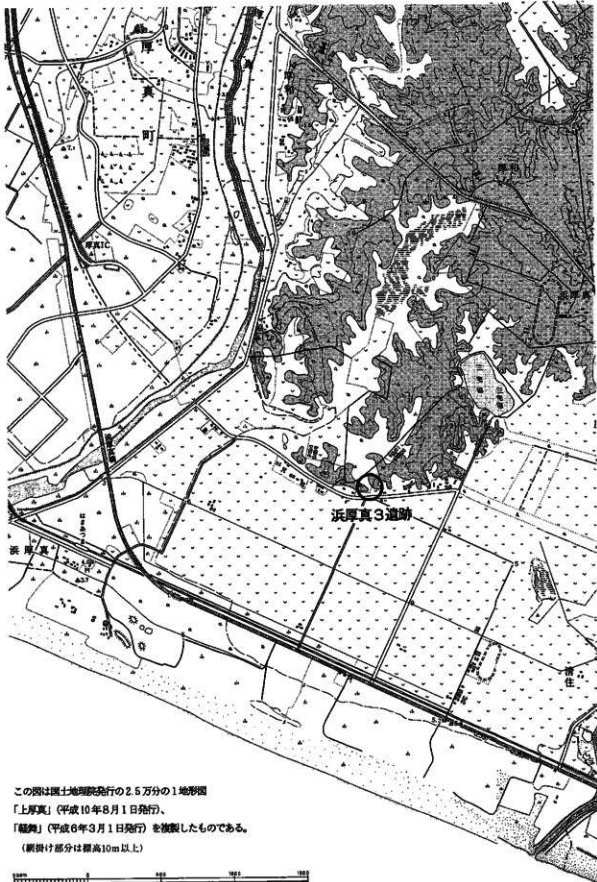
厚真の気候は、太平洋沿岸に位置するため、夏に海霧が発生し易い。このため日照時間も短く、農業にはあまり適さないようである。反面、秋と冬は晴天の日が多く、積雪は20cm前後と日本海側に比べ少ない。産業は明治期から牧畜・酪農が多く営まれている。水産業は一時隆盛を極めたものの戦後になって不漁が続いたため、ホタテガイ等の養殖が行われるようになった。昭和51(1976)年、苫小牧東部工業地帯の建設に関連して、苫小牧港(東港)の築港が開始された。同55(1980)年には北海道電力苫厚真火力発電所の運転開始、東港の一部が供用される等、厚真川河口付近の変貌よりは著しい。

2 地 形

本遺跡とその周辺は勇払原野の東部に位置し、地形は台地と沖積低地に大別される。上述したように、遺跡はこれらの地形の境界部分に立地している。

台地は約4.1万年前(許はか2001)と考えられている支笏第1テフラ(Spfa-1)から成る火山灰台地である。海水準変動(海進・海退)や、河川により開析され、現在は海側へ半島状に取り残された格好になっている。厚真真での頂部高は標高約15m、沖積低地との比高は約5mである。台地の縁辺は侵食により樹枝状に入り組んだ形態を呈している。

沖積低地の大部分は湿地帯で、かつては苫小牧市勇払から鶴川付近にまで広がっていた。厚真川の現河口から勇払、ウトナイ湖にかけての帯が湿地化した過程は、以下のように推定されている(池田はか1995)。すなわち、約6,000年前の縄文海進において、勇払-沼ノ端間に砂州が形成され、その内陸側(勇払-沼ノ端より東側)は次第に内湾的環境となった。約3,000年前、内陸側の閉塞は一段と進み、この結果、湖(現在の弁天沼周辺)と泥炭の堆積する低湿原へ移行した、というものである。調査区の南東部分では、約2,500~3,000年前とされる樽前cテフラの下位に泥炭層が1m以上堆積しており、遺跡周辺でもおむね同様の変遷が考えられる。(山中)



図Ⅱ-1-1 遺跡位置図

3 歴史的環境

胆振東部地帯の勇払は、近世の頃には東部第一の漁場といわれた所である。遺跡のある厚真町はこの勇払原野の東部にあり、開拓以前はハンノキやタモ、ヤナギ、カツラ、ナラ、タモ等が多くあり、クルミの密生した所もあったという。「ユウフツ」の語義については以下のような説がある。

永田方正による『北海道蝦夷語地名解』（初版1891年：明治24年）の複製版（1984年）には次の様に記してある。胆振国勇払郡の項である。Yup putu ユーブ プト 温泉川口と書かれている。また、「アイヌ語地名資料集成」のなかの上原熊次郎による「蝦夷地名考并里程記」では次のように注記されている。「夷語ユウフツ」の略語なり。則、温泉の口と云ふ事。扱、ユウとは温泉の事。プツとは水口の事にて、此川の支流所々に温泉のあるゆへ、地名になすといふ。扱又、此所より西地イシカリ江川傳通路、休泊地名左の通。（後略）となっている。同じく山田秀三の『アイヌ語地名の研究2』でも、「勇払は松浦氏も永田氏も、ユー・プツ「Yu-put 温泉（川）の・口」と訳しているが、古図には「イフツ」「イブツ」の形が多く、疑問である。ユー・プツは後世の転訛した音に、解をとりつけたものらしい。」と記載されている。さらに「だいぶ前に、鶴川のアイヌ系古老とたちと川歩きをした。その老人たちに勇払のことを尋ねるとイブツ、あるいはイブチと答える。I-put（その・口）、あるいはI-puchi（その・その口）であったこと、疑いを容れない。（中略）「つまり、鮭のよくとれた千歳地方、さらに進めば石狩川、日本海に行くその大切な交通路線の入口が勇払なのであった。それで、そこをただイブチ（その・その入口）と呼び、誰にでも通用していたと見るべきではなからうか。あるいは、昔この川の筋が大沼だったので、その沼の口の意味で呼んだものだろうか。」と書かれている。また、勇武津資料館発行の案内には「アイヌ語の「イ・プツ」（その・入口）を意味し、“それ”はシコツ（現在の千歳市）を指す。当時千歳川は蝦夷地最大の鮭の産地で、秋になるとたくさんの鮭が日本海から石狩川にのぼり、千歳川に遡上した。新巻などに加工された鮭は美々川、ウトナイ沼、勇払川を丸木船で下り、勇武津の浜に運ばれて、北前船で関西や江戸へ運ばれた。勇払の地名は、初め片仮名でユーブツ・イブツなどと表記されていたが、後に漢字で表された。」と説明されている。

すなわち「イ・プツ」とは重要なところ（シコツ）への入り口をさすという解釈が適切であろう。

厚真（アツマ）の地名は寛文9（1669）年のシャクシャインの戦い以後の松前藩の記録に「商場、あつまへつ」として表れる。藩政時代にはシコツ十六場所のうち、上アツマとアツマの二場所があった。

『北海道史』によれば、17世紀中葉の寛永17（1640）年の6月に胸ヶ岳が噴火し、「津波により舟百余艘破損、民夷溺死七百余、降灰越後に及ぶ。」と記されている。この時、山麓に居住していたアイヌ約三十余戸が難を逃れ浜厚真に移り住んだと伝えられている。

その後、寛政11（1799）年の幕領化までにアツマ場所として統合され、勇払会所の支配下にあった。

安政5（1858）年の夏には松浦武二郎が厚真川流域を踏査し詳細を「安都摩日誌」の項に残している。

中略「扱此編は六月廿一日ユウフツを出立して、アツマフトより入りて、川岸の東よりキムンコタン、チケツベ等の村を見、トンニカ村に入りて止宿し、翌二日滞留、カヒウの少し上まで上り帰て、廿三日ムカワ川すじのニワンえ越せし紀行」なれども（後略）。

このように、当時の厚真川流域には多くのコタンが存在し、集落に戸数の多い事や、キムンコタンなどではすでに畑作が盛んであった事等が記録されている。

明治初期の勇払郡の村区画を見ると三四ヶ村からなっており、厚真村は四ヶ村に分かれていた。

これらを明治6(1873)年に厚真村として行政上一村に統合したものが現在の厚真町の前身である。原名「アツマ」については次のようないくつかの語原説がある。すべてほぼ原文のまま引用する。永田方正による『北海道蝦夷語地名解』(初版1891年:明治24年)の復刻版(1984年)には以下の様に記してある。

Atomap, =at oma-p アトマ^マ オヒヨウ楡アル處 「アツ」ハ「アツシ」ヲ織ル樹ノ名「オマ」ハ有、「ア」ハ處ノ義「プ」ノ発音殆^マト無聲ナリ故ニ和人ハ「アツマ」ト訛ルナリ舊説「アツマ」ハ^マ鼠ガ川ヲ泳ギシ處ノ義又「アツ」ハ木鼠ノ義ナドアルハ誤リナリ今厚真村ト稱ス

『アイヌ語地名資料集成』の上原熊次郎による「蝦夷地名考并里程記」では「アツマ」は以下の様になっている。

小休所 川舟渡 夷語アツマなり。則、もゝがの遊ぶといふ事。現、アツとはもゝがと申験の事。マーとは遊ぶ、又は焼る等と申事にて、昔時もゝが此川を遊び渡りしを夷人見しより地名になすと云ふ。

また、J・バチュラーの「アイヌ地名考」では次の様である。

「AZUMA」(厚真) - At-ma。次のどちらかの意味であろう。「輝く潟」「輝く半島」。MAは、水地についていわれる場合は「潟」、陸地についていわれる場合は「半島」の意。しかし、ATのほうは「輝く」「葦紐」という三つの意味を持っていると思われる。この川の河口の内部はとても長く、浅く、広く、水の流れがゆっくりしている。そして、勇払と鶴川の海岸線に沿って砂丘の中を流れているので、水がとても澄んでおり、隔の光にきらめいている。

山田秀三「アイヌ語地名の研究2」[厚真川]の項では 国鉄浜厚真駅の西を流れる川。[松浦氏「東蝦夷日誌」]昔モモカ(むささび)という獣が遊び越せしを以てなづけしと。アツは獣の事にて、マは渡る義也と。又アツは木鼠(りす)の事とも云えり。(註、at ばんどり。ma 泳ぐ)

[永田地名解] アトマ^マ「At-oma-P 楡(オヒヨウ)・ある・処」。pの発音殆ど無声なり。故に和人はアツマと訛るなり。

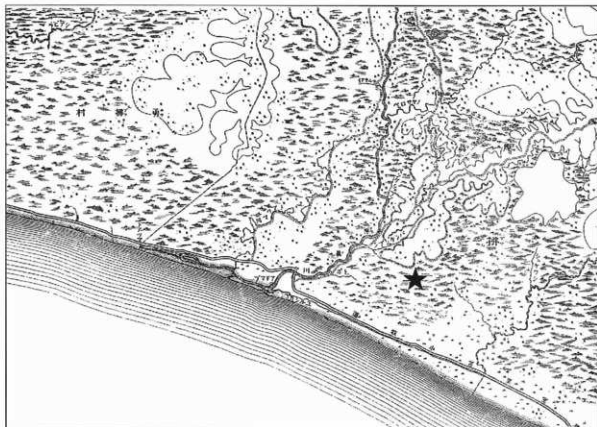
「駅名の起源」の項では、永田氏と同解、一応は穏当な考え方である。ただしこの意味ならば At-ush(おひょう・多い)がふつうの形である。

あるいはアツマム At-tomam→ar-tomam(向う側の・やち)のような地名だったのかも知れない。(arはtの前につくとatとなる)。

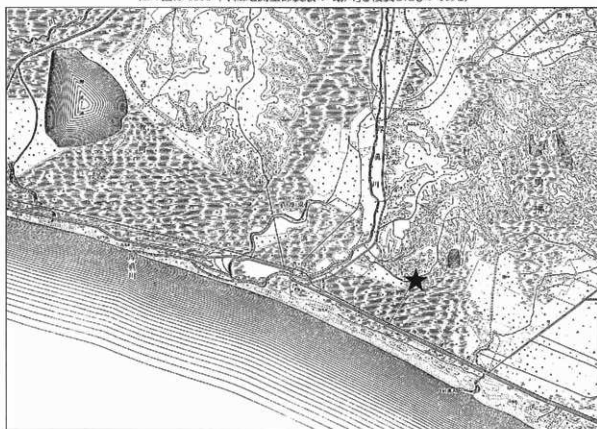
厚真(アツマ)についての解釈は以上のようなものである。

厚真町は大きく南部の海岸地帯、河川の平野部、さらに北西部の山岳地帯に分ける事ができる。町の中央を貫流する厚真川流域は肥沃な農耕適地であり、現在では「厚真米」の名とともに胆振地方の穀倉として知られている。南部の海岸部では往時は漁獲量も多かったが、いまでは減少の傾向を示している。山間部からは木材や薪炭材、さらに坑木等が産出されていた。大正7・8年頃が最も多く木炭が生産された時代でもあった。

(笠原 興)

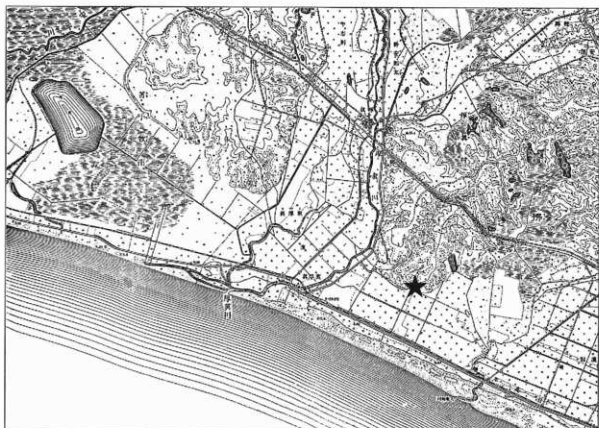


(この図は1896年、陸地測量部製版の「鶴川」を複製したものである)

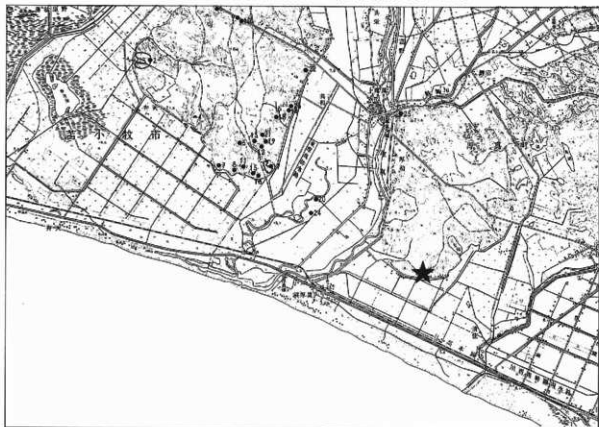


(この図は1921年、大日本帝国陸地測量部発行の「鶴川」を複製したものである)

図Ⅱ-3-1 5万分の1地形図(1) ★…浜厚真3遺跡



(この図は1949年、地理調査所発行の「鶴川」を複製したものである)



(この図は1979年、文化庁刊行の遺跡地図を拡大複製したものである)

図II-3-2 5万分の1地形図(2)

4 周辺の遺跡

厚真町内では平成14年現在、当遺跡を含め、75ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が知られている(表Ⅱ-3-1)。早い時期に開墾が進んだ北西部では、かなり内陸部まで遺跡の分布が見られ、山林等で分布が不明であった南東部でも、近年の土砂採取等で包蔵地の分布が明らかになってきている。

町内の先史遺跡の調査は小学校教育の一環として昭和初期に始まり、昭和28年には「厚真村郷土研究会」も発足され、町内各所の分布調査が行われている。また「厚真村郷土研究会」は昭和37年に朝日遺跡や共和遺跡の発掘調査等も実施している。

「厚真村郷土研究会」と「厚真村教育委員会」によって昭和31(1956)年に刊行された『厚真村古代史』には当時の遺跡の状況が以下の様に記されている。

「明治38年に振老用水路設置のための工事中に、相当量の土器が出土した」と伝えられている。その後の「大正9年に同地点を通過する厚真・幌内間の森林軌道敷設工事中にもこれと類似の遺物が多く出土した」とも書かれている。現在これらの遺物は残されていない。

地域別に遺跡の概要を見ると南部地区では浜厚真・上厚真・周文・上周文・軽舞・当麻内・西周文の各地区から多くの遺物や住居跡等が発見され報告されている。

周文地区からは円筒上層式土器片等の他に土壙墓や食料貯蔵庫跡等の遺構もあったとの記述がある。昭和20年の上厚真小学校運動場増設工事の際には、数多くの土器や石器が見つかり、軽舞川のほとりの台地上からも多くの遺物が出土している。主体は縄文時代中期と後・晩期のものと思われる。

また、当麻内からは原形に近い擦文式土器が出土し、住居跡と思われるものもあったと書かれている。当麻内を除く他の地域の遺物は、いずれも縄文時代中期のものが多いようである。

中部地区では振老・仁達幌・上振内・振内・東老軽舞の各地域から遺物等が出土している。

上振内からは村公営住宅建設の際に円筒上層式土器片のほか、堅穴らしきものや、副葬品を伴うアイヌ文化期の土壙墓も見つかっている。また、上振内朝日ヶ丘中央小学校校庭付近から「野幌式土器」(縄文時代後期)の完形土器が2点出土している。

北部地区は様々な伝説や物語の発祥地として名高い地域である。楢山・幌内・顔美字の各地区からは、円筒上層式を主体とした土器や石器等が見つかっている。顔美字は厚真川の支流流域でこの地域はその昔、追分や紅葉山方面へ越す通路となっていたらしいことなどから、生活に適していた場所であった事が予想される。

その後、昭和48(1973)年から苫小牧東部工業地帯の開発に伴う埋蔵文化財分布調査が始まり、昭和51年からの発掘調査(静川1・厚真1遺跡)によって、これ以後またまった考古学的な知見が得られている(表Ⅱ-3-2)。なかでも、昭和57年に行なわれた静川遺跡の調査では、縄文時代中期の環濠など非常に貴重な遺構が発見され、国指定史跡として保存されることに至っている。

この苫東地区での調査結果を要約すると以下ようになる。

静川5・8・14遺跡は厚真台地上にあり、縄文時代早期末の集落や副葬品を伴う墓群等が検出され、静川14遺跡からは旧石器時代の遺物も出土している。

縄文時代前期の遺跡には静川30・柳館遺跡がある。海岸線に面する静川台地の縁辺部に位置し、集落や貝塚が形成されている。

縄文時代中期前半では厚真1遺跡・柏原18遺跡がある。柏原18遺跡は柏原台地の西端にあり、集落跡や墳墓等が見つかっている。

縄文時代中期後半から後期初頭にかけては遺跡が内陸部まで広く分布し、多くの住居跡等が見つかっている。厚真7・8・静川5・25・37遺跡等があり、静川遺跡の環濠もこの時期のものである。

II 遺跡の位置と環境

縄文時代後期中葉以後は集落の分布がやや希薄になる。柏原5遺跡からは台地上ではない川沿いの低地部から住居跡や土壇墓等が見つかっている。また苦東調査以前より周知の遺跡であった綱木遺跡では、縄文晩期の土壇墓を主体とした複合遺跡であることが明らかにされている。

統縄文時代・撥文時代も集落遺跡は少ない。統縄文時代では静川22・ニナルカ遺跡があり、撥文時代の遺跡には厚真町の共和遺跡がある。

厚真町域で苦東関連の調査対象となった遺跡は昭和51年から昭和55年にかけて行なわれた厚真川右岸の厚真1・2・3・7・8・10・12・13遺跡と共和遺跡の9ヶ所である。

厚真1遺跡は、静川台地の東端に近い沢に面した北東向きの丘陵部に位置している。

昭和51年に発掘調査が行なわれ、縄文時代中期中葉の住居跡2軒、Tピット12基が確認されている。出土遺物も縄文時代中期が主体である。

厚真2遺跡は厚真1遺跡から100m程北東寄りの沢の奥に立地する。昭和52年に調査が行なわれた。その結果、Tピット8基のほか14の遺構と僅か15点の遺物が出土している。

厚真3遺跡は静川台地の東端で、共和遺跡の南側に位置している。昭和53・54年に調査が行われTピット31基、土坑39基、焼土跡16ヶ所の計86の遺構が確認され、狩猟の場を主体とした性格の遺跡であることが報告されている。

厚真7遺跡は沢を挟んで厚真3遺跡の西側に位置し、昭和52・53年に調査が行なわれた。結果は縄文時代中期末の住居跡8軒、Tピット79基、土坑33基、焼土跡46ヶ所等、167の遺構が検出され、縄文中～晩期を主体とした遺物が出土している。

厚真8遺跡は静川台地の南東端から入った沢の奥にあり、南東向きに突き出た舌状部の先端に位置している。昭和52年に発掘調査が行なわれ、縄文時代中期後葉の住居跡4軒、土坑19基、焼土跡23ヶ所など55の遺構が検出された。遺物の主体は縄文時代中～晩期と統縄文時代のものである。

厚真10遺跡は厚真8遺跡に隣接し、沢に面した丘陵部の縁辺に位置している。昭和52・53年に調査が行われ、Tピット3基、土坑3基、焼土跡1ヶ所の遺構が検出された。遺物の主体は縄文時代中期と晩期である。

厚真12遺跡は静川台地の最も南側に位置している。昭和54年に調査が行なわれ、統縄文時代の土壇墓4基、土坑10基など18の遺構と縄文～撥文時代に向けた遺物が出土している。

厚真13遺跡は共和遺跡の北側にあり、舌状台地の最先端部に立地している。昭和55年に調査が行なわれ、狩猟場として報告がされている。縄文早期・前期・晩期・撥文期の遺物が出土している。

共和遺跡は厚真3遺跡と厚真13遺跡に挟まれるように位置している。古くから「西周文遺跡」という名前で知られていた。『厚真村古代史』によれば「厚真川の下流右岸の段丘地帯に在る三条氏の宅地内から前北式土器の破片が多数発見された」との記述がある。昭和53年の発掘調査時には、この地域ではじめて撥文時代の住居跡が2軒見つかっている。その他に土坑27基、焼土跡23ヶ所など63の遺構が検出され、約70,000点の遺物が出土した。この遺物の殆どは縄文時代晩期の所産である。

このほかの苦東関連以外の発掘調査には、平成11年の鯉沼2遺跡と平成12年の豊川1遺跡がある。鯉沼2遺跡からは18の遺構が検出され、内訳は縄文時代のTピット13基、焼土が5ヶ所である。豊川1遺跡からは縄文時代中期の竪穴住居跡1軒と、晩期と思われる土壇が1基検出されている。

(笠原)



図Ⅱ-4-1 厚真町の遺跡分布図(1) ★…厚真3遺跡

(この図は国土地理院発行の5万分の1地形図「鶴川」[早来]を複製したものである)

表Ⅱ-3-1 厚真町の遺跡一覧

No.	種別	遺跡名	所在地	時期
1	遺物包含地	上厚真遺跡	厚真町字厚真66, 70~72, 74, 79, 81, 82	縄文中期(内層上層式)、縄文後期(北廣式)、 恵山式、後北式、掃文式
2	遺物包含地	厚真遺跡	厚真町字厚真205, 206, 211, 212	内層上層式、前北式
3	遺物包含地	朝日遺跡	厚真町字朝日209-1-3~5, 210, 211-1, 212-1~3~7-8, 214-1-2	縄文後期、恵山式、掃文式
4	遺物包含地	磯島1遺跡	厚真町字磯島151-1, 154-2, 156-2, 157-1-3	内層上層式、前北式
5	遺物包含地	長河遺跡	厚真町字長河68-1-4, 93-1-2, 95-24-45	内層上層式、前北式
6	遺物包含地	豊内1遺跡	厚真町字豊内208-2, 213, 222, 224~226, 227-1, 2, 230	内層上層式、前北式、恵山式
7	遺物包含地	豊内1遺跡	厚真町字豊内616-1-5	内層上層式、前北式
8	遺物包含地	共和遺跡	厚真町字共和110-1, 115-1	縄文晩期
9	遺物包含地	厚厚真遺跡	厚真町字厚厚真214	
10	遺物包含地	厚真10遺跡	厚真町字共和125	
11	遺物包含地	厚真11遺跡	厚真町字共和88-2, 93-1-2, 95-2	縄文晩期
12	遺物包含地	豊沢1遺跡	厚真町字豊沢339, 340, 379, 380	後北式
13	遺物包含地	東和遺跡	厚真町字東和404, 405, 411~413, 440, 441	前北式
14	遺物包含地	豊内2遺跡	厚真町字豊内438-2-6-8-9	内層上層式
15	遺物包含地	高丘3遺跡	厚真町字高丘40, 41, 46-1-2-4, 58	内層上層式
16	チャーン跡	原丘チャーン跡	厚真町字原丘73-1, 76	
17	遺物包含地	原丘1遺跡	厚真町字原丘139, 142	
18	遺物包含地	原丘2遺跡	厚真町字原丘115-1, 122-20-22	縄文晩期(タンネットーL式)
19	遺物包含地	高丘3遺跡	厚真町字高丘237-3-4	
20	遺物包含地	厚真1遺跡	厚真町字共和126	
21	遺物包含地	厚真2遺跡	厚真町字共和126	
22	遺物包含地	厚真3遺跡	厚真町字共和110-2, 126	
23	遺物包含地	厚真4遺跡	厚真町字共和137, 138-2, 140	
24	遺物包含地	厚真5遺跡	厚真町字共和128, 129-1, 130-1, 137, 138-1-2	縄文前・中・後・晩期、続縄文(恵山式、後北式)掃文
25	集落跡	厚真1遺跡	厚真町字豊内487-1-9-15	余市式
26	遺物包含地	厚真7遺跡	厚真町字共和116, 117, 118-1	縄文前・晩期
27	遺物包含地	厚真8遺跡	厚真町字共和125, 126	
28	遺物包含地	厚真9遺跡	厚真町字共和15	
29	遺物包含地	厚真12遺跡	厚真町字共和115-1, 118-2, 119-121, 124	
30	遺物包含地	豊3遺跡	厚真町字豊内372-1-3	縄文中・晩期、掃文 内層上層式
31	遺物包含地	高丘4遺跡	厚真町字高丘67, 68, 69-1, 70-73	縄文
32	遺物包含地	高丘5遺跡	厚真町字高丘187~189	
33	遺物包含地	高丘6遺跡	厚真町字高丘232-1-2, 233, 235, 283, 288, 291	
34	遺物包含地	高丘7遺跡	厚真町字高丘304~307	
35	遺物包含地	高丘8遺跡	厚真町字高丘329, 331	
36	遺物包含地	高丘9遺跡	厚真町字高丘507~1, 598, 601, 602, 605, 605-2, 606, 612, 612-2, 614, 615, 617, 619, 619-2, 621, 623-1-2-5-6, 628, 631	後北式
37	遺物包含地	富里1遺跡	厚真町字富里42-1-4-12-14, 43-1-10-12, 45-1, 48, 49, 51-1, 54-1	内層上層式、ホッケマ式
38	遺物包含地	豊内4遺跡	厚真町字豊内882-1, 883-3, 884	縄文中期?
39	遺物包含地	コヤマ4遺跡	厚真町字富里404	
40	遺物包含地	本郷3遺跡	厚真町字本郷214, 215, 217, 299, 309	内層上層式
41	遺物包含地	本郷1遺跡	厚真町字本郷192-1-2	内層上層式、タンネットーL式
42	遺物包含地	本郷2遺跡	厚真町字本郷438~1~3, 439, 445, 446-1, 447, 448-1~3, 449-1~3, 451, 452	網走山式
43	遺物包含地	宇除1遺跡	厚真町字宇除無番地	
44	遺物包含地	宇除2遺跡	厚真町字宇除268-1, 269, 270-1-2	前北式
45	遺物包含地	美里1遺跡	厚真町字美里201-1, 204	
46	遺物包含地	豊沢2遺跡	厚真町字豊沢504, 600~604, 606~611	掃文
47	遺物包含地	豊沢3遺跡	厚真町字豊沢355~362	後北式
48	遺物包含地	豊沼1遺跡	厚真町字豊沼80-1~9, 81-1~4, 84-1~3, 85-1~4	
49	遺物包含地	豊沼2遺跡	厚真町字豊沼105-1, 107, 108, 111~114	内層上層式
50	遺物包含地	豊沼1遺跡	厚真町字豊沼278~281, 285, 373, 383, 384	否別式
51	遺物包含地	豊沼3遺跡	厚真町字豊沼187~190	内層上層式
52	遺物包含地	豊沼3遺跡	厚真町字豊沼355-1	
53	遺物包含地	厚真13遺跡	厚真町字共和111	内層上層式・タンネットーL式
54	遺物包含地	本郷3遺跡	厚真町字本郷123	縄文早期(真備山式)
55	遺物包含地	高丘11遺跡	厚真町字高丘177-1	縄文晩期
56	遺物包含地	高丘12遺跡	厚真町字高丘122-1-2, 124, 125-1-2, 126, 128, 129-1	縄文
57	墳墓	豊内5遺跡	厚真町字豊内	客入~明治
58	遺物包含地	豊沢4遺跡	厚真町字豊沢103~113-8	縄文
59	遺物包含地	厚和2遺跡	厚真町字厚和200, 202, 宇浪厚真398-8	縄文中期
60	遺物包含地	厚和3遺跡	厚真町字厚和205-7	縄文中期(余市式、豊林式)
61	遺物包含地	厚和4遺跡	厚真町字厚和198, 宇浪厚真417-2	縄文中期
62	遺物包含地	豊沼4遺跡	厚真町字豊沼74~30	縄文
63	遺物包含地	厚和5遺跡	厚真町字厚和21-1, 22	縄文
64	遺物包含地	豊和2遺跡	厚真町字豊和10-1	縄文中期?
65	遺物包含地	豊沼5遺跡	厚真町字豊沼534-8-29	余市式
66	遺物包含地	厚和6遺跡	厚真町字厚和45	縄文前期(中野式前後)
67	遺物包含地	宇浪厚真2遺跡	厚真町字宇浪厚真396-2	縄文早期
68	穴・遺構	豊沼2遺跡	厚真町字豊沼159-1, 161-1	縄文
69	遺物包含地	豊島遺跡	厚真町字豊島175-1-9	縄文中期?
70	集落跡	厚和7遺跡	厚真町字厚和407-3	縄文後期前期(タブコブ式)
71	集落跡	豊川1遺跡	厚真町字豊川21, 23	縄文晩期(大洞系)
72	遺物包含地	宇浪厚真3遺跡	厚真町字宇浪厚真507, 523, 598	縄文 当報告
73	遺物包含地	ニッパロ沢遺跡	厚真町字豊島78-2	縄文後期(ホッケマ式)、縄文晩期(豊々3式)
74	遺物包含地	豊真神社遺跡	厚真町字豊真78-2	縄文早期(豊真三角形の礎石)、縄文後期
75	遺物包含地	入野沼遺跡	厚真町字豊沼17~19-5	縄文中期?

* 遺跡 No.は、北海道教育委員会の縄文文化財保護地カド登録番号による。



図Ⅱ-4-2 厚真町の遺跡分布図(2)

(この図は国土地理院発行の2.5万分の1地形図「厚真」(標内)「上厚内」を複製したものである)



図Ⅱ-4-3 厚真町の遺跡分布図(3)

(この図は国土庁国土地院発行の2.5万分の1地形図「厚真」「厚真」(厚真)を複製したものである)



図Ⅱ-4-4 厚真町の道跡分布図(4)

(この図は国土庁国土地院発行の1:5万分の1地形図「釧路」上厚真「道跡」「厚真」を複製したものである)

表 II-3-2 苫小牧東部工業地帯遺跡一覧

No	種別	遺跡名	所在地	時 期	備 考
1	遺物包含地	柏原 1 遺跡	苫小牧市	縄文晩期	
2	遺物包含地	柏原 2 遺跡	苫小牧市	縄文晩期	
3	遺物包含地	柏原 3 遺跡	苫小牧市	縄文晩期、縄文期	
4	遺物包含地	柏原 4 遺跡	苫小牧市	縄文晩期、縄文前期	一部調査済
5	土器群・埴器	柏原 5 遺跡	苫小牧市	縄文中・晩期～縄文晩期	一部調査済
6	遺物包含地	柏原 6 遺跡	苫小牧市	縄文期	
7	遺物包含地	柏原 7 遺跡	苫小牧市	縄文期	
8	遺物包含地	柏原 8 遺跡	苫小牧市	縄文・晩期、縄文前期	
9	遺物包含地	柏原 9 遺跡	苫小牧市	縄文晩期	
10	遺物包含地	柏原 10 遺跡	苫小牧市	縄文晩期	
11	遺物包含地	柏原 12 遺跡	苫小牧市	縄文晩期	
12	遺物包含地	柏原 13 遺跡	苫小牧市	縄文前・中・晩期	
13	貝 塚	柏原 14 遺跡	苫小牧市	縄文前期	
14	遺物包含地	柏原 15 遺跡	苫小牧市	アイヌ期	
15	埴 器	柏原 16 遺跡	苫小牧市	縄文前期～縄文晩期	
16	貝 塚	柏原 17 遺跡	苫小牧市	縄文前期	
17	土器群・埴器	柏原 18 遺跡	苫小牧市	縄文前・中・晩期、縄文期	
18	狩 猟 場	柏原 19 遺跡	苫小牧市	縄文期	
19	遺物包含地	柏原 20 遺跡	苫小牧市	縄文期	
20	遺物包含地	柏原 21 遺跡	苫小牧市	縄文期	
21	遺物包含地	柏原 22 遺跡	苫小牧市	縄文前期	
22	遺物包含地	柏原 23 遺跡	苫小牧市	縄文晩期	
23	遺物包含地	中沢 1 遺跡	苫小牧市	縄文期	
24	埋 没 点 点	創興丸木倉庫跡	苫小牧市	アイヌ期	
25	埋 没 点 点	創興丸木倉庫跡	苫小牧市	アイヌ期	
26	埋 没 点 点	創ノ尾遺跡	苫小牧市	縄文晩期	
27	遺物包含地	勝川 1 遺跡	苫小牧市	縄文晩期	
28	遺物包含地	勝川 2 遺跡	苫小牧市	縄文中～後期	
29	遺物包含地	勝川 3 遺跡	苫小牧市	縄文晩期	
30	遺物包含地	勝川 4 遺跡	苫小牧市	縄文前・後期、縄文前期	
31	貝 塚	勝川 5 遺跡	苫小牧市	縄文前・中・晩期	一部調査済
32	遺物包含地	勝川 6 遺跡	苫小牧市	縄文前・中・晩期	一部調査済
33	遺物包含地	勝川 7 遺跡	苫小牧市	縄文中～晩期	
34	土器群・埴器	勝川 8 遺跡	苫小牧市	縄文前～晩期	
35	遺物包含地	勝川 9 遺跡	苫小牧市	縄文前・中～縄文前期	一部調査済
36	遺物包含地	勝川 10 遺跡	苫小牧市	縄文前期	
37	遺物包含地	勝川 11 遺跡	苫小牧市	縄文中・後期	
38	遺物包含地	勝川 12 遺跡	苫小牧市	縄文晩期	
39	遺物包含地	勝川 13 遺跡	苫小牧市	縄文中・後期	
40	土器群・埴器	勝川 14 遺跡	苫小牧市	縄文中～晩期	
41	遺物包含地	勝川 15 遺跡	苫小牧市	縄文中・晩期	
42	埴器・土器群	勝川 16 遺跡	苫小牧市	縄文前期～縄文前期	
43	遺物包含地	勝川 17 遺跡	苫小牧市	縄文前期、縄文前期	
44	遺物包含地	勝川 18 遺跡	苫小牧市	縄文前・中期	一部調査済
45	狩 猟 場	勝川 19 遺跡	苫小牧市	縄文前期、縄文前期	一部調査済
46	土器群・埴器	勝川 20 遺跡	苫小牧市	縄文中・晩期、縄文前期	
47	土器群・埴器	勝川 21 遺跡	苫小牧市	縄文中・晩期	
48	土器群・埴器	勝川 22 遺跡	苫小牧市	縄文前期～アイヌ期	
49	遺物包含地	勝川 23 遺跡	苫小牧市	縄文中～後期、縄文前期	
50	遺物包含地	勝川 24 遺跡	苫小牧市	縄文前～後期、縄文前期	
51	貝 塚	勝川 25 遺跡	苫小牧市	縄文中～晩期、縄文前期	一部調査済
52	貝 塚	勝川 26 遺跡	苫小牧市	縄文中・晩期、縄文前期	一部調査済
53	遺物包含地	勝川 27 遺跡	苫小牧市	縄文中・晩期	
54	遺物包含地	勝川 28 遺跡	苫小牧市	縄文期	
55	遺物包含地	高 安 遺跡	苫小牧市	縄文前・中・晩期	
56	埋 没 点 点	興井 1 遺跡	苫小牧市	縄文前期	
57	遺物包含地	興井 2 遺跡	苫小牧市	縄文前・後・晩期	
58	遺物包含地	興井 3 遺跡	苫小牧市	縄文前期	
59	遺物包含地	山 岸 遺跡	苫小牧市	縄文中期	
60	遺物包含地	北 浜 遺跡	苫小牧市	縄文前～晩期	
61	遺物包含地	安藤 1 遺跡	苫小牧市	縄文前～晩期	
62	遺物包含地	安藤 2 遺跡	苫小牧市	縄文中・晩期、縄文前期	
63	遺物包含地	安藤 3 遺跡	苫小牧市	縄文前期	
64	遺物包含地	吉 田 遺跡	苫小牧市	縄文前・中期	
65	遺物包含地	長 倉 遺跡	苫小牧市	縄文中期	
66	遺物包含地	亀ヶ森 1 遺跡	苫小牧市	縄文中期	
67	遺物包含地	亀ヶ森 2 遺跡	苫小牧市	縄文前期	
68	遺物包含地	亀ヶ森 3 遺跡	苫小牧市	縄文前期	
69	遺物包含地	矢 野 遺跡	苫小牧市	縄文中・晩期	
70	土器群・埴器	ニナルカ遺跡	苫小牧市	縄文前～縄文前期	一部調査済
71	遺物包含地	亀ヶ森 遺跡	苫小牧市	縄文中・晩期、縄文前期	
72	土器群・貝 塚	柳 原 遺跡	苫小牧市	縄文前期	
73	埴 器	柳 水 遺跡	苫小牧市	縄文中・晩期	
74	遺物包含地	勝川 29 遺跡	苫小牧市	縄文晩期	
75	遺物包含地	勝川 30 遺跡	苫小牧市	縄文前・前・晩期	
76	遺物包含地	勝川 31 遺跡	苫小牧市	縄文晩期	
77	遺物包含地	勝川 32 遺跡	苫小牧市	縄文晩期	
78	遺物包含地	勝川 33 遺跡	苫小牧市	縄文期	
79	遺物包含地	勝川 34 遺跡	苫小牧市	縄文晩期	一部調査済
80	遺物包含地	勝川 35 遺跡	苫小牧市	縄文期	
81	埴 器	遠 浅 1 遺跡	早 来 町	縄文晩期	
82	遺物包含地	遠 浅 2 遺跡	早 来 町	縄文前・中・晩期	
83	遺物包含地	遠 浅 3 遺跡	早 来 町	縄文前・中期	
84	遺物包含地	遠 浅 4 遺跡	早 来 町	縄文前・中期、縄文前期	
85	遺物包含地	深 武 1 遺跡	早 来 町	縄文前・中期	
86	遺物包含地	深 武 2 遺跡	早 来 町	縄文前・中期、縄文前期	
87	遺物包含地	深 武 3 遺跡	早 来 町	縄文前・中・晩期	
88	遺物包含地	深 武 4 遺跡	早 来 町	縄文前期	
89	遺物包含地	深 武 5 遺跡	早 来 町	縄文前・中期、縄文前期	
90	遺物包含地	深 武 6 遺跡	早 来 町	縄文前・中期	
91	遺物包含地	深 武 7 遺跡	早 来 町	縄文前・中期	
92	遺物包含地	深 武 8 遺跡	早 来 町	縄文中・晩期	
93	遺物包含地	深 武 9 遺跡	早 来 町	縄文中期	
94	遺物包含地	深 武 10 遺跡	早 来 町	縄文前期	
95	土器群・埴器	厚 良 1 遺跡	厚 良 町	縄文中期	
96	狩 猟 場	厚 良 2 遺跡	厚 良 町	縄文中	
97	狩 猟 場	厚 良 3 遺跡	厚 良 町	縄文前期～縄文前期	
98	遺物包含地	厚 良 4 遺跡	厚 良 町	縄文中・後期、縄文前期	
99	遺物包含地	厚 良 5 遺跡	厚 良 町	縄文前期～縄文前期	
100	土器群・埴器	厚 良 6 遺跡	厚 良 町	縄文中・晩期、縄文前期	
101	土器群・埴器	厚 良 7 遺跡	厚 良 町	縄文中・晩期、縄文前期	
102	遺物包含地	厚 良 8 遺跡	厚 良 町	縄文晩期	
103	遺物包含地	厚 良 9 遺跡	厚 良 町	縄文中・晩期	
104	遺物包含地	厚 良 10 遺跡	厚 良 町	縄文期	
105	埴 器	厚 良 11 遺跡	厚 良 町	縄文期	
106	埴 器	厚 良 12 遺跡	厚 良 町	縄文前・中・晩期、縄文前期	
107	狩 猟 場	厚 良 13 遺跡	厚 良 町	縄文中期、晩期、縄文前期	
108	貝 塚	共 創 遺跡	厚 良 町	縄文晩期、縄文前期、縄文前期	
109	遺物包含地	浜 野 貝 塚	厚 良 町	縄文期	
110	貝 塚	弁天貝塚	苫小牧市	アイヌ期	一部調査済
111	狩 猟 場	勝川 36 遺跡	苫小牧市	縄文中～後期	
112	貝 塚	勝川 37 遺跡	苫小牧市	縄文中期、晩期、縄文前期	一部調査済
113	遺物包含地	遠 浅 5 遺跡	苫小牧市	縄文晩期	
114	遺物包含地	柏原 29 遺跡	苫小牧市	縄文前・中期	
115	遺物包含地	勝川 38 遺跡	苫小牧市	縄文前期	
116	遺物包含地	吉 田 2 遺跡	苫小牧市	縄文中・晩期	
117	遺物包含地	吉 田 3 遺跡	苫小牧市	縄文中期	
118	遺物包含地	山 岸 2 遺跡	苫小牧市	縄文中・晩期	
119	遺物包含地	深 武 11 遺跡	早 来 町	縄文前期	
120	遺物包含地	勝川 39 遺跡	苫小牧市	縄文中・晩期	



図Ⅱ-4-5 苫小牧東部工業地帯遺跡分布図

(この図は国土地理院発行の5万分の1地形図「鶴川」「苫小牧」「千歳」「早来」を複製したものである)

Ⅲ 調査の方法、遺物の分類

1 調査区の設定と調査の方法

(1) 調査区 (グリッド) の設定

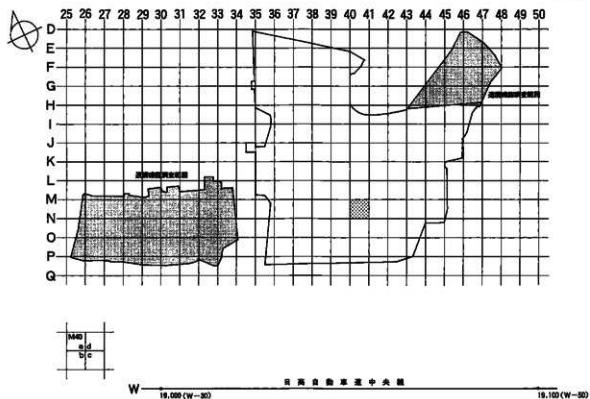
調査区の設定にあたっては、北海道開発局室蘭開発建設部の日高自動車道厚真門別道路工事の用地平面図 (縮尺 1 : 1000) を使用した。基軸線は工事予定中央線の S T A 19,000 と S T A 19,100 を直線で結び、Wラインとした。縦方向の基軸線は S T A 19,000 の Wラインと 90度 に直交する線を 30 ラインとした (従って S T A 19,000 は W-30 となる)。調査区は、過年度の日高自動車道発掘調査の例にならない、5 m × 5 m の方眼とし、北西端交点のアルファベットと数字の組み合わせで呼称している。例えば、Mラインと 40 ライン交点の南東側が M-40 区となる。

遺物の取り上げ等にあたっては、5 m × 5 m の調査区を 4 分割して 2.5 m × 2.5 m とし、反時計回りに a · b · c · d の記号を付けて行った (図Ⅲ-1-1)。

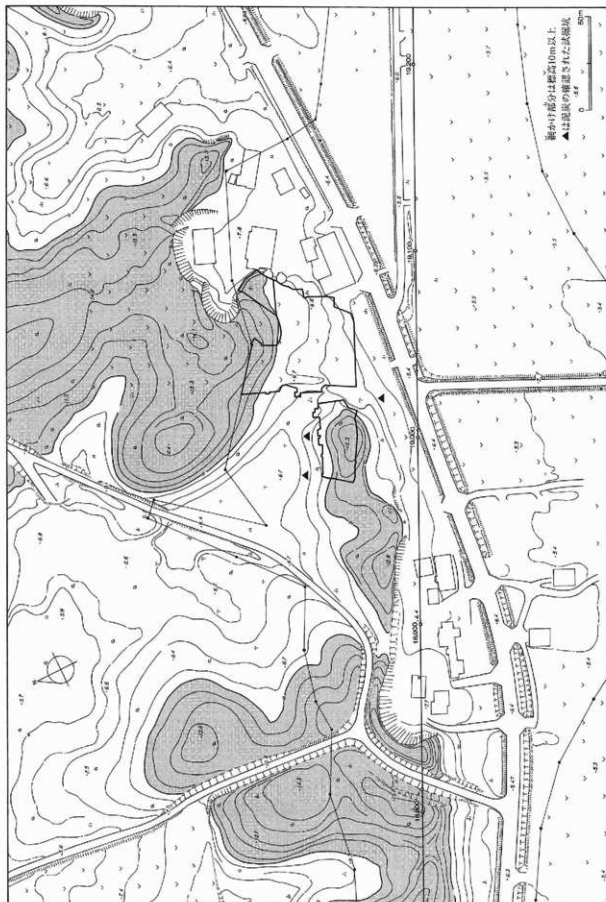
基軸線の基準点に用いた道路センターの座標軸は以下の通りである (平面直角座標第Ⅱ系)。

S T A 19,000 (W-30)	X = -154,625.589	Y = -31,660.775
S T A 19,100 (W-50)	X = -154,669.082	Y = -31,570.729

(山中)



図Ⅲ-1-1 調査区設定図



図Ⅳ-1-2 調査範囲と周辺の地形図

(2) 調査の方法

調査範囲は厚真川下流域左岸、現在の海岸線から約2km内陸にある海に向かって突き出た台地縁部の標高7～12mに位置する。南東側は急激に落ち込みかつての湿地帯に続いている。表土および火山灰を除去したところ、縄文時代晩期～アイヌ文化期の包含層であるⅢ層は、Iラインより北側の標高8～11mの斜面とそれに続く平坦部の一部、南東側斜面のみに残っていた。調査区中央部の標高7～8mの平坦部では、ほぼ全域が縄文時代の包含層であるV層の中位（Vb～Vc層）まで削平されていた。また、調査の進展に伴い、Tピットがさらに広範囲に拡がると判断され、9月末から再試掘調査を行なった。

北側斜面の調査

北側斜面とそれに続く平坦部の一部では、黒色土層（Ⅲ層）から人力調査を始めた。まず、表土除去・杭打ち後にⅢ層上面に残った厚さ1～5cm程の火山灰をジョレンで除去した。Ⅲ～Ⅵ層の各層については、調査区ごとに遺物の多寡、土層の変化を見極めながら移植ゴテと三角ホーにより2cmずつ掘り下げ、遺構・遺物が確認されなかった部分については、スコップにより深さ5cmの細かい刻み目を入れた後、ジョレンにより土を除去するという方法を繰り返して掘り下げて調査した。斜面部分ではVb層の堆積は見られなかった。遺構の調査については、後述する中央の平坦部と同様に行なった。

中央の平坦部の調査

中央の平坦部では攪乱層を除去して、ジョレンをかけて清掃したところ、ほぼ全面のVb層からVc層において、Tピットの落ち込みを75基検出した。そのため、まずTピットの調査を終了させ、その後に包含層を掘り下げていった。

落ち込みが確認されたTピットについては、その短軸で半載して、土層観察用の面を残して掘り下げた。半載する場合には移植ゴテ、鉄製の中華おたま、取って付き容器を斜めに切断したもの、ジョレンの柄に中華おたまや柄杓、移植ゴテを結合した道具、ロープを結んだバケツなど用いて掘り下げた。Vb層（褐色の砂壤土、Ⅳ層の二次堆積とされる）のために、Tピットは通常よりも上の層で検出することが出来たが、そのために、遺構も深く排土量が多くなった。焼土は、その周囲の同じ面の遺物との関係、焼土同士の関係の把握に努めた。

遺構調査後、Vb層～Ⅵ層の各層は調査区ごとに遺物の多寡、土層の変化を見極めながら、移植ゴテと三角ホーにより2cmずつ掘り下げ、遺構・遺物が確認されなかった部分については、スコップにより深さ5cmの細かい刻み目を入れた後、ジョレンにより土を除去するという方法を繰り返した。縄文時代の主たる遺物包含層であるV層については、基本的にはVa層（大部分削平されている）・Vb層・Vc層の三段階に分けて調査した。

中央の平坦部から南東側斜面への肩の部分は中央部よりも高くなっており、海側に向かってジャンプ台状を呈している。この部分では、表土・攪乱層を除去したところ、約4.1万年前の降下と推定されている支笏第1テフラ（Spfa-1）の軽石層が露出していた。

南東側斜面の調査

南東側斜面では、厚さ1m以上の火山灰が堆積しており、表土・火山灰を除去して、黒色土層（Ⅲ層）から人力調査を始めた。まず、表土除去・杭打ち後にⅢ層状面に残った厚さ1～5cm程の火山灰をジョレンで除去した。Ⅲ～Ⅵ層の各層は、調査区ごとに遺物の多寡、土層の変化を見極めながら移植ゴテと三角ホーにより2cmずつ掘り下げていき、遺構・遺物が確認されなかった部分については、スコップにより深さ5cmの細かい刻み目を入れた後に、ジョレンにより土を除去するという方法を繰り返して掘り下げて調査した。急激に落ち込んだ下の部分は泥炭層が厚く堆積する低湿地であり、掘

り下げていくと湧水のために常に水の溜まる状態となった。この部分については、毎朝ポンプにより排水し、水が引いてから排水しつつスコップで掘り下げて、遺物の有無を確認した。

拡張部分の調査

調査開始から10日ほど経過した9月中旬、すでに90基以上のTピットを検出しており、それらの連なりがさらに東西方向に広がっていると推定されたため、道教委文化課と苫小牧道路事務所に報告した。文化課からは1～2週間のうちに範囲確認の再試掘調査を実施する旨の連絡があり、9月26日に道教委文化課、苫小牧道路事務所、埋蔵文化財センターの三者で範囲確認の打ち合わせを行なった。9月27日からの再試掘調査は、Ⅳ層上面（褐色重粘土～壇塚土層）まで重機で掘削し、その範囲は東側拡張部分ではHライン以北の43～48ライン間の約150㎡、西側拡張部分では25～33ライン間の約600㎡となった。なお、この段階で、「電柱」「記念樹」の部分は将来的にも工事計画がないとのことで、再試掘調査範囲から除外された。

拡張部分では表土～Ⅵ層の土を除去してジョレンをかけて清掃したところ、東側拡張部分では20数基、西側拡張部分では30基以上のTピットを検出した。西側拡張部分では、Tピットが丘状の微地形の裾部を取り巻いて分布しており、Mラインより北側や26ラインより西側にさらに広がる様相を見せていた。しかし、排土の運搬経路や残りの調査期間の問題で更なる拡張は不可能であった。遺構の調査は中央の平坦部と同様に行なった。西側拡張部分Mライン側の標高の低い部分ではTピットを掘り下げると湧水があり、完掘できないものもあった。

遺物の取り上げ

包含層の遺物は、位置や層位を記録して、小発掘区ごとに取り上げ番号を付け取り上げた。微細な遺物の密集部分や焼土は土壌ごとに取り上げて水洗により遺物を採集した。遺構の遺物は覆土の流れ込みの遺物を除いて、実測図により位置、層位、標高を記録して取り上げることとした。出土状況に応じて写真や出土状況図など詳細に記録化に努めた。

遺物整理の方法

出土した遺物は、野外作業と並行して現地で水洗作業、大まかな遺物の分類、カード作成、遺物収集帳作成、注記を行なった。冬期の室内作業では、分類、カード・遺物収集帳・注記の点検や補正、土器の個体識別、接合・復元、石器や黒曜石剥片・礫片の接合、土器・石器の実測・製図、集計、写真撮影、記録類の整理を行なった。土器の接合・復元作業においては、同一個体ごとにまとめて遺構間、遺構と包含層間や層での破片の接合状況を明らかにすることに努めた。

なお、野外作業と並行して現地で行なう整理作業では、カード・遺物収集帳作成や注記作業について都合があった。現地では水洗作業のみ行い、速やかに遺物を搬送して、その後の整理作業は江別のセンターで行なったほうがよい場合もある。

注記作業の実態

注記については、10円玉より大きな土器片、実測の際に注記が実測を妨げない石器等、有意の礫・礫片を対象とした。ラッカーで下地を塗り、そこに遺跡略号（ハマ3）、調査区・小発掘区または遺構名、遺物番号、層位の順に、白のポスターカラーと面相筆により記入して、その上にラッカーを塗布した。例えば、TP-80の覆土から出土した遺物番号1番の遺物は、「ハマ3、TP-80、1、フクド」、M38グリッドの小発掘区bのVc層から出土した遺物番号4番の遺物は、「ハマ3、M-38-b、4、Vc」と記入される。

（鎌田 望）

2 土層の区分

浜厚真3遺跡の土層模式図と土層断面図を図Ⅲ-2-1・2に、土層の観察結果を表Ⅲ-2-1に示した。土層の観察にあたっては、『白老町 虎杖浜2遺跡(2)』(北理調報172)の観察項目を用いた。以下に虎杖浜2遺跡の観察項目を掲げる。

- 観察項目1 礫 ①岩石の種類、②混入量、③粒径、④形状、⑤風化の程度
 観察項目2 砂、シルト、粘土 ①土性区分、②色調、③粘着性、④堅密度
 観察項目3 層界
 観察項目4 その他 特徴的なもの

上記の項目の判定には『土壌調査ハンドブック』(ペドロジスト懇談会1984)、および『新版標準土色帖』(小山・竹原1996)を用いた。以下に各層の概要を「台地～平垣部」、「低湿地」に分けて述べる。なお、厚真川を挟んで位置する「苫小牧東部工業地帯の遺跡群」(以下、苫東)の基本層序との対応関係についても記載した。

「台地～平垣部」

I層:表土。上部は黒褐色、下部は黒色の砂土～砂壤土。苫東の第I層に相当。

II層:17・18世紀の降下テフラ。苫東の第II・III層に相当。

II a層:樽前aテフラ(T a-a)。1739(元文4)年降下。にぶい黄褐色の火山灰。層厚2cm程でII b層との間に薄い腐植層がみられる。苫東の第II層に相当。

II b層:樽前bテフラ(T a-b)。1667(寛文7)年降下。にぶい黄褐色の軽石。層厚50cm程。II c層との間に薄い腐植層がみられる。苫東の第III層に相当。

II c層:有珠bテフラ(U s-b)。1663(寛文3)年降下。浅黄褐色の軽石。層厚5cm程。

III層:黒色の重埴土～埴壤土。苫東の第IV層に相当。上位には10世紀降下とされる白頭山-苫小牧テフラ(B-Tm)がパッチ状にみられる。B-Tmより上位で焼土が1ヵ所検出された。

IV層:褐色～極暗褐色の埴土。土壌化した樽前cテフラの可能性が。台地部分では判然としない。苫東の第V層に相当か。

V層:黒色の埴壤土。苫東の第VI層に相当。北側の台地では下位の明度が高い。中位にV b層が堆積する場合、以下の3層に分けた。

V a層:黒色の埴土～埴壤土。Tピットが構築された層。下位にはV b層が多く混じる。

V b層:褐色の砂壤土。支笏第1テフラの風成二次堆積と考えられる。南西側の台地上で最も厚く約60cmを測る。北側の台地と南東側の低湿地を除いた調査区全域に堆積する。

V c層:黒褐色の埴土。上面～上位で焼土13ヵ所が検出された。縄文時代早期の遺物包含層で、東鋼路Ⅱ式土器等が出土している。

VI層:明褐色の埴壤土。V層・V c層とVII層との中間に位置する層。

VII層:褐色の重埴土～埴壤土。下位にVII b層が堆積する場合、以下の2層に分けた。

VII a層:褐色の重埴土～埴壤土。VII b層の上位に堆積するVII層の呼称。

VII b層:褐色の埴土中に軽石(V層)や砂・小礫のラミナがみられ、水成層と考えられる。

VIII層:支笏第1テフラ(Spfa-1)。約4.1万年前降下と考えられている(許ほか2001)。上部は酸化のため浅黄色、下部は灰白色を呈する軽石層。層厚2m以上。苫東の第XII層に相当。

Ⅹ層：褐色の重埴土。層厚10cm程。

Ⅹ層：クッタラ第1テフラ（K t-1）。約4.2万年前降下と考えられている（許ほか2001）。灰黄色の火山灰。基底は確認していない。

南西側台地は土層模式図に示していないが、V b層の堆積すること以外は北側台地と同様である。

「低湿地」

「Ⅰ層」、「Ⅱ層」は台地部分と同様である。

「Ⅲ層」に相当する層

① 層：黒色の埴壤土。上位にB-Tmがパッチ状にみられる。

①' 層：黒色の重埴土。泥炭を少量含む。上位にB-Tmがパッチ状にみられる。

「Ⅳ層」に相当する層

T a - c層：樽前cテフラ（T a - c）。2,500～3,000年前降下。にぶい赤褐色の火山灰。吉東の第V層に相当。

「Ⅴ層」に相当する層

② 層：黒褐色の埴壤土。Ⅶ層の軽石が多く混じる。

②' 層：黒色の重埴土。泥炭を多量に含む。Ⅶ層の軽石は殆ど混じらない。

③ 層：にぶい黄橙色の軽石。V b層に相当か。

「Ⅵ～Ⅶ層」に相当する層

④ 層：黒色の重埴土。

⑤ 層：暗褐色の砂壤土。

⑤' 層：暗褐色の泥炭。基底は確認していない。

なお、Ⅹ層は確認されていない。

北側台地		沖積低地	
頂部	斜面	平坦部	斜面～低湿地
Ⅰ			
Ⅱ a			
Ⅱ b			
Ⅱ c			
Ⅲ			①
V	Ⅳ		①'
	V a		②
	V b	②	③?
	V c		②'④
Ⅵ		Ⅵ～Ⅶ	⑤
Ⅶ		Ⅶ a	⑤'
Ⅶ		Ⅶ b	
Ⅶ		Ⅶ	
Ⅹ			
Ⅹ			

遺構の土層

遺構の土層についても、「虎杖浜2遺跡(2)」、「遺構の層位」で説明されている「遺構の、ある層を構成する基本層序各層の混在割合 堅密度 その他」という項目の表記を用いた。「混在割合」については、「新版標準土色帖」の「面積割合(%)」を用いて判断すべきであったが、時間的な制約もあって、各調査員が相対的に認識した割合となっている。「堅密度」は『土壤調査ハンドブック』を用いて「すこぶるしょう」、「しょう」、「軟」、「堅」、「すこぶる堅」、「固結」の6段階に区分した。

- A主体 Aが主体となっている
- A+B AとBが等量混じる
- A>B AにBが多量に混じる
- A>B AにBが少量混じる

図Ⅲ-2-1 土層模式図

(山中)

表Ⅲ-2-1 土層観察表

地形	層位名	層				砂・シルト・粘土				層界	その他	
		岩石の種類	透入量	粒径	形状	風化の程度	土性区分	色調	粘着性			堅硬度
台地	I	軽石	15%程度	2~8mm程度	角礫	未風化	砂土~砂壤土	上部7.5Y R3/2(黒梅) 下部7.5Y R2/1(黒)	弱	しよう	判然	表土
	II a	-	-	-	角礫	-	-	10Y R7/3(におい黄緑)	なし	軟~堅	明瞭	火山灰、Ta-a
	II b	軽石	-	2~10mm程度	角礫	未風化	-	10Y R7/4(におい黄緑)	なし	堅	明瞭	Ta-b
	II c	軽石	-	2~5mm程度	亜角礫	未風化	-	10Y R8/3(浅黄橙)	なし	軟~堅	明瞭	Us-b
	III	-	-	-	-	-	重粘土~埴壤土	10Y R2/1(黒)	中	軟~堅	明瞭	火山灰、B-Tm
	B-Tm	-	-	-	-	-	-	2.5Y 5/2(暗黄鉄)	なし	軟~堅	明瞭	Ta-c?
	IV	軽石(層)	1%程度	2mm程度	亜円礫	腐朽	埴土	上部7.5Y R2/3(暗黄鉄) 下部10Y R3/3(暗梅)	中	軟~堅	明瞭	-
	V	軽石(層)	3%程度	2mm程度	亜円礫	腐朽	埴土	上部7.5Y R2/1(黒) 下部10Y R2/1(黒)	弱	軟~堅	判然	-
	V a 下位	軽石(層)	10%程度	2~8mm程度	亜円礫	腐朽	埴土	7.5Y R3/2(暗梅)	中	軟~堅	判然	-
	V b	軽石(層)	25~30%程度	2~10mm程度	亜角礫	腐朽	埴土	10Y R4/4(梅)	弱	軟~堅	明瞭	重の二次堆積層
平坦	V c	軽石(層)	30~40%程度	2~10mm程度	亜角礫	腐朽~風化	埴土	7.5Y R3/1(暗梅)	中	堅	判然	-
	VI	軽石(層)	25~30%程度	2~10mm程度	亜円礫	腐朽	埴土	7.5Y R5/6(明梅)	中	堅~すこぶ堅	漸変	-
	Ⅷ (Ⅷ a)	軽石(層)	5%程度	2~8mm程度	亜円礫	腐朽	重粘土~埴壤土	10Y R4/4(梅)	中	堅~すこぶ堅	漸変	-
	Ⅷ b	軽石(層)	50%程度	2~50mm程度	亜円礫	腐朽	砂土~埴土	10Y R4/4(梅)	中	堅~すこぶ堅	-	-
	Ⅷ	軽石	-	2~25mm程度	角礫	風化~腐朽	-	上部2.5Y 7/4(浅黄) 下部10Y R8/1(灰白)	なし	堅	明瞭	Spfa-1
	Ⅷ	-	-	-	-	-	重埴土	10Y R4/4(梅)	中	軟~堅	明瞭	-
	X	-	-	-	-	-	-	2.5Y 7/2(灰黄)	なし	堅	-	火山灰、Kt-1
	①	軽石(層)	下位に3%程	2~10mm程度	亜角礫	風化~腐朽	埴壤土	10Y R1.7/1(黒)	弱	軟~堅	明瞭	判然(Ta-c)
	①'	-	-	-	-	-	重埴土	10Y R1.7/1(黒)	中	軟	明瞭	判然(⑤)
	低湿	Ta-c	-	-	-	-	-	-	5Y R4/4(におい赤梅)	なし	堅	明瞭
②		軽石(層)	30%程度	2~15mm程度	亜角礫	風化~腐朽	埴壤土	10Y R3/2(暗梅)	中~強	軟	明瞭(③)	火山灰、Ta-c
③		軽石(層)	-	2~15mm程度	-	-	-	10Y R6/3(におい黄緑)	なし	堅	明瞭(④)	-
④		-	-	-	-	-	重埴土	10Y R1.7/1(黒)	中~強	軟	明瞭(⑤⑤')	V b?
⑤		軽石(層)	7%程度	2~10mm程度	-	-	砂埴土	10Y R3/3(暗梅)	弱	堅	明瞭(⑥)	-
⑤'	-	-	-	-	-	-	7.5Y R3/4(暗黄赤)	なし	軟	-	泥炭層	

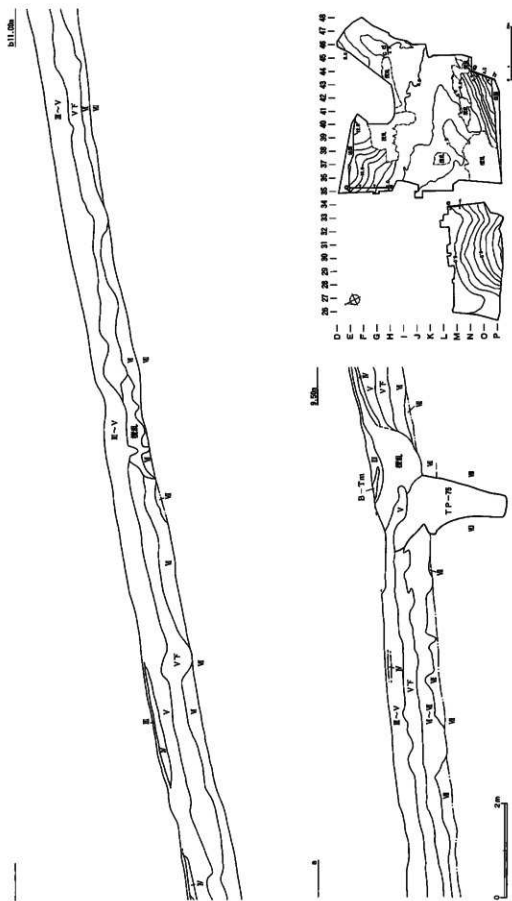
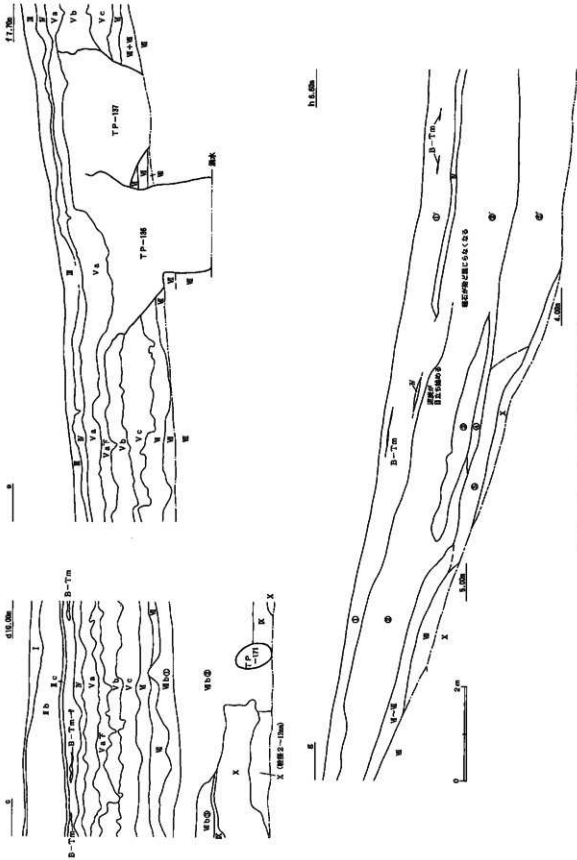


图 1-2-2 土壤断面图 (1)



図Ⅲ-2-3 土層断面図(2)

3 遺物の分類

(1) 土 器

分類にあたっては、石狩低地帯、噴火湾～太平洋沿岸での調査結果を基にした分類を踏襲した。出土した土器には縄文時代早期から晩期のもの、統縄文時代のものがある。縄文時代早期の資料をⅠ群とし、以下順次前期、中期、後期、晩期をⅡ群、Ⅲ群、Ⅳ群、Ⅴ群とした。統縄文時代のものはⅥ群、撥文期のものはⅦ群とした。

Ⅰ群 縄文時代早期に属するもの。

- a 類：貝殻腹縁圧痕文、条痕文のある土器群。
- b 類：縄文、撚糸文、絡糸体圧痕文、組紐圧痕文、貼付文などのある土器群。
 - b-1 類：東銅路Ⅱ式、東銅路Ⅲ式に相当するもの。
 - b-2 類：コックロ式に相当するもの。
 - b-3 類：中茶路式に相当するもの。
 - b-4 類：東銅路Ⅳ式に相当するもの。

Ⅱ群 縄文時代前期に属するもの。

- a 類：縄文の施された丸底・尖底の土器群。
 - a-1 類：網文式に相当するもの。
 - a-2 類：春日町式、静内中野式に相当するもの。
- b 類：円筒土器下層式、植苗式、大麻Ⅴ式に相当するもの。

Ⅲ群 縄文時代中期に属するもの。

- a 類：円筒土器上層式、萩ヶ岡Ⅰ式に相当するもの。
- b 類：円筒土器に後続する土器群。
 - b-1 類：天神山式、萩ヶ岡Ⅱ式、萩ヶ岡Ⅲ式に相当するもの。
 - b-2 類：柏木川式、萩ヶ岡Ⅳ式に相当するもの。
 - b-3 類：北筒式、トコロⅥ類、煉瓦台式あるいは静狩式に相当するもの。

Ⅳ群 縄文時代後期に属するもの。

- a 類：余市式、タブコブ式、手稲砂山式、入江式、大津式に相当するもの。
- b 類：ウサクマイⅠ式、船泊上層式、手稲式、鮭淵式に相当するもの。
- c 類：堂林式、三ツ谷式、御殿山式に相当するもの。

Ⅴ群 縄文時代晩期に属するもの。

- a 類：大洞Ⅱ式、上ノ国式に相当するもの。
- b 類：大洞Ⅰ式、大洞Ⅱ式に相当するもの。
- c 類：大洞Ⅲ式、大洞Ⅳ式、タンネトウⅠ式に相当するもの。

Ⅵ群 統縄文時代に属するもの。

- a 類：大狩部式、トニカ式、東歌別式に相当するもの。
- b 類：恵山式に相当するもの。
- c 類：後北式に相当するもの。

Ⅶ群 撥文時代に属するもの。

(鎌田)

(2) 石器等

平成12・13年度に調査した鶴川町イモッベ川流域の遺跡群（米原3・米原4・宮戸3・宮戸4遺跡）での石器分類（北埋調報153・168）を基本的に踏襲した。石器の特性や機能に直接言及するため、記号は用いていない。それぞれの未製品や破損品、破片、剥片などは本来の分類に含めた。

1) 剥片石器

石鏃

石槍・ナイフ

石錐

つまみ付ナイフ

スクレイパー

ピエス・エスキュー

Rフレイク

Uフレイク

石核・原石

2) 剥片

フレイク・チップ（「フレイク」で統一した）

3) 磨製石器

磨製石斧・石斧石材（すべて「石斧」に含めた）

4) 礫石器

たたき石

くぼみ石

すり石

石錘

砥石

5) 礫・礫片

加工痕のある礫

礫・礫片（人為的な打ち割り・被熱の可能性のあるもの）

(3) 土製品・石製品

出土していない

（芝田直人）

Ⅳ 遺構と遺構出土の遺物

1 概要

検出された遺構は、Tピット173基、土坑1基、焼土14ヵ所である。

Tピット（TP-1～173）の大半は、台地と低湿地の間にある平坦部分で検出された。台地の斜面部分で検出されたものは少ない。形態は長径1.5～2mの溝状が多く、底面が幅広のものは全体の約1割である。前者には1m程度の短いものから4mを超す狭長なものまでみられる。後者のほとんどには杭跡があり、多いもので15本検出されている。また、杭跡どうしが重複する例もある。Tピットどうしの重複は15件ある。このうち先後関係が確認された11件では、いずれも長径の短い方が後に構築されている。覆土の観察から、Tピットは壁面の崩落等によって、自然に埋没したとみられるが、埋め戻されたと考えられるTピットが3基確認された。規模や長軸方向を同じくするものには、2基1組などの配列が想定されることもある。構築時期の特定はできないが、厚真川を挟んで位置する「苫小牧東部工業地帯の遺跡群」での調査結果から類推すると、縄文時代中期後半～後期初頭の可能性がある。なお、Tピットが構築されたとみられる土層（Va層等）について、花粉分析・植物珪酸体分析を依頼したところ、当時の遺跡周辺はキク亜科やイネ科等の生息する開けた草地であったと推測されている（Ⅵ章-2参照）。

土坑（P-1）は皿状の形態であり、Tピットと判断されなかったものである。

焼土は白頭山-苫小牧テフラより上位のⅢ層で1ヵ所、Vc層の上面・上位で13ヵ所検出された。Ⅲ層の焼土（F-1）は、検出された層位から縄文時代～アイヌ文化期のものとみられるが、この時期の遺物は得られていない。Vc層の焼土（F-2～14）は2、3ヵ所のまとまりが点在している。周囲からはI群b-1類（東鋼路Ⅱ式相当）土器や、黒曜石製のフレイク、炭化したクルミ殻等が出土している。検出された層位と周囲の遺物から、縄文時代早期後半、東鋼路Ⅱ式期とみてよいであろう。なお、F-8の炭化クルミ殻、F-11の炭化材について、放射性炭素年代測定（AMS法）を依頼したところ、いずれも6,890±40（yBP）と測定されている（Ⅵ章-1参照）。

2 Tピット（図Ⅳ-2-1～63/表Ⅳ-2-1～9）

173基検出された。各Tピットの属性は表Ⅳ-2-4に示し、ここではTピットの分類、地形、確認状況、覆土、形態と規模、杭跡、重複、分布、配列、時期について概括して述べる。

Tピットの分類

本遺跡と距離的に近い「苫小牧東部工業地帯の遺跡群」（以下、苫東）との対比をはかるため、「苫東分類（①底面の長短比、②底面の長径、③杭跡の有無による分類）」によって分類した。その結果、本遺跡のTピットは苫東のA1型、A2型、B1型、B2型、C1型、C2型にそれぞれ分類された。ただし本遺跡の場合、A1型の中でも長径2.4～4.0mにまとまりがみられたことから（図Ⅳ-1-4）、長径2.4m以上のA-1型をA1-L型として区別した。また、1基のみではあるが、A1型に杭跡の検出されるものがあり、杭跡のあるA1型をA1-2型とした。なお分類の変更にあたっては、大森司（2002）「切り合うTピット」を参照した。図Ⅳ-2-1は、各分類の形態がわかるよう、それぞれの中で平均に近いTピットを図示したものである。

A型：長短比が9以上のもの

A1：長径2m以上

A1-L：長径2.4m以上

A1-2：杭跡のあるA1型

A2：規模2m未満

B型：長短比が5～8のもの

B1：杭跡なし

B2：杭跡あり

C型：長短比が4以下のもの

C1：杭跡なし

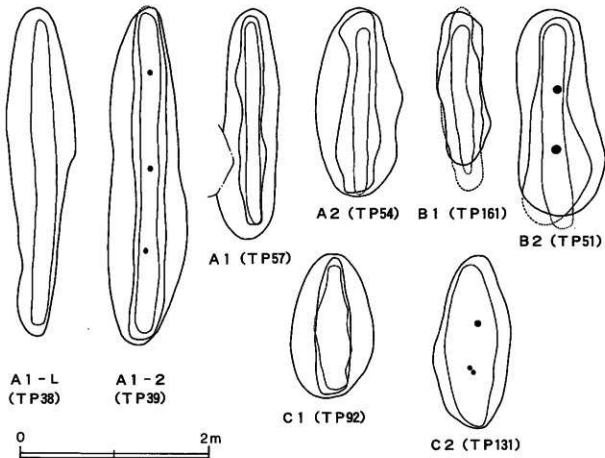
C2：杭跡あり

D型：長さ1m、幅0.2m前後の小規模なタイプで深さ0.5m以下のもの

なお、本遺跡でD型に分類されたものはない。

表IV-2-1 Tピット分類結果

分類	A型				B型		C型			D型	不明		合計
基数	56				70		10			0	37		173
細分	A1	A1-L	A1-2	A2	B1	B2	C1	C2	C	D	湧水	攪乱	合計
基数	4	29	1	22	67	3	1	8	1	0	29	8	173
%	2.3	16.8	0.6	12.7	38.7	1.7	0.6	4.6	0.6	0.0	16.8	4.6	100



図IV-2-1 Tピットの種類

地形

遺跡は台地縁辺部に立地することから、調査区内の地形は台地から低湿地へ連続的に変化しており、台地と低湿地の間には、沖積作用による平坦部が形成されている。

(a) 台地

台地は調査区の北側と南西側に位置する。ほとんどは斜面部分であるが、北側台地のTP-73・74の周りは平坦さみで台地頂部に当たる。調査終了時の地形であるが、調査区中央部分の南側には、標高8m前後の地形の高まりがみられる。攪乱のためわかりにくい、南西側台地に連続している。

(b) 低湿地

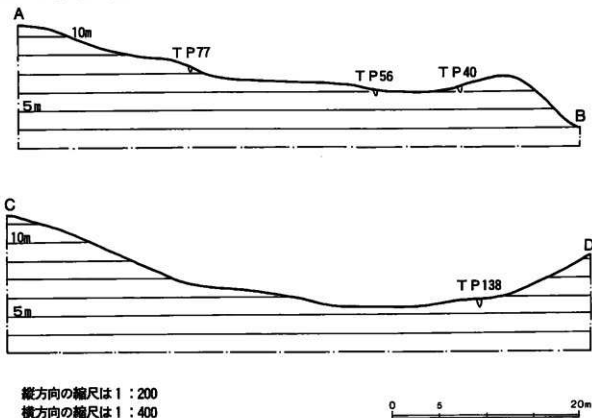
調査区の南東側では、樽前cテフラの上下で泥炭の堆積する低湿地が確認されている。地形図(図II-3-1、III-1-2)から判断すると、低湿地は台地の縁辺に沿って北東側、西側へも広がっているとみられる。本調査前に南西側拡張区の北側(調査区外)にかけられた試掘坑でも泥炭が確認されており、北側台地と南西側台地の間にも低湿地が存在するようである。

(c) 平坦部

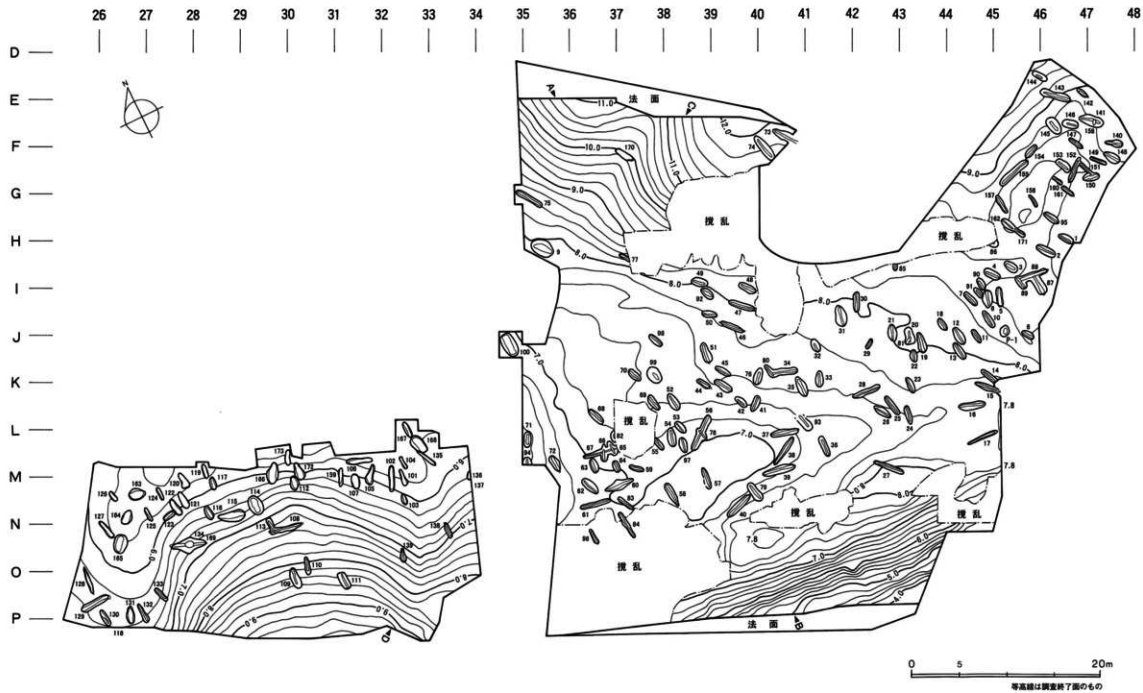
台地と低湿地の間に広がる傾斜の弱い部分で、調査区の中央部分には、浅く幅広い沢状地形がみられる。水成層と考えられる基本土層のVIIbが堆積する部分に相当する。西側(南西側拡張区の北側)には低湿地の存在が予想されるため(図III-1-2)、南北の台地に沿って二股に分かれていくとみられる。

確認状況

削平・攪乱部分が多くみられたため、Vc層の上面まで重機で除去してから調査が行われた。このためVc層上面で確認されたものが大半である。しかし、調査区の壁面などにかかるもの(TP-71・



図IV-2-2 地形断面図



図M-2-3 Tピット分布図

75・100・118・136・137)では、いずれもV a層やV層の中ほどまでTピット壁面の輪郭がみられ、これらから推し測ると、TピットはV a層やV層中位から掘り込まれたと判断される。覆土の平面的な確認状況には、①V c・V b・V a層が同心円状にみられるもの、②Ⅷ、Ⅸ層が主体のものなどがみられた。①は土層断面の観察から、Tピットが周囲から次第に埋没した状況を示すものである。②はT P-65・74でみられ、隣接するTピットの掘り上げ土によって埋め戻された状況と考えられる。

北東側、南西側の拡張区は、遺構確認調査範囲とされたため、Ⅸ層またはⅩ層まで重機による掘取りが行われ、それらの面でTピットが確認された。なお、南西側拡張区の斜面下、標高約5.5mは湧水面にあたり、T P-173は確認後すぐに水没する状況であった。このため確認面の輪郭しか実測できなかった。

覆土

覆土はT P-9を除き、基本的に短軸で観察した。自然埋没と判断されるものがほとんどであるが、埋め戻されたと考えられるTピットが3基ある。

(a) 自然埋没

自然埋没と判断される覆土は、上部と下部に大別される。下部ではV層とⅧ・Ⅸ層が混在、または交互に重なり合っており、底部では黒っぽい。堅密度(土層の固さ)は「しょう」、「軟」と判定されることが多い。これらは開口部からの土壌母材(枯葉等)の流入、壁面(Ⅷ・Ⅸ層)の崩落が繰り返された結果であろう。上部ではV c、V b、V a層の崩落により幅が広がる状況が観察され、平面ではこれらが同心円状にみられた。堅密度は「堅」と判定されることが多い。特徴的な断面としては、覆土の上部が遺構の下部まで垂下するもの(T P-31・35・36・38・40・48・57・62・64・76・79)がある。これは両壁がずり落ちたことによって、Tピット内にさらに縦長の隙間が生まれ、そこに覆土が堆積していったためであろう(北埋調報70参照)。ずり落ちた層を本来の位置に戻して考えると、Tピット本来の形態は、少なくともV c層までは垂直に近いものであったと推測される。この他、T P-13の覆土中位で焼土が検出されたが(覆土2層)、壁面をなすV c層の焼土(F-12)がTピット壁面の崩落により落ち込んだものである。

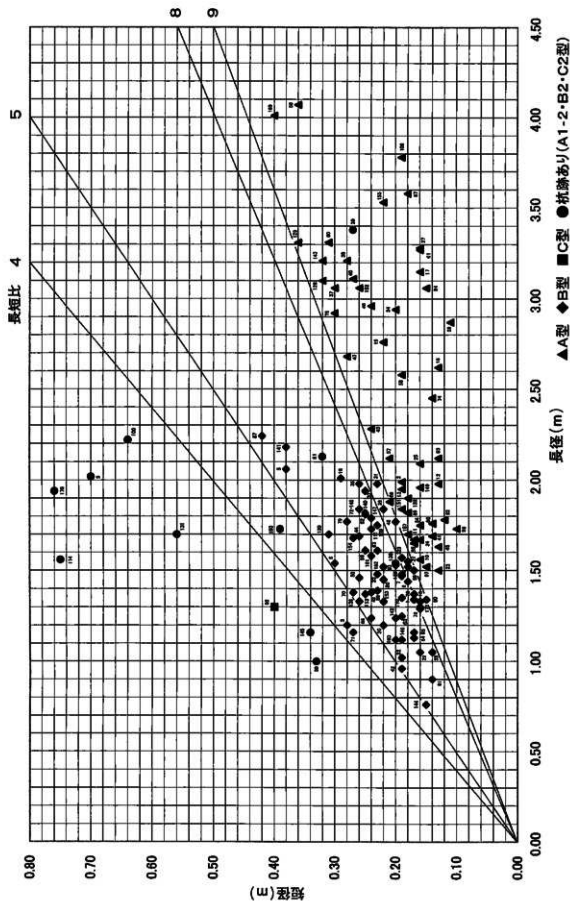
(b) 埋め戻し

埋め戻されたと考えられるTピットは、T P-65・74・137の3基である。T P-65の覆土1層はⅧ b主体、74の覆土1層はⅨ主体である。Ⅷ b、ⅨはTピットの壁面中部から底面にみられる基本土層であることから、両者の覆土1層はTピット構築時の掘り上げ土であろう。覆土1層より下位は、自然に埋没した状況である。掘り上げ土が周囲に覆かれていれば自然に流れ込むことも想定されるが、T P-65に66、74に73が隣接しており、なおかつ両者の覆土1層が埋没途中のTピットのくぼみに満遍なく堆積していることから、T P-65の覆土1層は66の、74の覆土1層は73の掘り上げ土と考えられる。なおT P-65・66はともにB1型、T P-74・73はA1-L型であり、規模・形態を同じくするTピットが隣接している。T P-137は調査区の壁面で断面の一部が確認された。土層断面の観察では、ほぼ埋没した時点でT P-136に壊されている。T P-137の覆土1層はⅨが主体で、136の掘り上げ土の可能性が高い。2基とも大部分が調査区外にあるため規模・形態については不明である。

形態と規模

(a) 平面形

確認面の形態は、底面と比べて幅広になっており、土層断面の観察から、壁面の崩落により広がったと考えられる。斜面の等高線に直交するものでは、上方が下方より大きく崩落したとみられる形態



図N-2-4 Tピット底面における長径・短径の相関図

がある（TP-109・139・166・172等）。

底面の形態は、長短比5以上の溝状を呈するもの（A型、B型）が大半で、長短比4以下の幅広のもの（C型）は少ない。後者の多くは長楕円形さみの形態であるが、TP-100のように整った長方形をなすものもある。C型には杭跡のあるC2型が多い。

図IV-2-4をみると、長短比5以上のA型、B型には長径1～2mのものが多いが、1m前後の短いものや4mを越す狭長なものもある。また、2.4m～4.0mのあたりが比較的まとまっており、A1-L型として区別している。A型の最長（底面の長径、以下同）はTP-56の4.07m、最短はTP-23の1.50m、B型の最長はTP-87の2.24m、最短はTP-144の0.76mである。長短比4以下のものは数が少ないこともあってまとまりはみられない。C型の最長はTP-100の2.22m、最短はTP-99の1.00mである。

短径については、A型、B型とも0.12m～0.28mの範囲に集中している。A型で最も幅が狭い（底面の短径、以下同）のはTP-26の0.11m、幅広なのはTP-169の0.40m、B型で最も幅が狭いのはTP-29・91の0.14m、幅広なのはTP-87の0.42mである。C型はTP-99の0.33mから、TP-170の0.76mまでばらにみられ、まとまりはない。なお、表IV-2-2は分類されたTピットの平均値である。

(b) 断面形

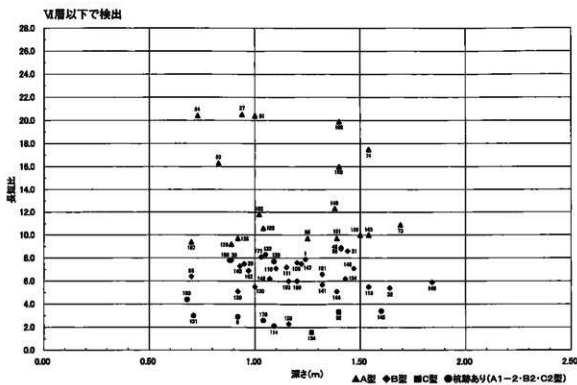
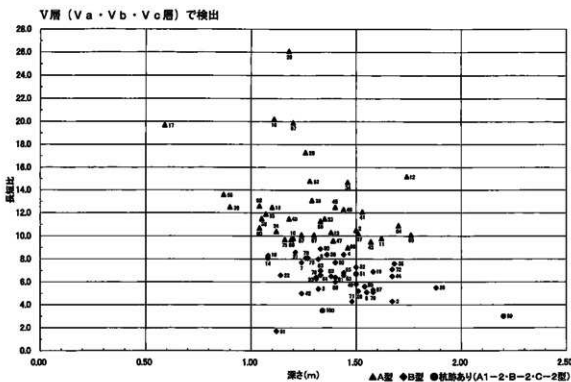
短軸断面形には、①底面から垂直さみに立ち上がる「U」字状のもの（TP-27等）、②底面から壁面の中位まで垂直に近く、上位で広がる「Y」字状のもの（TP-3等）、③底面から確認面まで直線的に広がる「V」字状のもの（TP-53等）、④壁の左右で異なる形態のもの等がみられる。

長軸断面形には、①両端がオーバーハングするもの（TP-152等）、②片端だけオーバーハングするもの（TP-90等）、③オーバーハングしないもの（TP-97等）がみられる。各分類の確認面と底面の長径を比べると（表IV-2-2）、B1、B2、C2型は20cm前後の差があるのに対して、A1、A1-L型はその差が数cmである。平面図でも目に付くように、A1-L型ではオーバーハングする断面形態が多いため、平均すると差がほとんどなくなっている。底面では、①平坦なもの（TP-92等）、②傾斜するもの（TP-91等）等がみられる。斜面の等高線に直交するものでは、傾斜に沿って下方が深くなっているもの（TP-110等）、と傾斜しないもの（TP-109・111等）がある。

(c) 深さ

確認状況で述べたように、TピットはVa層、V層中位から掘り込まれたとみられるが、Vc層以下で確認されたものが大半である。このため深さを比べることは難しいが、V層とVI層以下で確認されたものに大別して、底面の長短比と深さの関係を示した（図IV-2-5）。V層で確認されたもの表IV-2-2 Tピット分類規模一覧

	確 認 面		底 面		深 さ (m)	長 短 比
	長径 (m)	短径 (m)	長径 (m)	短径 (m)		
A 1	2.22	0.58	2.15	0.19	1.23	12.30
A 1-L	3.17	0.73	3.14	0.24	1.19	12.10
A 1-2	3.57	0.83	3.38	0.27	0.90	12.50
A 2	1.93	0.71	1.76	0.15	1.34	11.40
B 1	1.73	0.75	1.49	0.23	1.32	6.60
B 2	1.98	0.72	1.84	0.25	1.20	7.50
C 1	1.53	0.89	1.30	0.40	1.40	3.30
C 2	2.09	1.27	1.67	0.56	1.20	3.10
C	(1.76)	1.68	(0.96)	0.64	1.27	1.50
平均値	2.28	0.91	2.10	0.33	1.23	7.80



図N-2-5 Tピット長短比・深さの相関図

は、長短比が大きくなるごとに浅くなる傾向がみられる。VI層以下で確認されたものでは、とままりはみられない。確認面は異なるが、A型の最深はTP-69の1.76m、浅いものはTP-17の0.59m、B型の最深はTP-20の1.88m、浅いものはTP-96の0.70m、C型の最深はTP-99の2.20m、浅いものはTP-150の0.68mである。

杭跡

13基で検出された。内訳はA1-2型1基(TP-39)、B2型3基(TP-14・51・138)、C2型8基(TP-9・99・100・114・131・145・150・170)、不明1基(TP-82)である。

(a) A1-2型

TP-39は底面の長径が3.38m、短径0.27mの狭長なもので、3本の杭跡が等間隔に検出された。

(b) B2型

TP-51で2本検出されている。TP-14・138の杭跡は壁面の崩落により実測できなかった。

(c) C2型

C型は10基検出されているが、そのうちの8基が杭跡のみられるC2型である。底面が幅広の形態には杭跡の検出されることが多い。C2型の杭は1~15本検出されており、TP-150では10本、170では15本検出されている。杭の位置には、①底面の中央を挟んだ両側にあるもの(TP-99・100・114・131)、②中央付近にまとまるもの(TP-9・145)、③長軸に沿って10本ほど並んでいるもの(TP-150・170)がある。①のTP-114では底面の杭跡から覆土中位にかけて、ややしなった棒状の痕跡がみられた。②のTP-9ではための1本の周りに5本がめぐる。③のTP-170では15本検出されているが、そのうちの5ヵ所では杭跡どうしの重複がみられる。分類不明のTP-82は底面の端部で杭跡が検出されている。この杭跡は深さ0.46mを測り、本遺跡では最も深い。

重複

重複は15件で確認された(表IV-2-3)。2基の重複は12件、3基の重複は3件である。このうちの11件で先後関係が確認された。また、縄文時代早期後半の焼土と重複するものが2件ある。

(a) 同分類の重複

TP-141と158の1件(B1型)で、長軸の短いTP-158が後に構築されている。ただし、TP-158は規模が1m程度と想定され、B1型の平均より50cm前後小さい。

(b) 異なる分類の重複

9件確認された。A1-L型がA2・B1・C型に壊される例が8件で最も多く、そのうちの6件がB1型に壊される。A1-L型以外の重複は、A2型がC2型に壊される1件のみである。

A1-L型とB型の重複6件をみると、直交ぎみに重複するものが多い。その部分の地形にもよるが、等高線に対してA1-L型が平行に、B型が直交して構築される傾向にあるためと考えられる。

(c) 焼土との重複

縄文時代早期後半の焼土と重複するものは、TP-13とF-12、TP-57とF-14の2件である。Tピットは焼土のあるVc層より上位から構築されており、

表IV-2-3 Tピットの重複一覧

後		先	
TP番号	分類	TP番号	分類
65	B1	67	A1-L
66	B1	67	A1-L
78	B1	56	A1-L
87	B1	88	A1-L
89	B1	88	A1-L
113	B1	108	A1-L
134	C	169	A1-L
151	A	152	A1-L
150	C2	151	A2
158	B1	141	B1
136	-	137	-
先後関係不明			
TP番号	分類	TP番号	分類
20	B1	81	B1
34	A1-L	80	B1
135	-	168	-
162	B1	171	B1

Tピットの方が新しい。

分布

Tピット南東側の低湿地を除いた調査区全域で検出されているが、地形によって分布密度に差がある。分類ごとのTピット分布図を図Ⅳ-2-5～8に示した。なお、等高線は調査終了時のものである。

(a) 平坦部

大半のTピットは台地と低湿地の間にある平坦部に構築されている。調査終了時の地形にTピットの位置を重ね合わせると、平坦部の中でも①北東側拡張区の窪地、②調査区中央部分の浅く幅広い沢状地形、③南西側拡張区の斜面下、に多く分布している。①の部分の南東側は、地形図(図Ⅲ-1-2等)から低湿地の存在が予想され、①は北側台地と低湿地の間にある窪地とみられる。Tピットの大半(A型、B型)は等高線に直交する(長軸を台地と低湿地に向ける)が、A1-L型のT P-152・155は等高線と平行である。②では沢状地形の北側にある西側へ張り出す高まりに多い。等高線との関係は平行するものが目につくが、高まりの幅が狭いため、見方によっては直交するととれるものもある。A1-L型が比較的まどまっている。③の北側(調査区外)にあげられた試掘坑では、泥炭が確認されており、③は南西側の台地と低湿地の間にあたる。Tピットは等高線に直交する(長軸を台地と低湿地に向ける)ものがほとんどであるが、湧水のため底面の確認ができず、分類は不明である。

(b) 台地

この部分で検出されたTピットは少ない。①頂部に位置するもの、②斜面に位置するものがある。①は北側台地の頂部でT P-73・74の2基が検出されている。②では南西側台地のT P-109-111(B型)のように、沢と沢の間に位置し等高線と直交するもの、北側台地のT P-170のように、沢底に位置し等高線と平行するものがある。A1-L型はT P-75・108等のように、等高線と平行する。

配列

形態・規模や長軸方向を同じくするTピット間には配列の想定されるものがある。

(a) A1-L型(図Ⅳ-2-6)

A1-L型は狭長であることから、他形態との区別が比較的容易で、①15-27、②17-28、③34-37、④38-56、⑤58-84、⑥61-67等のように2基1組の配列が想定される。

(b) A型・B型(図Ⅳ-2-7・8)

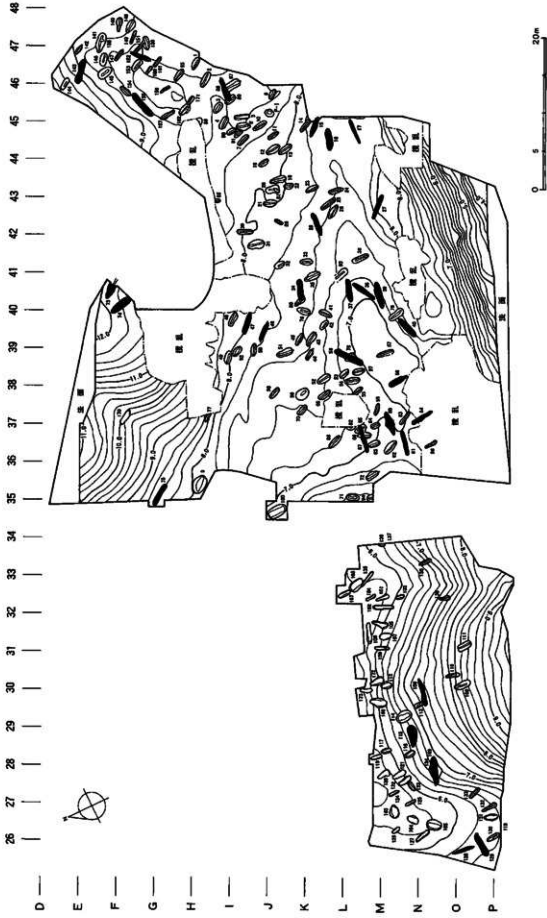
A1-L型以外のA(A1・A2)型とB(B1・B2)型については、長短比で区別されているが、規模のまとまりがみられるため(図Ⅳ-2-4)、同じく扱くと、72(B1)-68(A2)-70(B1)-98(A2)のような2基以上の配列が想定される。この列の南東側や北東側拡張区でも配列が想定されるが、調査区内でも特にTピットの密度が高いため判然としない。

(c) C型(図Ⅳ-2-9)

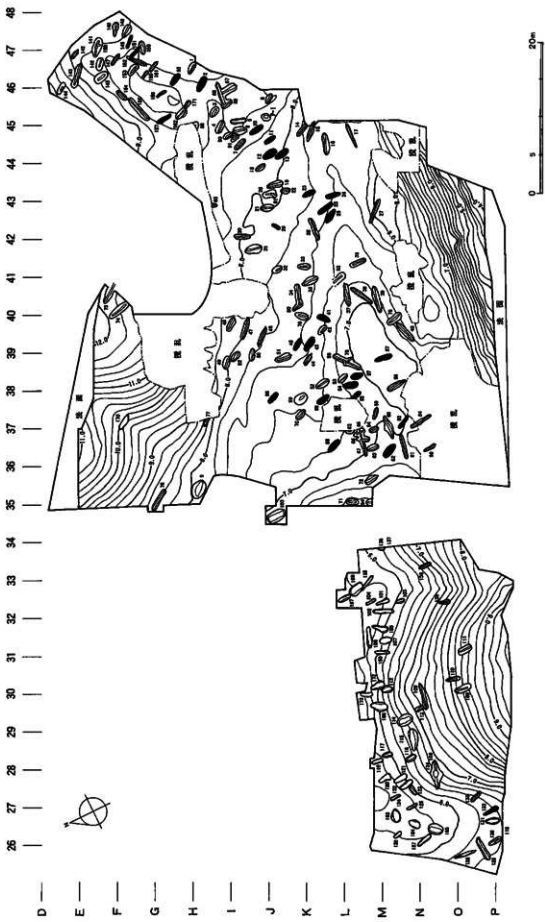
C型は底面が幅広いため、A1-L型同様、他形態との区別が容易で、9-170等の配列が想定される。100がこの配列に属する可能性もあるが、周囲の地形が不明であるため判然としない(図Ⅳ-2-9)。

時期

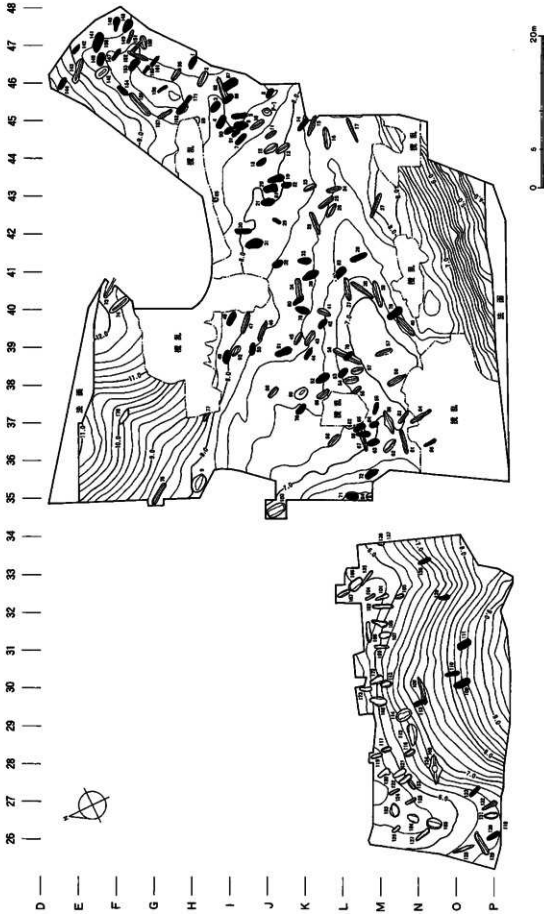
本遺跡では、Tピットの構築時期を特定する資料は得られていないが、厚真川を挟んで位置する「苫小牧東部工業地帯の遺跡群」での調査結果から類推すると、縄文時代中期後半～後期初頭の可能性がある。ただしA1-L型については、上部から土層を観察できるものがなかったため(調査区の壁面等)、他のTピットと同じようにVa層から掘り込まれたか不明である。(山中)



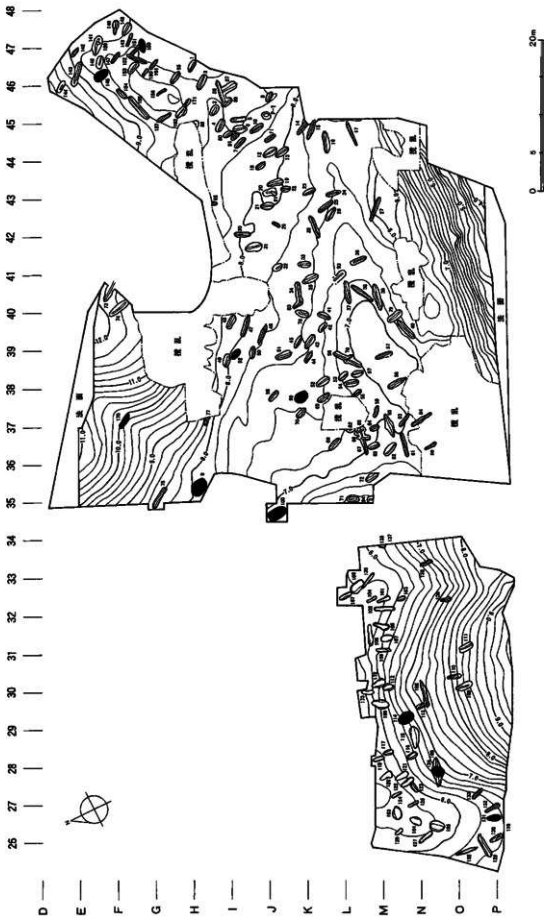
図IV-2-6 A1-L型Tピット分布図



図IV-2-7 A型Tピット分布図



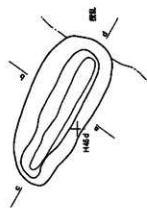
図IV-2-8 B型Tピット分布図



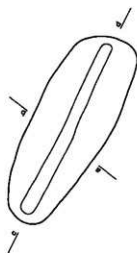
図N-2-9 C型Tビット分布図



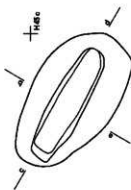
TP-1



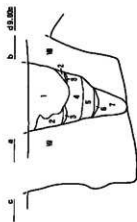
TP-2



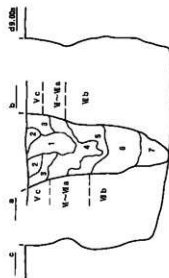
TP-3



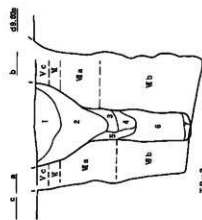
↑1H&D



- TP-1
- 1: V>Vb 第一層
 - 2: 磁器片
 - 3: V層
 - 4: V>Vb 第二層
 - 5: 磁器片
 - 6: 磁器片
 - 7: 磁器片 (磁器片+磁器) 層



- TP-2
- 1: 磁器片
 - 2: V層
 - 3: V層
 - 4: V>Vb 第一層
 - 5: 磁器片
 - 6: 磁器片
 - 7: V層の磁器 L.3層

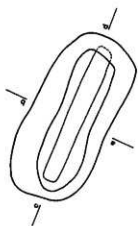


- TP-3
- 1: V層
 - 2: V>Vb 第一層
 - 3: V>Vb 第二層
 - 4: V層 L.3層
 - 5: 磁器片 L.3層
 - 6: V層の磁器 L.3層
 - 7: V層 磁



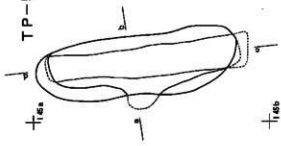
図IV-2-10 TP-1~3

TP-4



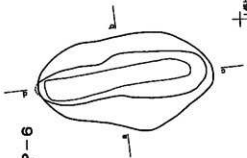
↑1.65

TP-5

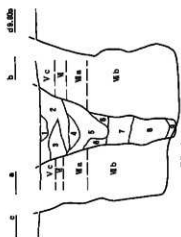


↑1.65

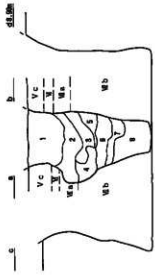
TP-6



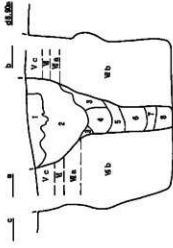
↑1.65



- TP-4
- 1: Vc 胚珠 膜
 - 2: Vc 胚珠 膜
 - 3: Vc 胚珠 膜
 - 4: Vc 胚珠 膜
 - 5: Vc 胚珠 膜
 - 6: Vc 胚珠 膜
 - 7: Vc 胚珠 膜
 - 8: Vc 胚珠 膜
 - 9: Vc 胚珠 膜



- TP-5
- 1: Vc 胚珠 膜
 - 2: Vc 胚珠 膜
 - 3: Vc 胚珠 膜
 - 4: Vc 胚珠 膜
 - 5: Vc 胚珠 膜
 - 6: Vc 胚珠 膜
 - 7: Vc 胚珠 膜
 - 8: Vc 胚珠 膜



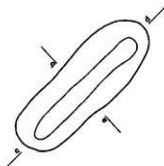
- TP-6
- 1: Vc 胚珠 膜
 - 2: Vc 胚珠 膜
 - 3: Vc 胚珠 膜
 - 4: Vc 胚珠 膜
 - 5: Vc 胚珠 膜
 - 6: Vc 胚珠 膜
 - 7: Vc 胚珠 膜
 - 8: Vc 胚珠 膜



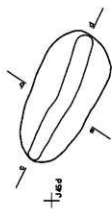
図N-2-11 TP-4~6



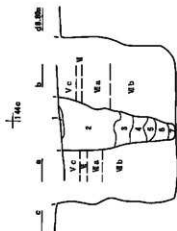
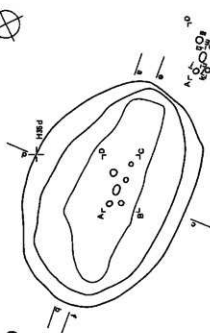
TP-7



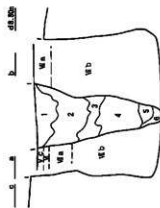
TP-8



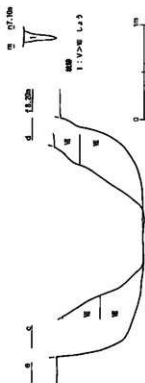
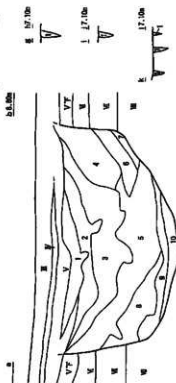
TP-9



- TP-7
- 1: VC 腐葉層
 - 2: VC > Vb 腐葉層
 - 3: Vb 腐葉層
 - 4: Mb 腐葉層
 - 5: V 腐葉層
 - 6: Mb 腐葉層
 - 7: Mb 腐葉層 (腐葉層)



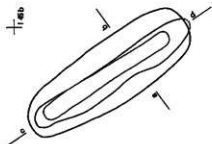
- TP-8
- 1: Vb > Vc 腐葉層
 - 2: Vc 腐葉層
 - 3: Mb 腐葉層
 - 4: V > Mb 腐葉層
 - 5: Mb > V 腐葉層
 - 6: V > Mb 腐葉層
 - 7: Mb 腐葉層
 - 8: Mb 腐葉層
 - 9: Mb 腐葉層
 - 10: V 腐葉層



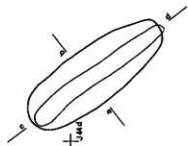
IV 遺構と遺構出土の遺物

図IV-2-12 TP-7~9

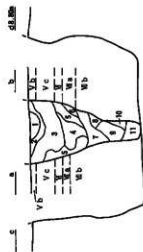
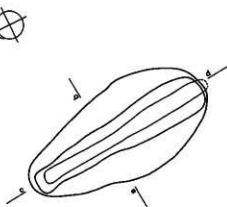
TP-10



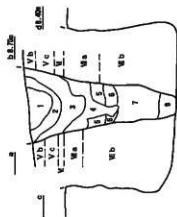
TP-11



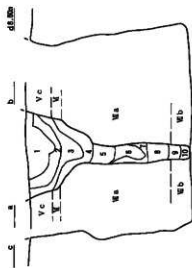
TP-12



- TP-10
- 1: Vbの筋 線
 - 2: Vaの筋 線
 - 3: Vb>Vc 筋
 - 4: Vb>Vc 筋
 - 5: Vbの筋 線
 - 6: Vbの筋 線
 - 7: Vbの筋 線
 - 8: Vbの筋 線
 - 9: Vbの筋 線
 - 10: Vbの筋 線
 - 11: Mbの筋 (縦に黒色の筋線V) 線



- TP-11
- 1: Vbの筋 線
 - 2: Vaの筋 線
 - 3: Vb>Vc 筋
 - 4: Vbの筋 線
 - 5: Vbの筋 線
 - 6: Vbの筋 線
 - 7: Vbの筋 線
 - 8: Vbの筋 線

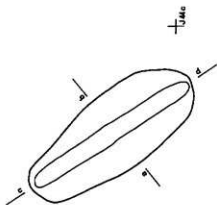


- TP-12
- 1: Vbの筋 線
 - 2: Vb>Vc 筋
 - 3: Vb>Vc 筋
 - 4: Vbの筋 線
 - 5: Vb>Vc 筋
 - 6: Vbの筋 線
 - 7: Maの筋 線
 - 8: Vcの筋 線
 - 9: Vb>Vc 筋
 - 10: Vbの筋 線

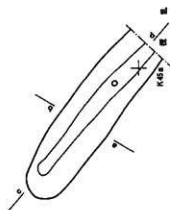
図W-2-13 TP-10~12



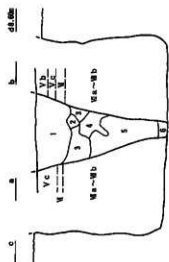
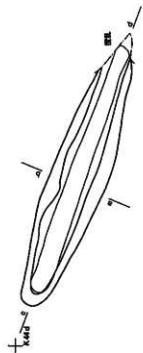
TP-13



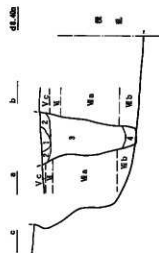
TP-14



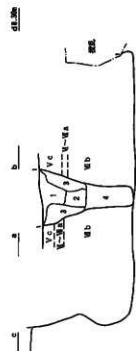
TP-15



- TP-13
- 1: 口縁部 破一編
 - 2: 胴上(絞手部) 破一編 1-1208
 - 3: 胴中下部 破一編
 - 4: 口内 2P208C3 破
 - 5: 底面 破
 - 6: V>Wb 破



- TP-14
- 1: 口縁部 破一編
 - 2: 胴上部 破一編
 - 3: V>Vb-W 破
 - 4: V>Wb L45



- TP-15
- 1: V>Wb 破一編
 - 2: 胴上部 破一編
 - 3: V>Wb 破一編
 - 4: V>Wb 破一編

図IV-2-14 TP-13~15

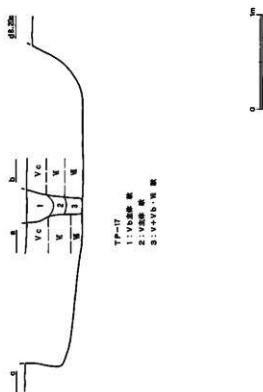
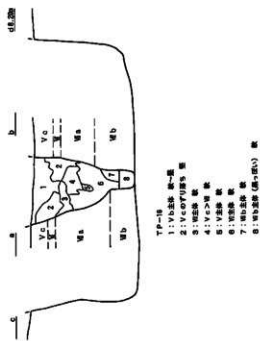
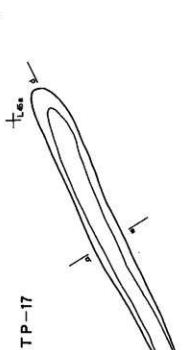
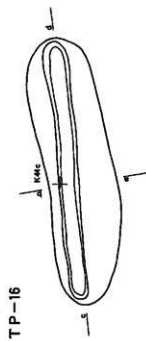
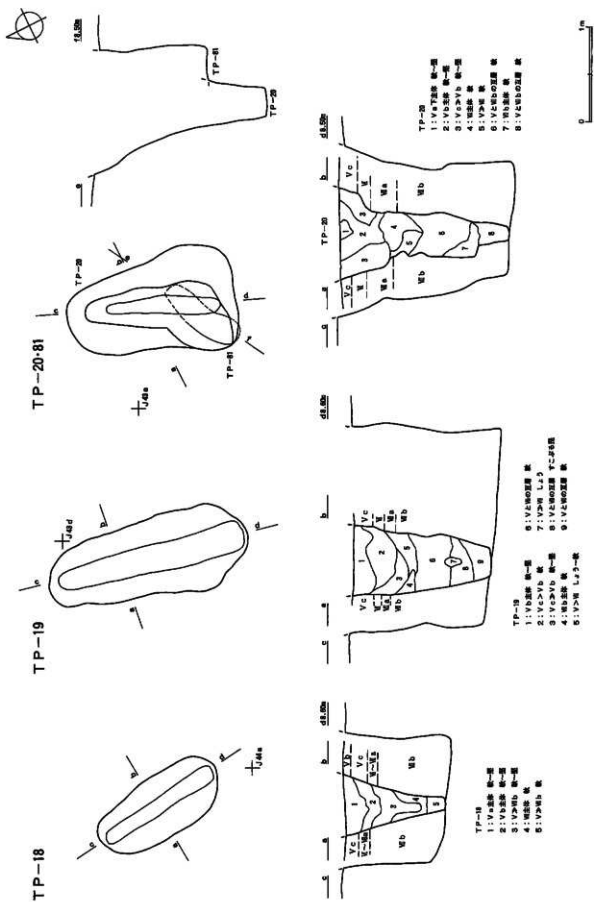
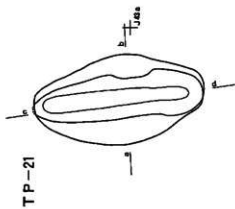


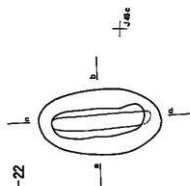
圖 IV-2-15 TP-16·17



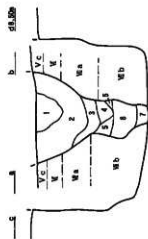
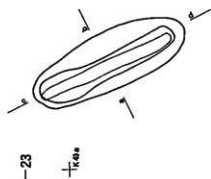
図IV-2-16 TP-18~20・81



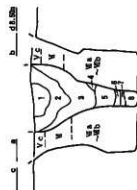
TP-22



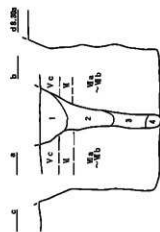
TP-23



- TP-21
- 1: Vの筋線 筋一環
 - 2: Vの筋線 筋
 - 3: Mb > V 筋
 - 4: Vの筋線 筋一環
 - 5: Mb > V 筋一環
 - 6: Mb > V 筋一環
 - 7: Vの筋線 筋一環



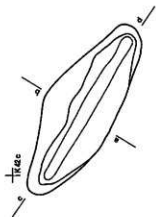
- TP-22
- 1: Vの筋線 筋
 - 2: Vの筋線 筋
 - 3: Vの筋線 筋
 - 4: Mbの筋線 筋
 - 5: Mbの筋線 筋
 - 6: Mbの筋線 筋
 - 7: Vの筋線 筋
 - 8: Mbの筋線 (筋線とMbの筋線が) 筋



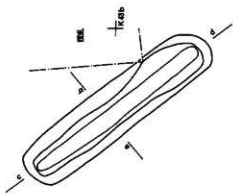
- TP-23
- 1: Vの筋線 筋
 - 2: Vの筋線 筋
 - 3: Mbの筋線 筋
 - 4: Vの筋線 Mb >



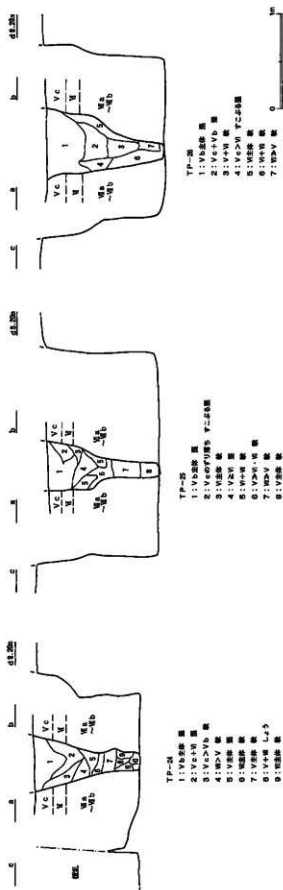
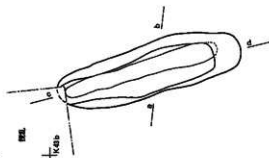
TP-26



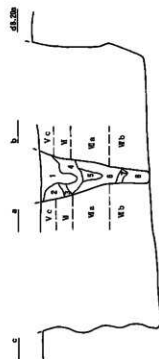
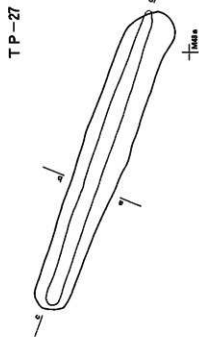
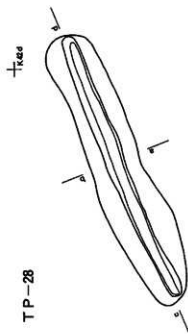
TP-25



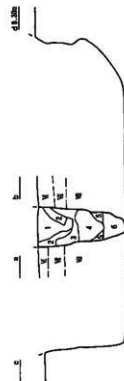
TP-24



図IV-2-18 TP-24~26

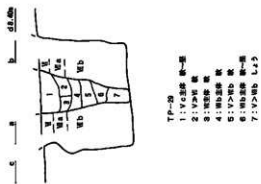
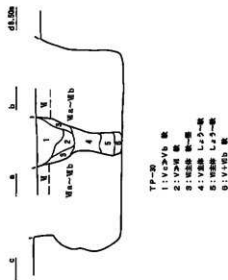
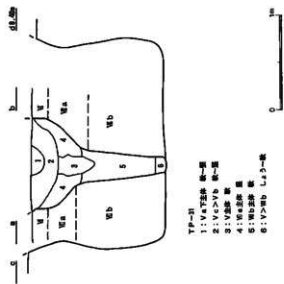
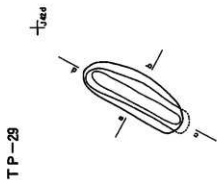
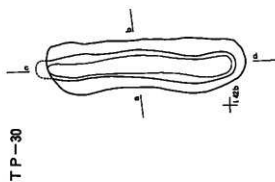
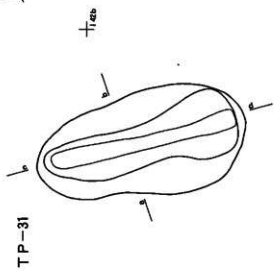


TP-28
 1: Vb 沼泽 渠
 2: Vc 沼泽 渠
 3: Vd 沼泽 渠
 4: Ve 沼泽 渠
 5: Vf 沼泽 渠
 6: Vg 沼泽 渠
 7: Vh 沼泽 渠
 8: Vi 沼泽 渠



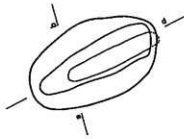
TP-27
 1: Va 沼泽 渠
 2: Vb 沼泽 渠
 3: Vc 沼泽 渠
 4: Vd 沼泽 渠
 5: Ve 沼泽 渠
 6: Vf 沼泽 渠

图 IV-2-19 TP-27 · 28

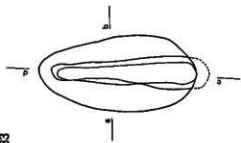


図IV-2-20 TP-29~31

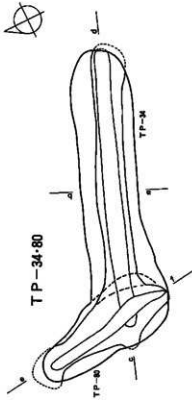
TP-32



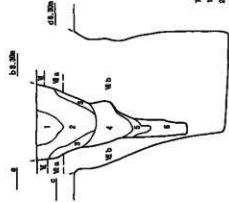
TP-33



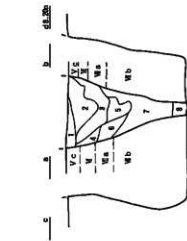
↑ R_{100}



↑ R_{100}

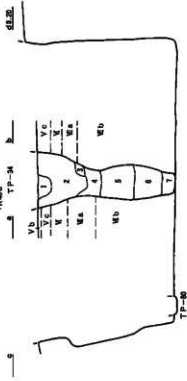


TP-32
1: V>VB 線
2: V<VB 線
3: 傾斜線 線
4: V>VB L43
5: VB線 線
6: V>VB L43

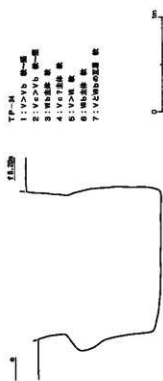


TP-33
1: VB線 線
2: VB>VB 線
3: V<VB 線
4: VeOFF線 線
5: V>VB 線
6: 傾斜線 線
7: VB線 線
8: V>VB L43

↑ R_{100}



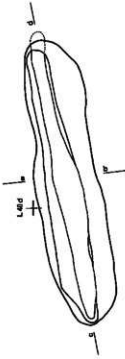
↑ R_{100}



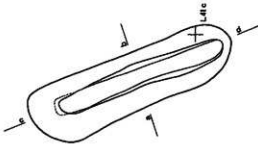
TP-34
1: V>VB 線
2: V<VB 線
3: 傾斜線 線
4: V>VB 線
5: V>VB 線
6: 傾斜線 線
7: V>VBの延長 線



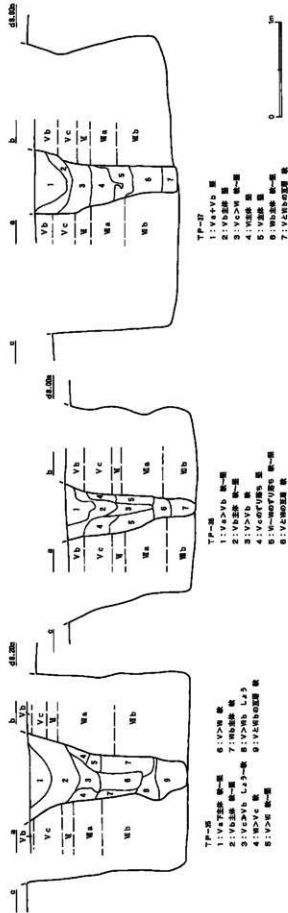
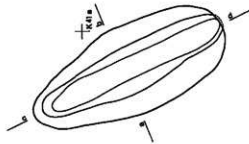
TP-37



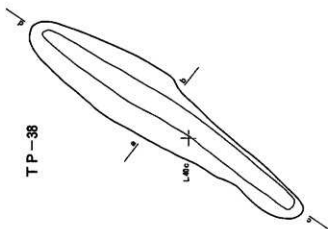
TP-36



TP-35



図IV-2-22 TP-35~37



TP-39

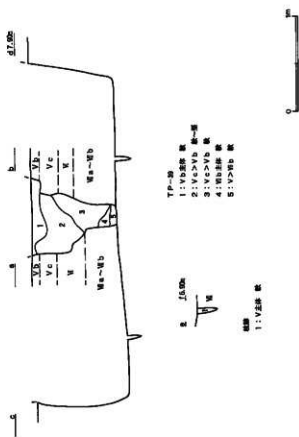
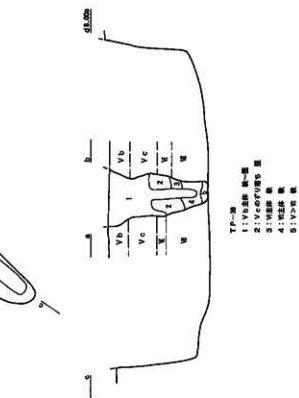
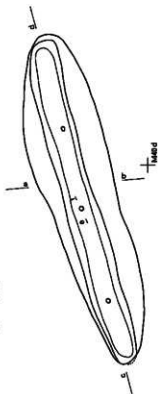
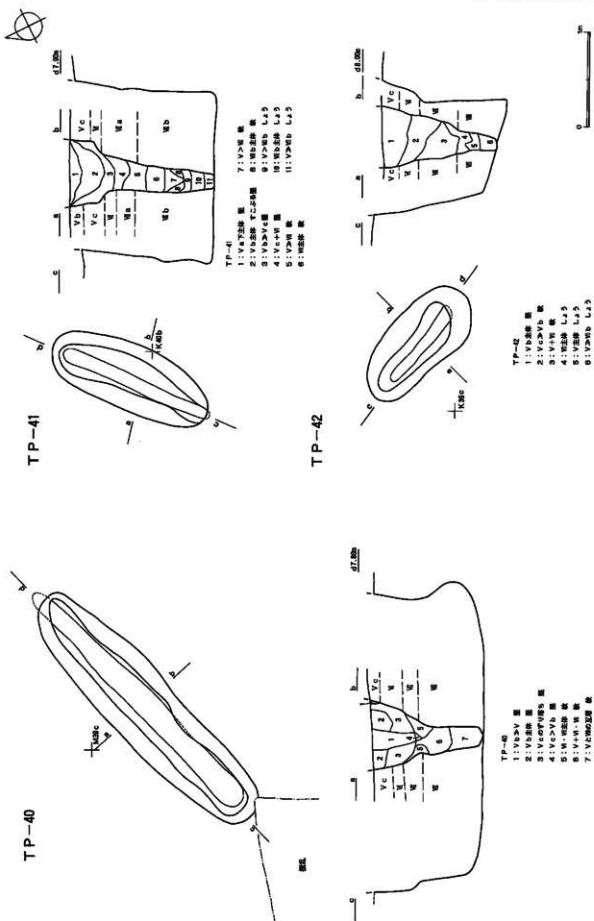
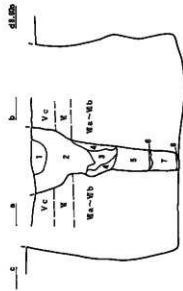
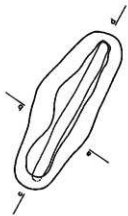
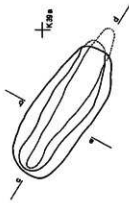
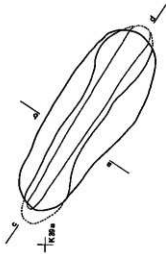


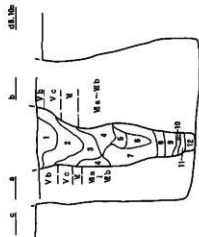
图 IV-2-23 TP-38 · 39



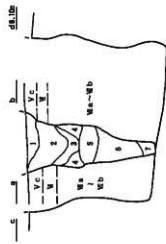
図IV-2-24 TP-40~42



- TP-43
- 1: Vb 組織 層
 - 2: Vc > Vb 層
 - 3: Vc + W 層
 - 4: M - 組織 層
 - 5: V + W 層
 - 6: V 組織 層
 - 7: Mb V 層
 - 8: V 組織 層



- TP-44
- 1: Vb 組織 層
 - 2: Vb 組織 層
 - 3: Vc > Vb 層
 - 4: W - 組織 層
 - 5: V + W 層
 - 6: V 組織 層
 - 7: Vb 組織 層
 - 8: Vb 組織 層
 - 9: Mb V 層
 - 10: V 組織 層
 - 11: Mb V 層
 - 12: V 組織 層

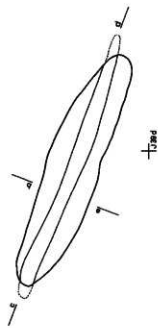


- TP-45
- 1: Vb 組織 層
 - 2: Vb 組織 層
 - 3: Vc > Vb 層
 - 4: Mb V 層
 - 5: V 組織 層
 - 6: V + W 層
 - 7: V + Mb 層

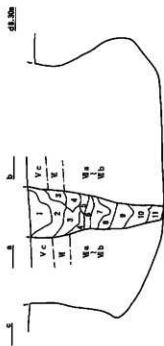
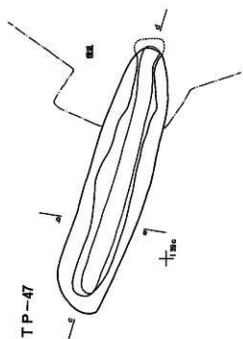




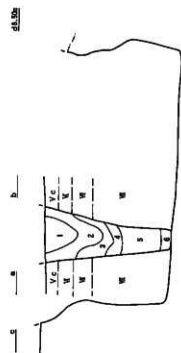
TP-46



TP-47



- TP-46
- 1: Vc+L1,5
 - 2: Vc>Vs
 - 3: V+M 堀
 - 4: M>V 堀
 - 5: 堀跡 堀
 - 6: V+M 堀
 - 7: V>M b L1,5
 - 8: M>M b L1,5
 - 9: V>M b L1,5
 - 10: M b 堀跡 L1,5
 - 11: V>M b L1,5

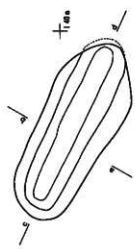


- TP-47
- 1: Vc+Vs
 - 2: Vc>Vs
 - 3: V+M 堀
 - 4: V+M 堀
 - 5: 堀跡 堀
 - 6: V>M L1,5

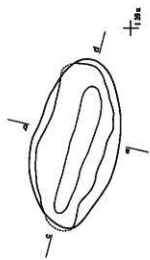


図IV-2-26 TP-46・47

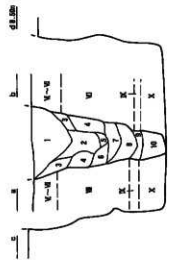
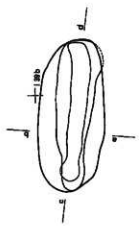
TP-48



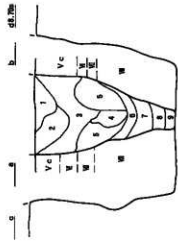
TP-49



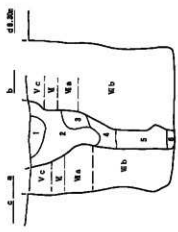
TP-50



- TP-48
- 1: Vc>Vs 葉
 - 2: VcM 葉
 - 3: M-MSV 葉
 - 4: MS>V 葉
 - 5: MS+V 葉
 - 6: 葉原基 葉
 - 7: VcM L2,5
 - 8: VcM L4,5
 - 9: 葉原基 葉
 - 10: V+V 葉



- TP-49
- 1: Vc>Vs VcM 葉
 - 2: Vc>Vs 葉
 - 3: Vc>Vs 葉
 - 4: VcM L2,5
 - 5: VcM L4,5
 - 6: 葉原基 葉
 - 7: VcM L2,5
 - 8: VcM L4,5
 - 9: VcM 葉

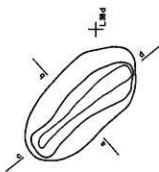


- TP-50
- 1: Vc>Vs 葉
 - 2: Vc>Vs 葉
 - 3: MS>V 葉
 - 4: MS>V 葉
 - 5: VcM 葉
 - 6: MS>Vs (TP-48葉+MS) 葉
 - 7: MS>Vs 葉

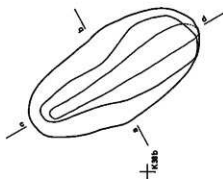
図IV-2-27 TP-48~50



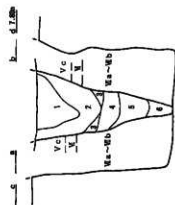
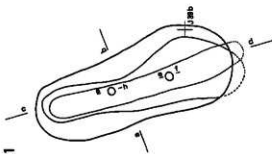
TP-53



TP-52

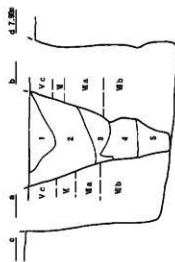


TP-51



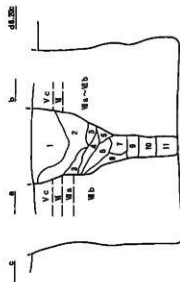
TP-53

- 1: Vc+Vb 層
- 2: Vc+Vb 層
- 3: Ma+Mb 層
- 4: Vc+Vb 層
- 5: Vc+Vb 層
- 6: Vc+Vb L4,5



TP-52

- 1: Vc+Vb 層
- 2: Vc+Vb 層
- 3: Ma+Mb 層
- 4: Vc+Vb 層
- 5: Vc+Vb 層

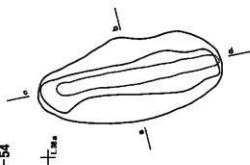


TP-51

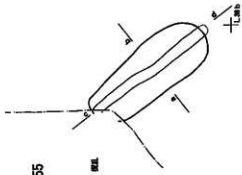
- 1: Vc+Vb 層
- 2: Vc+Vb 層
- 3: Ma+Mb 層
- 4: Vc+Vb 層
- 5: Vc+Vb 層
- 6: Vc+Vb 層
- 7: Vc+Mb 層
- 8: Mb+Vc 層
- 9: Vc+Mb L4,5 層
- 10: Mb+V L4,5 層
- 11: Vc+Mb 層
- 12: Vc+Mb 層

IV-2-28 TP-51~53

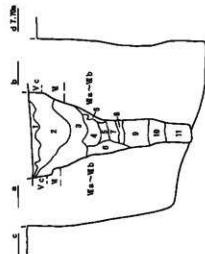
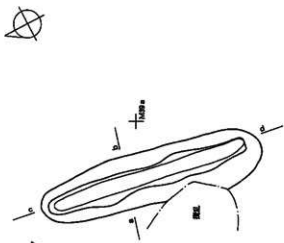
TP-54



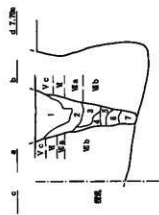
TP-55



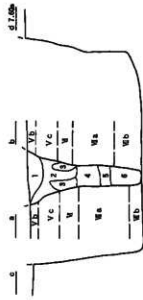
TP-57



- TP-54
- 1: Vb或 Mb 部
 - 2: Vb+Vc 部
 - 3: Vb+Vc 部
 - 4: V>Mb 部
 - 5: 胚珠 部
 - 6: 胚珠 部
 - 7: 胚珠 部
 - 8: 胚珠 部
 - 9: Vb或 Mb 部
 - 10: Mb或 Mb-a 部
 - 11: V>Mb L, P



- TP-55
- 1: Vb或 Mb 部
 - 2: Vc>Mb 部
 - 3: V>Mb 部
 - 4: Mb或 Mb-a 部
 - 5: V>Mb 部
 - 6: Mb或 Mb-a 部
 - 7: V>Mb L, P

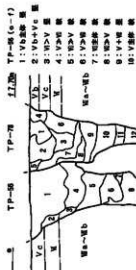
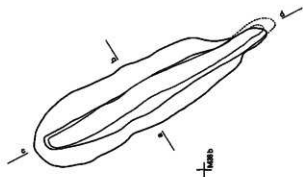


- TP-57
- 1: Vb或 Mb 部
 - 2: Vb或 Mb 部
 - 3: Vc+Mb或 Mb-a 部
 - 4: V>Mb 部
 - 5: Mb或 Mb-a 部
 - 6: V>Mb L, P



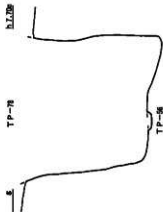


TP-58

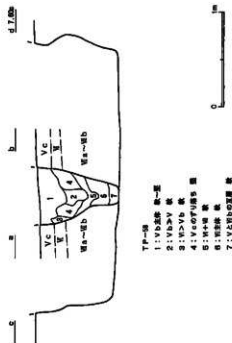


TP-58 (a-b)

- 1: Vc 表層 腐
- 2: Vc 中層 腐
- 3: W 腐
- 4: Vc 腐
- 5: W 腐
- 6: Vc 腐
- 7: W 腐
- 8: Vc 腐
- 9: W 腐
- 10: Vc 腐
- 11: W 腐
- 12: Vc 腐

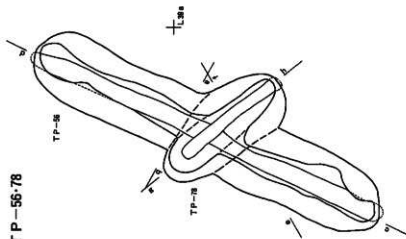


TP-59



- 1: Vc 表層 腐
- 2: Vc 中層 腐
- 3: W 腐
- 4: Vc 腐
- 5: W 腐
- 6: Vc 腐
- 7: W 腐

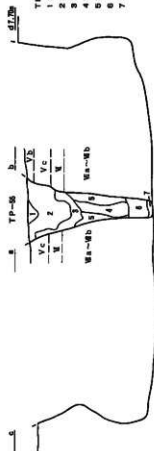
TP-56.78



TP-56

TP-78

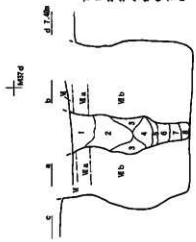
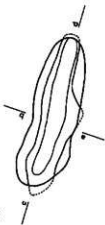
TP-56



- 1: Vc 表層 腐
- 2: Vc 中層 腐
- 3: W 腐
- 4: Vc 腐
- 5: W 腐
- 6: Vc 腐
- 7: W 腐

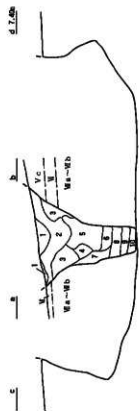
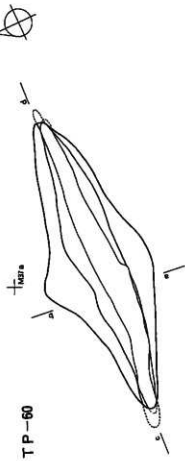
図IV-2-30 TP-56・58・78

TP-59



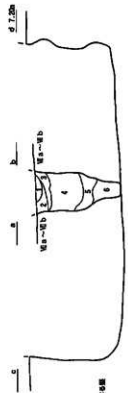
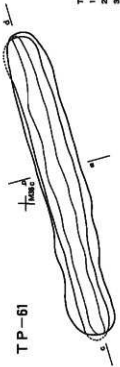
- TP-59
- 1: V&V 筋 束
 - 2: V&V の 環 状 筋
 - 3: Mb 筋 束
 - 4: V&V 筋 束
 - 5: Mb 筋 束 L₂-2 線
 - 6: V&V 筋 束
 - 7: Mb 筋 束
 - 8: V>Vb L₂-2 線

TP-60



- TP-60
- 1: V&V 筋 束
 - 2: Vb 筋 束
 - 3: Vc の 筋 束
 - 4: Vc>Vb 筋 束
 - 5: Vb>V 筋 束
 - 6: V>Vb L₂5
 - 7: Mb 筋 束
 - 8: V&V L₂5
 - 9: Mb>V L₂5
 - 10: V&V 筋 束

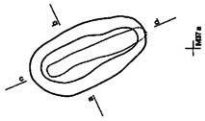
TP-61



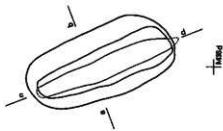
- TP-61
- 1: V&V 筋 束
 - 2: Mb 筋 束
 - 3: Vb 筋 束
 - 4: V>Vb 筋 束
 - 5: Mb>V 筋 束
 - 6: V&V 筋 束
 - 7: V&Vb L₂5

図 IV-2-31 TP-59~61

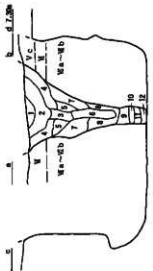
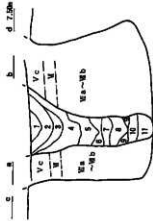
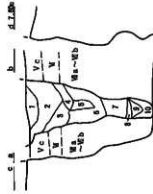
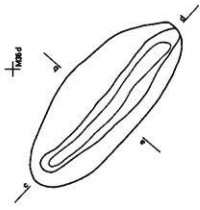
TP-64



TP-63



TP-62



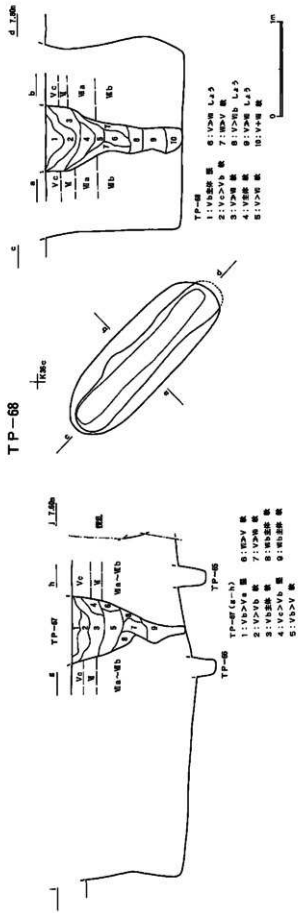
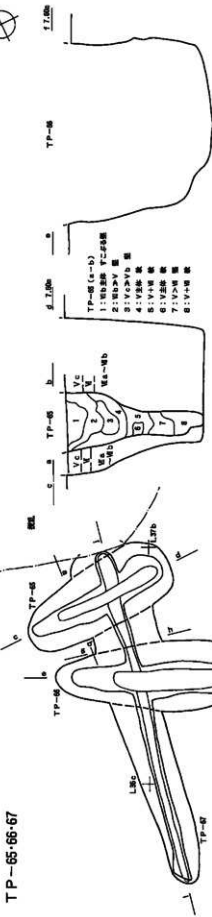
- TP-64
- 1: Vc 下部 土ごもり
 - 2: Vc 上部 土ごもり
 - 3: Vc+Vb 層
 - 4: Vc+M+Vb 層
 - 5: Vc 層
 - 6: 雑草層
 - 7: Vc+M L4,5
 - 8: Vc+M L4,5
 - 9: 雑草層
 - 10: Vc+M L4,5

- TP-63
- 1: Vc 下部 土ごもり
 - 2: Vc 上部 土ごもり
 - 3: Vb 下部 土ごもり
 - 4: Vc+M+Vb 層
 - 5: Vc 層
 - 6: 雑草層
 - 7: Vc 層 L4,5
 - 8: Vc+M L4,5
 - 9: Vc+M L4,5
 - 10: Vc+M L4,5
 - 11: Vc+M L4,5

- TP-62
- 1: Vc+Vb 層
 - 2: Vc 下部 土ごもり
 - 3: Vc+Vb 層
 - 4: Vc 層
 - 5: Mb+V 層
 - 6: Vc+M L4,5
 - 7: 雑草層
 - 8: Mb+V 層 L4,5
 - 9: Vc+M L4,5
 - 10: 雑草層
 - 11: Vc 層 L4,5
 - 12: Mb+V 層 L4,5



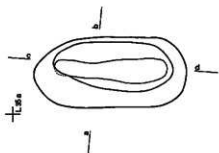
図IV-2-32 TP-62~64



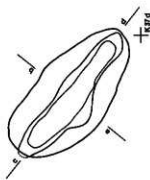
圖IV-2-33 TP-65~68



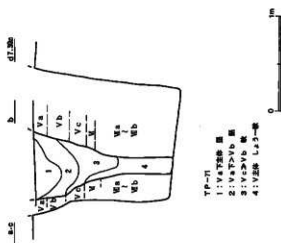
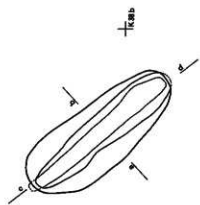
TP-71



TP-70

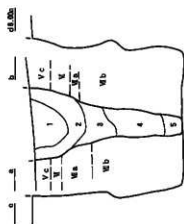


TP-69



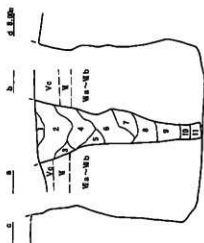
TP-71

- 1: 1層遺構層
- 2: 2層遺構層
- 3: 3層遺構層
- 4: 4層遺構層



TP-70

- 1: Va>Vb 層
- 2: Vc>Vb 層
- 3: 3層遺構層
- 4: Vb>Va 層
- 5: V>Vb 層

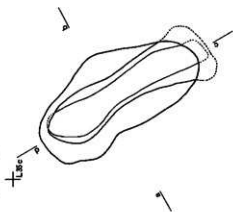


TP-69

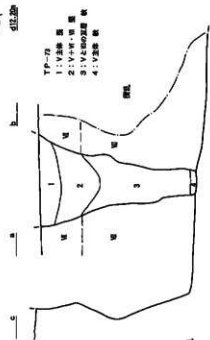
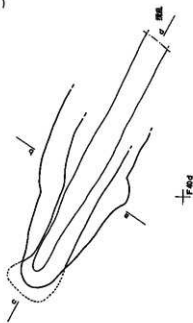
- 1: Vb遺構層
- 2: Va遺構層
- 3: Vc遺構層
- 4: Va遺構層
- 5: Vb遺構層
- 6: V遺構層

図IV-2-34 TP-69~71

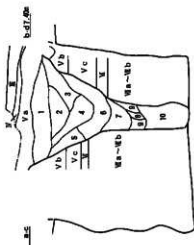
TP-72



TP-73



TP-74



TP-74

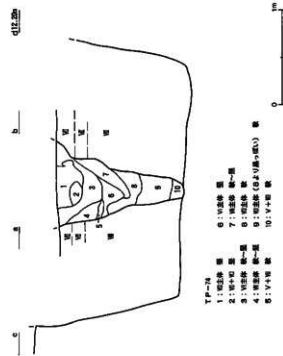
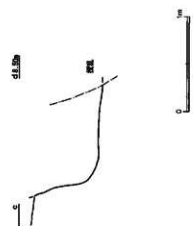
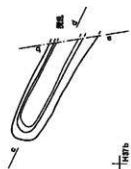


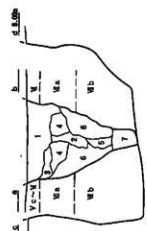
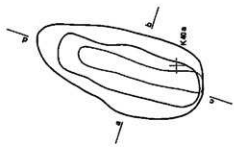
圖 IV-2-35 TP-72~74



TP-77

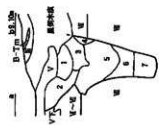
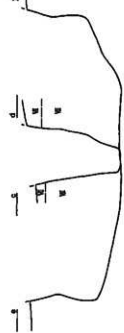
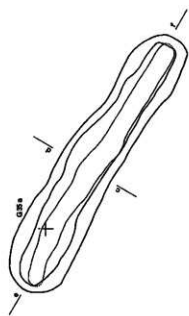


TP-76



- TP-76
- 1: Vc2>Vs 器
 - 2: Vc4 器 L、J、J-器
 - 3: Vc5 器
 - 4: Vc6 器
 - 5: Vc7 器 L、J、J-器
 - 6: Vc8 器
 - 7: Vc9 器

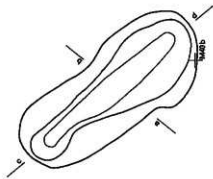
TP-75



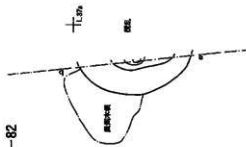
- TP-75
- 1: V72 器 器一
 - 2: V73 器 器一
 - 3: V74 器 器一
 - 4: V75 器
 - 5: Vc1 器 器一
 - 6: Vc2 器
 - 7: Vc3 器

IV-2-36 TP-75~77

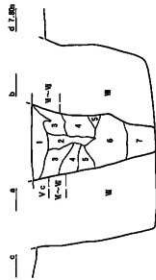
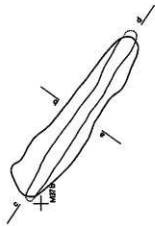
TP-79



TP-82

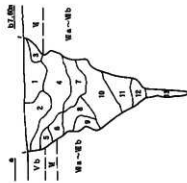


TP-83



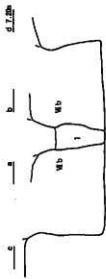
TP-79

- 1: Vc 区域
- 2: Vb 区域
- 3: Vc 区域
- 4: M-ROOT 区域
- 5: M-ROOT 区域
- 6: Vb 区域
- 7: MAB 区域



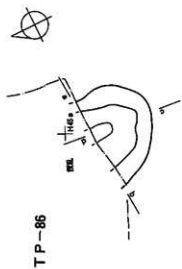
TP-82

- 1: Vc 区域
- 2: Vb 区域
- 3: Vc 区域
- 4: M-ROOT 区域
- 5: M-ROOT 区域
- 6: Vb 区域
- 7: MAB 区域
- 8: MAB 区域
- 9: MAB 区域
- 10: MAB 区域
- 11: MAB 区域
- 12: MAB 区域

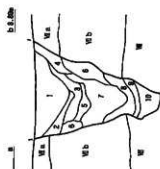


TP-83

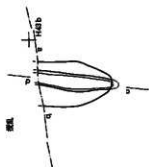
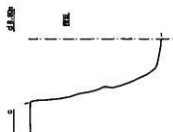
- 1: Vc 区域



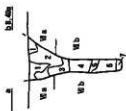
TP-86



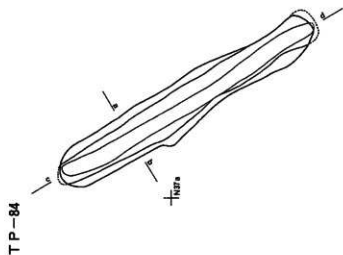
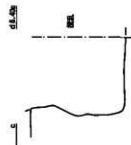
- TP-86
- 1: 160>7b 層
 - 2: 160>7a 層
 - 3: 160層 裏
 - 4: 160>7c 層
 - 5: 160層 表
 - 6: 160層 裏
 - 7: 160>7c 層
 - 8: 160層 裏
 - 9: 160層 表
 - 10: 160層 裏



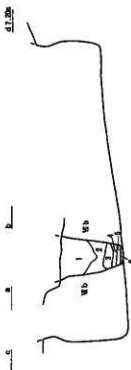
TP-85



- TP-85
- 1: 160層 裏
 - 2: 160層 裏
 - 3: 160層 裏 2.5m程度
 - 4: 160層 裏
 - 5: 160層 裏
 - 6: 160層 裏
 - 7: 160層 裏



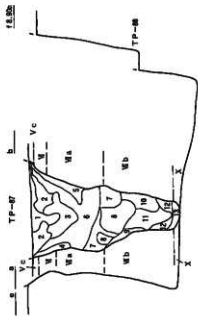
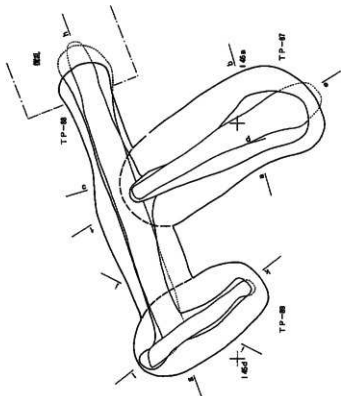
TP-84



- TP-84
- 1: 160層 裏
 - 2: 160層 裏
 - 3: 160層 裏
 - 4: 160層 裏
 - 5: 160層 裏
 - 6: 160層 裏

図IV-2-38 TP-84~86

TP-87-88-89

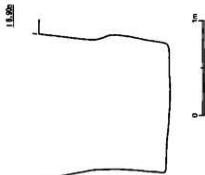


- TP-87 (a-b)
- 1: V&TSVb 區
 - 2: Vb>Vc 區
 - 3: Vc>Vb 區
 - 4: Vc>W・W 區
 - 5: W>V 區
 - 6: V區 區
 - 7: W區 區
 - 8: V>W 區
 - 9: W區 區
 - 10: W>V L_{2.5}
 - 11: V區 L_{2.5}
 - 12: W>V L_{2.5}
 - 13: V區 L_{2.5}

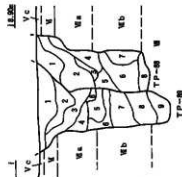
北照



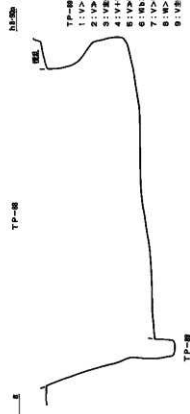
- TP-87 (c-d)
- 1: Vb+Vc 區
 - 2: Vc>Ma 區
 - 3: Ma>V 區
 - 4: W>V 區
 - 5: W區 區
 - 6: V區 L_{2.5}
 - 7: W區 L_{2.5}
 - 8: V區 L_{2.5}
 - 9: V區 L_{2.5}



- TP-88 (1-1)
- 1: Vb+Vc 區
 - 2: Vc>Ma 區
 - 3: Ma>V 區
 - 4: W>V 區
 - 5: V區 區
 - 6: V區 L_{2.5}
 - 7: W區 L_{2.5}
 - 8: V區 L_{2.5}



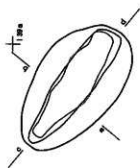
- TP-89 (1-1)
- 1: V>Vb 區
 - 2: V>Vb 區
 - 3: V區 區
 - 4: V區 區
 - 5: V區 L_{2.5}
 - 6: W>V L_{2.5}
 - 7: V>W L_{2.5}
 - 8: W>V L_{2.5}
 - 9: V區 L_{2.5}



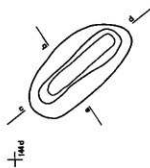
圖M-2-39 TP-87~89



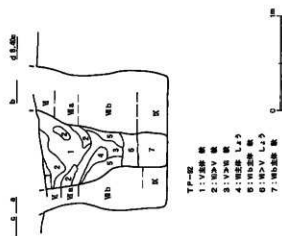
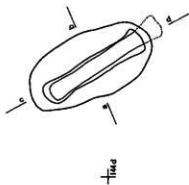
TP-92



TP-91

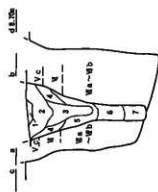


TP-90



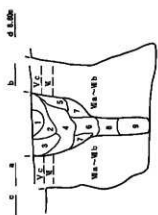
TP-92

- 1:Vb層 渠
- 2:Ma-V 渠
- 3:Vb層 渠
- 4:Ma層 L1,5
- 5:Ma層 L2,5
- 6:Ma-V L1,5
- 7:Ma層 渠



TP-91

- 1:Vb層Vb 渠
- 2:Vb層VcF 渠
- 3:Vb層 L1,5
- 4:Ma-Vc 渠
- 5:Ma-V L1,5
- 6:Ma層 L1,5
- 7:Vb層 L1,5



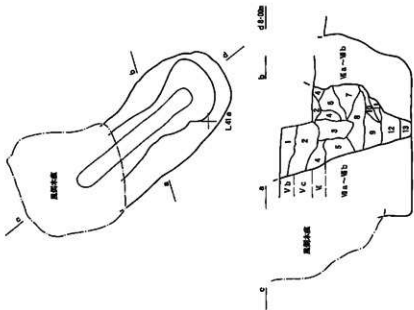
TP-90

- 1:Vb層 渠
- 2:Vb層Vb 渠
- 3:Vc-Vb 渠
- 4:Vc層 渠
- 5:Ma-V 渠
- 6:Ma-V L1,5
- 7:Ma層 渠
- 8:Ma層 L1,5
- 9:Vb層 L1,5

IV-2-40 TP-90~92

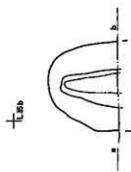


TP-93



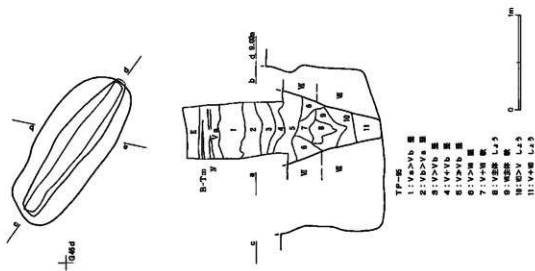
- TP-93
- 1: V腹筋 腹
 - 2: V背筋 背
 - 3: V腹筋 背
 - 4: V背筋 腹
 - 5: V背筋 背
 - 6: V背筋 腹
 - 7: V背筋 背
 - 8: V背筋 L4,5
 - 9: V背筋 L4,5
 - 10: V背筋 L4,5
 - 11: V背筋 腹
 - 12: V背筋 背

TP-94



- TP-94
- 1: Va>Vb 腹
 - 2: V背筋 腹
 - 3: V背筋 背

TP-95

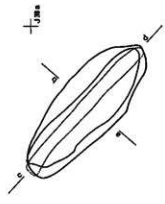


- TP-95
- 1: Va>Vb 腹
 - 2: Vb>Va 腹
 - 3: V>Vb 腹
 - 4: Vc>Vb 腹
 - 5: Vc>Vb 背
 - 6: V>Vb 腹
 - 7: V>Vb 背
 - 8: V背筋 L4,5
 - 9: V背筋 腹
 - 10: V背筋 L4,5
 - 11: V背筋 L4,5

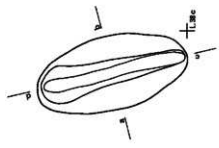
図IV-2-41 TP-93~95



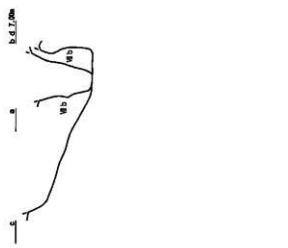
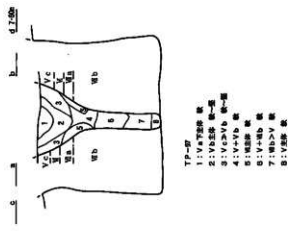
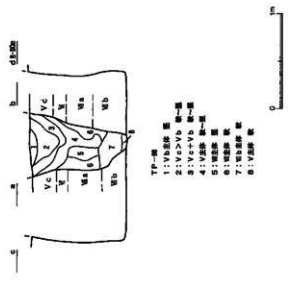
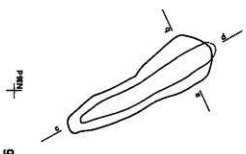
TP-98



TP-97

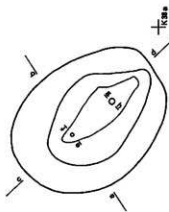


TP-96

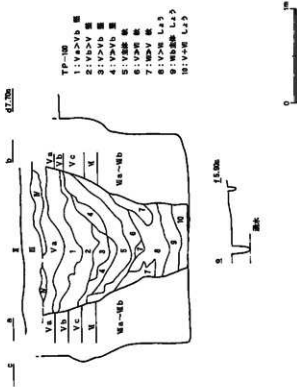
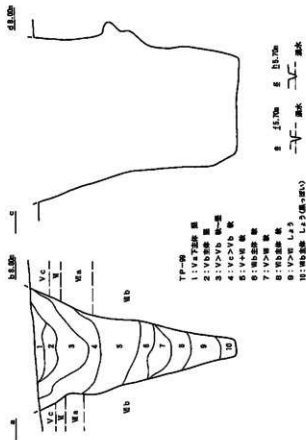
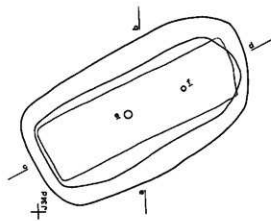


IV-2-42 TP-96~98

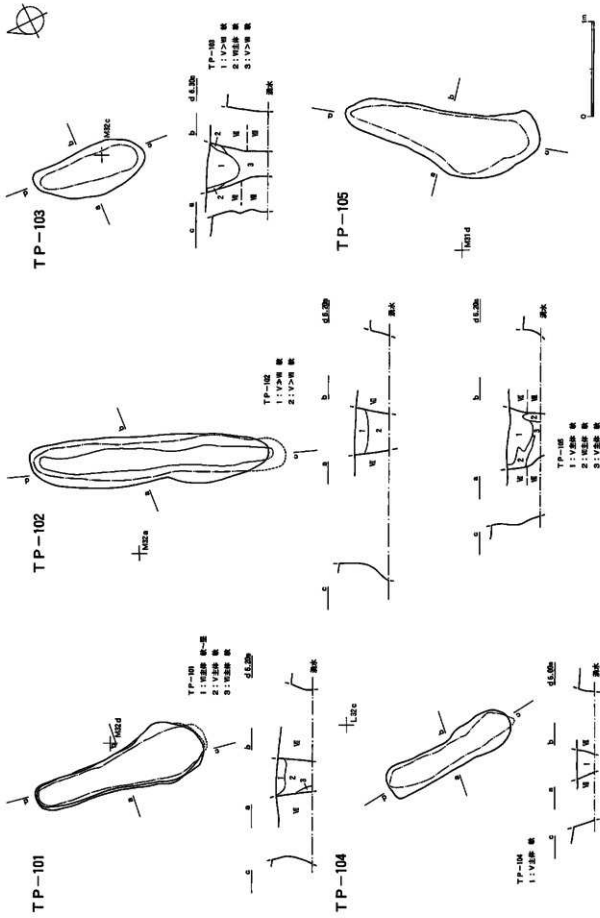
TP-99



TP-100



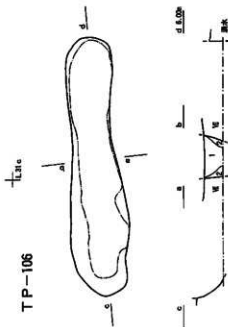
IV-2-43 TP-99・100



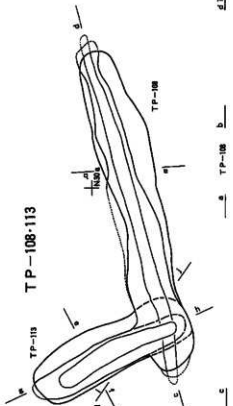
図IV-2-44 TP-101~105



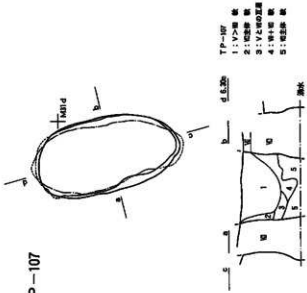
TP-106



TP-108-113



TP-107



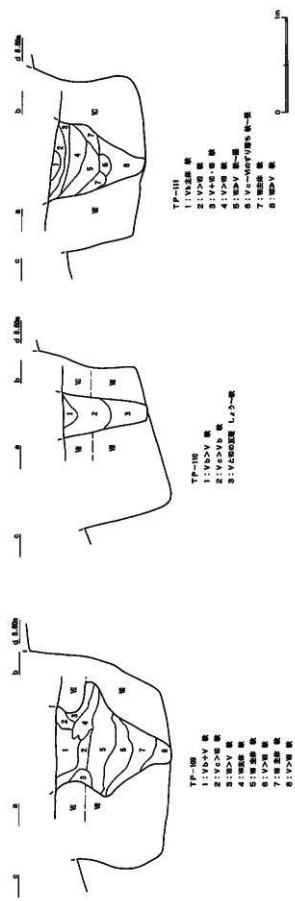
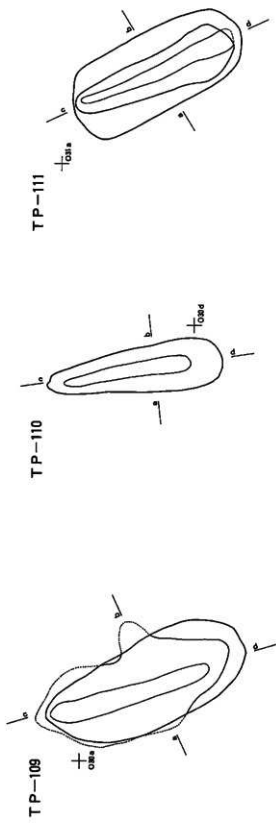
- TP-106 (a-b)
- 1: V>Vb 痕
 - 2: Vc>Vb 痕
 - 3: V>Vb 痕
 - 4: 埋跡 痕
 - 5: 埋跡 痕
 - 6: 埋跡 痕
 - 7: 埋跡 痕
 - 8: V>Vb L4.3

- TP-108 (a-1)
- 1: V>Vb 痕
 - 2: 埋跡 痕
 - 3: V>Vb 痕
 - 4: 埋跡 痕
 - 5: V>Vb 痕
 - 6: 埋跡 痕
 - 7: V>Vb 痕
 - 8: V>Vb 痕

- TP-109 (1-1)
- 1: V>Vb 痕
 - 2: 埋跡 痕
 - 3: 埋跡 痕
 - 4: V>Vb 痕

- TP-110 (1-1)
- 1: V>Vb 痕
 - 2: 埋跡 痕
 - 3: 埋跡 痕
 - 4: 埋跡 痕
 - 5: 埋跡 痕
 - 6: V>Vb 痕
 - 7: V>Vb 痕

IV-2-45 TP-106~108・113



TP-111
 1: Vb2層 砂
 2: V>砂 砂
 3: V+砂・ 砂
 4: V>砂 砂
 5: Vb>V 砂
 6: V+Veyリ層 砂
 7: 凝灰 砂
 8: Vb>V 砂

TP-110
 1: Vb>V 砂
 2: Vb>Vb 砂
 3: Vc200mm L1層

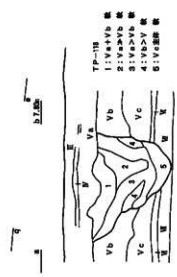
TP-109
 1: Vb>V 砂
 2: Vc>砂 砂
 3: Vb>V 砂
 4: 凝灰 砂
 5: 凝灰 砂
 6: V>砂 砂
 7: 凝灰 砂
 8: V>砂 砂

図IV-2-46 TP-109~111

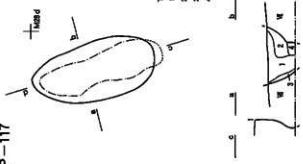


TP-118

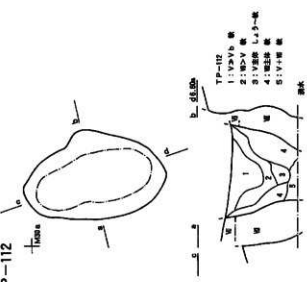
標本図例



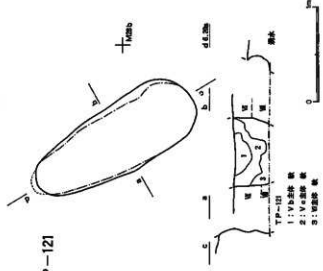
TP-117



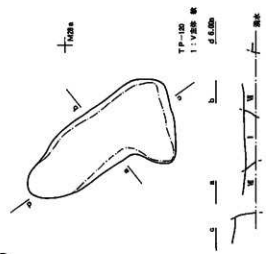
TP-112



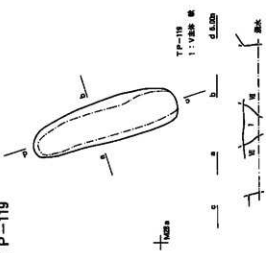
TP-121



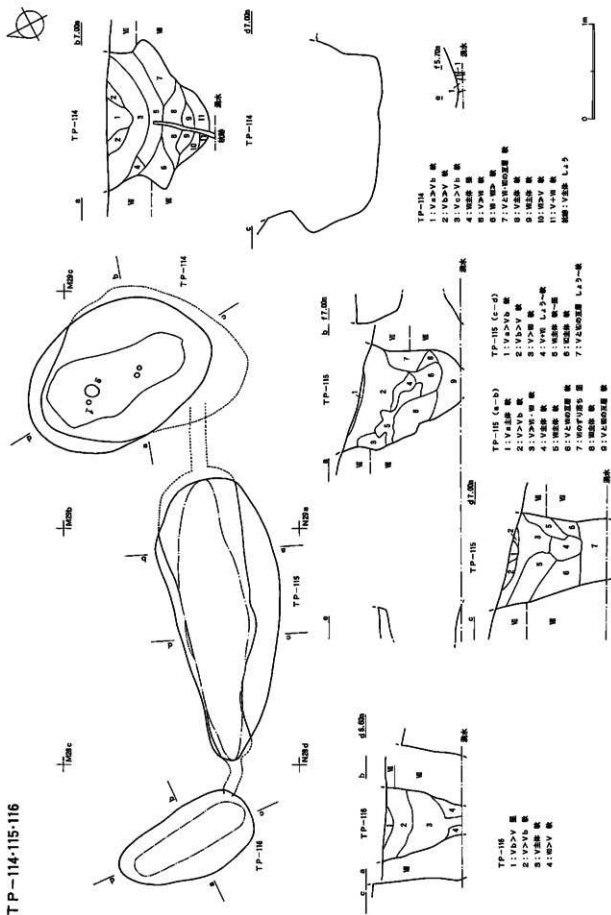
TP-120



TP-119



図IV-2-47 TP-112・117~121



図IV-2-48 TP-114~116

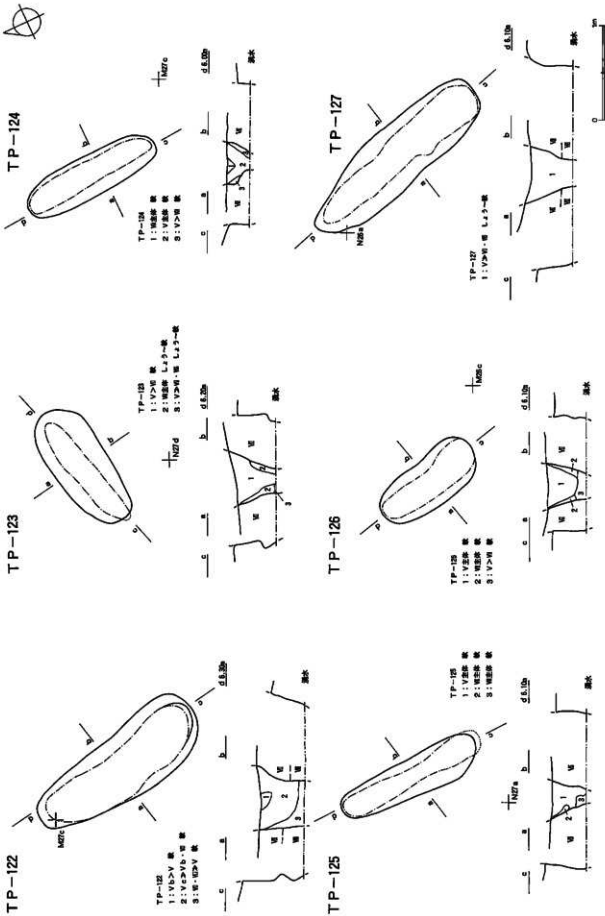
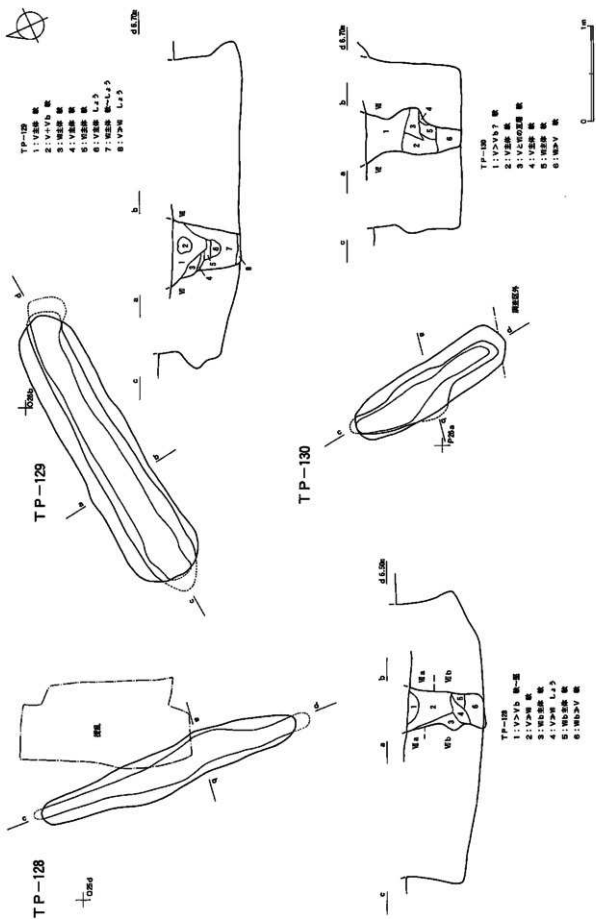


图 IV-2-49 TP-122~127



IV-2-50 TP128~130

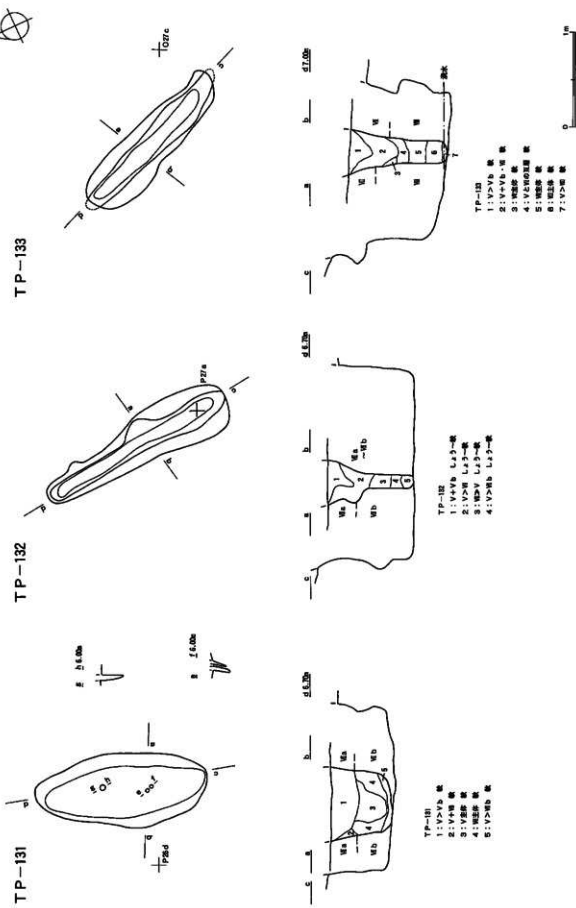
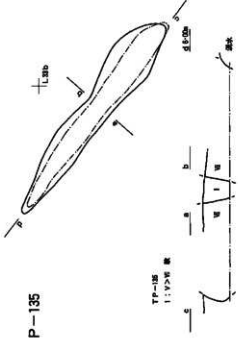


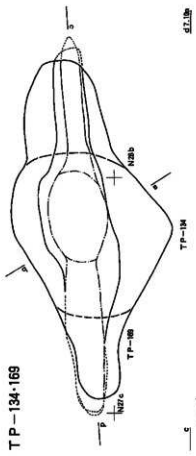
圖 IV-2-51 TP-131~133



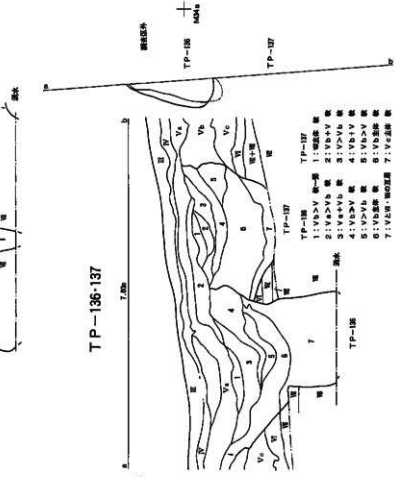
TP-135



TP-134・169



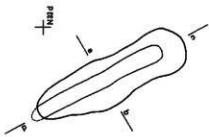
TP-136-137



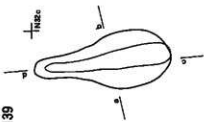
- TP-136
- 1: V>Vb 敷
 - 2: Vb>V 敷
 - 3: V>Vb 敷
 - 4: Vb>V 敷
 - 5: V>Vb 敷
 - 6: Vb>V 敷
 - 7: Vb>V 敷
 - 8: V>Vb 敷
 - 9: Vb>V 敷
 - 10: 埋設物
- TP-137
- 1: 埋設物
 - 2: Vb>V 敷
 - 3: V>Vb 敷
 - 4: Vb>V 敷
 - 5: V>Vb 敷
 - 6: Vb>V 敷
 - 7: V>Vb 敷
 - 8: Vb>V 敷
 - 9: V>Vb 敷
 - 10: 埋設物
- TP-138
- 1: V>Vb 敷
 - 2: Vb>V 敷
 - 3: V>Vb 敷
 - 4: Vb>V 敷
 - 5: V>Vb 敷
 - 6: Vb>V 敷
 - 7: V>Vb 敷
 - 8: Vb>V 敷
 - 9: V>Vb 敷
 - 10: 埋設物

図IV-2-52 TP-134~137・169

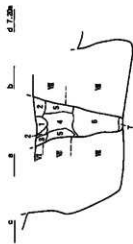
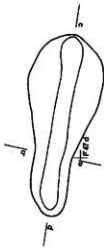
TP-138



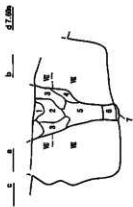
TP-139



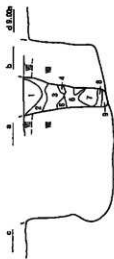
TP-140



- TP-138
- 1: V&S 腹 腹
 - 2: V&S V 腹 腹
 - 3: 腹 腹 腹
 - 4: V 腹 腹 腹
 - 5: 腹 腹 腹
 - 6: 腹 腹 腹
 - 7: V 腹 腹 腹



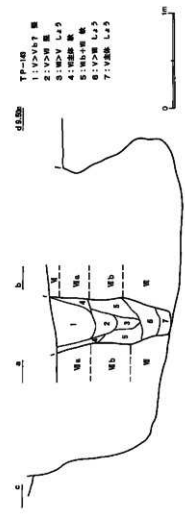
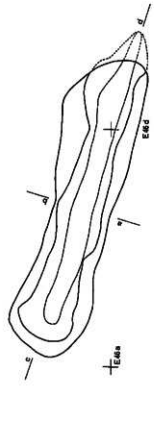
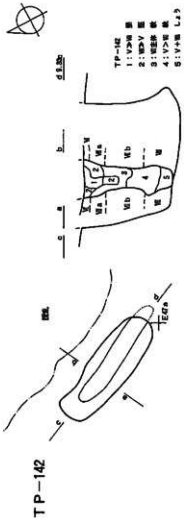
- TP-139
- 1: V&S 腹 腹
 - 2: V 腹 腹 腹
 - 3: 腹 腹 腹
 - 4: 腹 腹 腹
 - 5: V 腹 腹 腹
 - 6: 腹 腹 腹
 - 7: V 腹 腹 腹



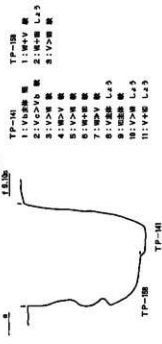
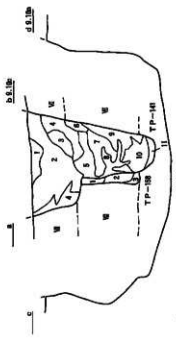
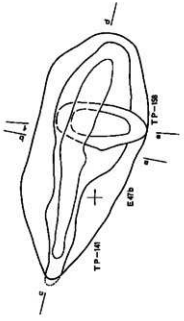
- TP-140
- 1: V 腹 腹
 - 2: V 腹 腹
 - 3: V 腹 腹
 - 4: 腹 腹 腹
 - 5: 腹 腹 腹
 - 6: V 腹 腹
 - 7: 腹 腹 腹
 - 8: V 腹 腹



图 IV-2-53 TP-138~140

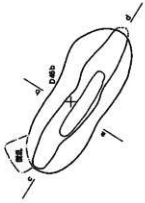


TP-141・158

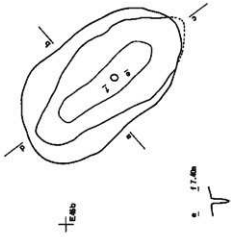


図IV-2-54 TP-141~143・158

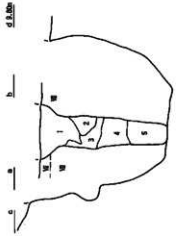
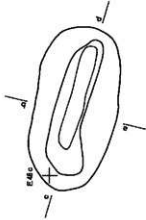
TP-144



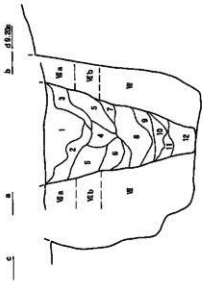
TP-145



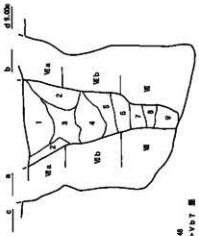
TP-146



- TP-144
- 1: V>V7 層
 - 2: 細胞 層
 - 3: V>V8 層
 - 4: 細胞 層
 - 5: V+V8 層



- TP-145
- 1: V>V6 層
 - 2: V>V8 層
 - 3: M>V 層
 - 4: 細胞 層
 - 5: M>V8 層
 - 6: 細胞 層
 - 7: 細胞 L4.5
 - 8: V>V8 層
 - 9: M>V8 L4.5
 - 10: 細胞 L4.5
 - 11: M>V L4.5
 - 12: V>V8 層



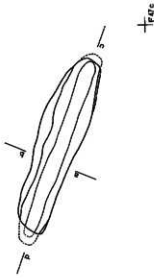
- TP-146
- 1: V>V7 層
 - 2: M+細胞 層
 - 3: V>V8 層
 - 4: M>V 層
 - 5: 細胞 層
 - 6: V+V8 層
 - 7: V>V8 L4.5
 - 8: M>V L4.5
 - 9: V>V8 L4.5



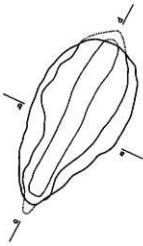
図 2-55 TP-144~146



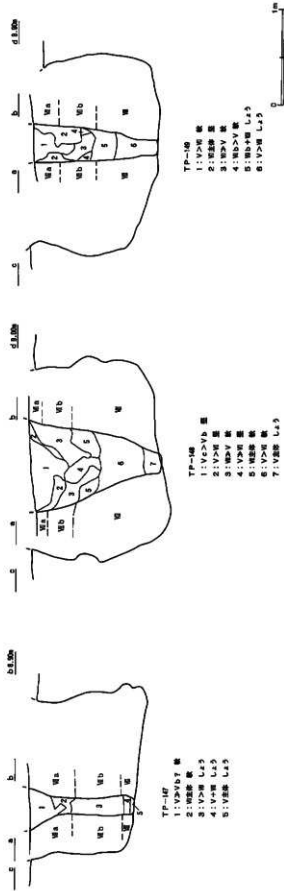
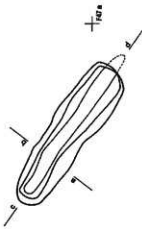
TP-149



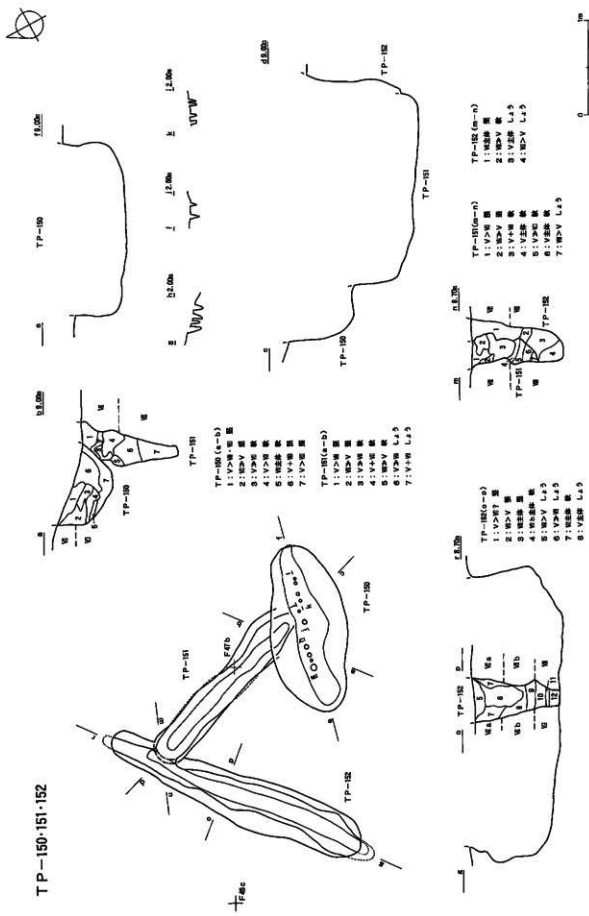
TP-148



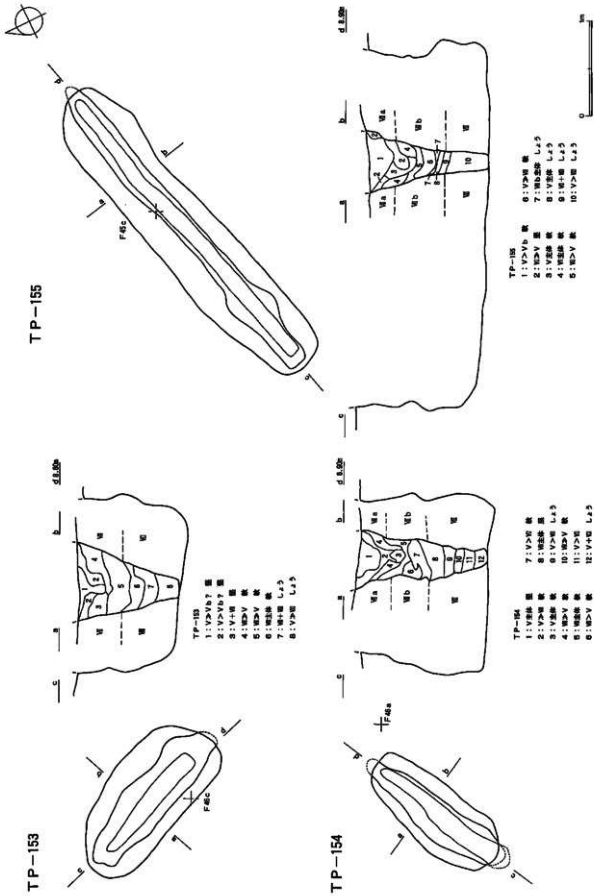
TP-147



図IV-2-56 TP-147~149

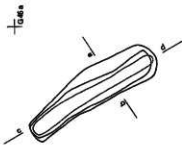


IV-2-57 TP-150~152

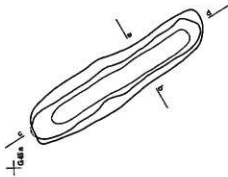


図IV-2-58 TP-153~155

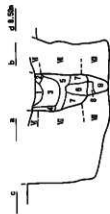
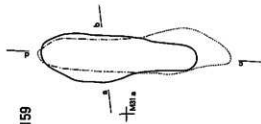
TP-156



TP-157



TP-159



- TP-156
- 1: V>V 層
 - 2: V&S 層
 - 3: V>V 層
 - 4: V>V 層
 - 5: V>V 層
 - 6: V&S 層 L+D
 - 7: V<V 層
 - 8: V<V 層 L+D
 - 9: V>V 層 L+D

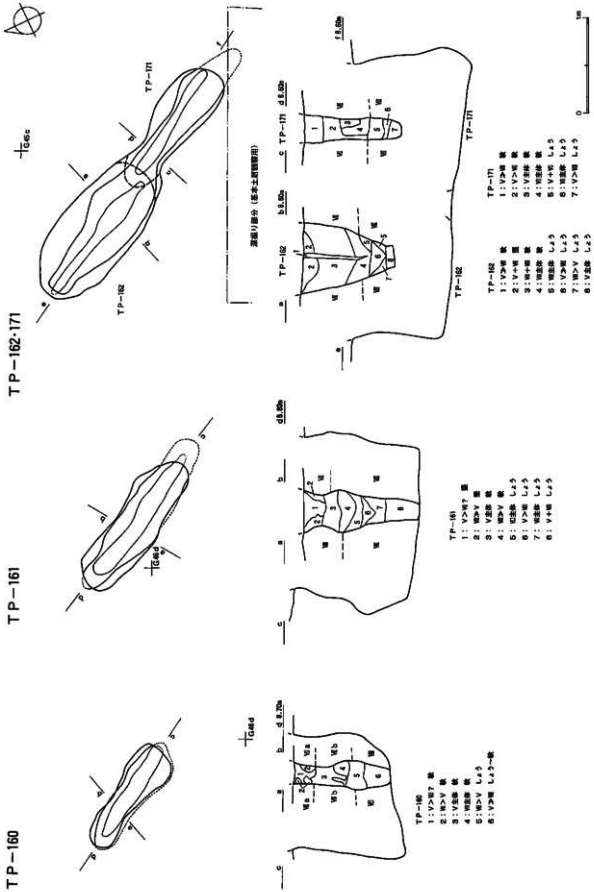


- TP-157
- 1: V>V 層
 - 2: V&S 層 L+D
 - 3: V&S 層
 - 4: V&S 層
 - 5: V&S 層 L+D



- TP-159
- 1: V>V 層
 - 2: V&S 層
 - 3: V&S 層
 - 4: V<V 層

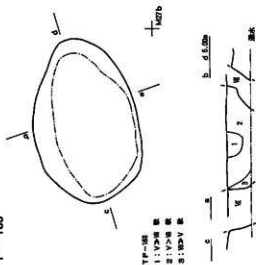




図IV-2-60 TP-160~162・171

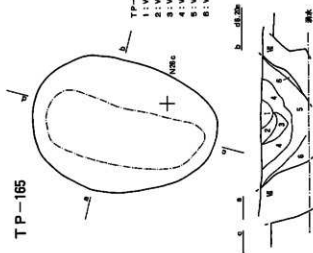


TP-163



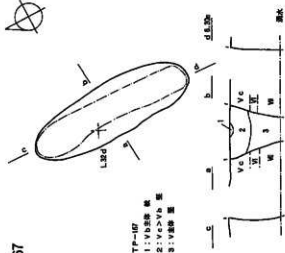
TP-163
1: V>V 線
2: V>V 線
3: 1.427b

TP-165



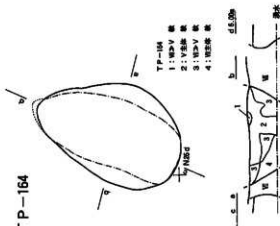
TP-165
1: V>V 線
2: V>V 線
3: V線 線
4: V線 線
5: V線 線
6: V+V 線

TP-167



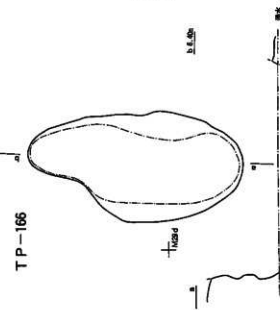
TP-167
1: V線 線
2: Vc>Vb 線
3: V線 線

TP-164



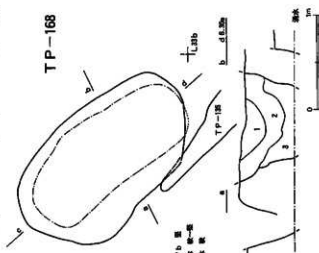
TP-164
1: 1.185V 線
2: V線 線
3: 1.185V 線
4: 1.185V 線

TP-166



TP-166
1: Vc>Vb 線
2: V線 線
3: V線 線

TP-168

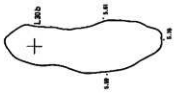


TP-168
1: Vc>Vb 線
2: V線 線
3: V線 線

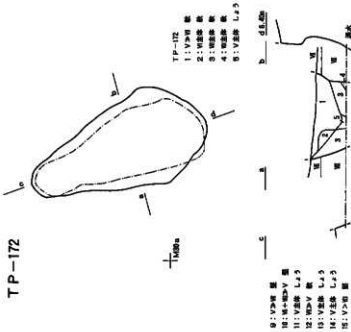
IV-2-61 TP-163~168



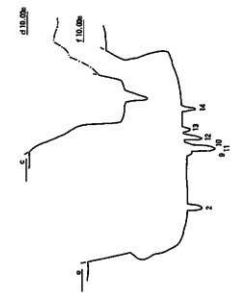
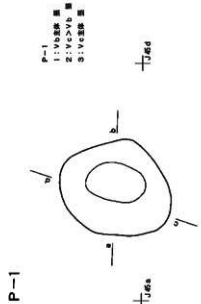
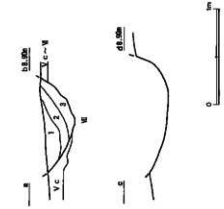
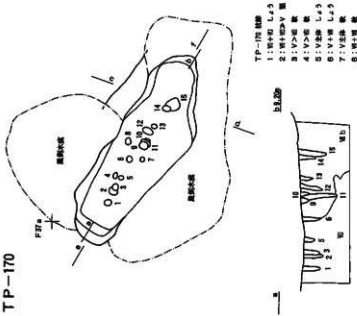
TP-173



TP-172



TP-170



図IV-2-62 TP-170・172・173、P-1

表IV-2-4 Tピット一覽 T P番号の()内は「深さあり」直下の「深さあり」は「深さなし」に「深さなし」は「深さあり」()付きは「断面非確認」を表す 分析は左粉体分析、植物性炭素分析の原料を採取したTピット

区	園	園番	T P番号	調査区	抽出層位	平面形態	確認面積(m ²)	長さ	短径	断面半径(m)	長さ	短径	深さ(m)	軸方向	坑	重量	炭素比	分類	分析
	N-2-9	7-1-2	1	G46 b・c, H46 a・d	Ⅱ	楕円形/溝状	1.66	0.72	1.34	0.17	1.24	N-36°	-E	0		7.9	B1		
*		7-3-4	2	H45 d, H46 a・b	Vc	長楕円形/溝状	2.18	0.84	1.99	0.19	1.50	N-40°	-W	0		10.5	A2		
*		7-5-6	3	H45 a・b	Vc	楕円形/長楕円形	1.78	0.91	1.20	0.28	1.67	N-35°	-W	0		4.3	B1		
	N-2-10	7-7-8	4	H44 c, H45 b	Vc	楕円形/溝状	1.86	0.90	1.52	0.38	1.44	N-30°	-W	0		8.4	B1		
*		7-9-8-1	5	I45 a	Vc	長楕円形/溝状	2.14	0.70	2.06	0.38	1.32	N-20°	-E	0		5.4	B1		
*		8-2-3	6	I44 d	Vc	楕円形/溝状	1.86	1.04	1.54	0.30	1.55	N-19°	-E	0		5.1	B1		
	N-2-11	8-4-5	7	I44 a・d	Vc	長楕円形/溝状	1.76	0.60	1.47	0.19	1.24	N-19°	-W	0		7.7	B1		
*		8-6-7	8	I45 c, J45 d	Vc	楕円形/溝状	1.45	0.66	1.44	0.18	1.32	N-37°	-W	0		8.0	B1		
*		8-8-9-1	9	G35 b, H35 a・b	Ⅱ	楕円形/不整形凹形	2.48	1.70	2.02	0.70	0.92	N-45°	-W	6		2.9	C2		
	N-2-12	9-2	10	I44 c, I45 b	Vb	溝状/溝状	1.97	0.68	1.56	0.16	1.20	N-12°	-W	0		9.8	A2		
*		9-3-4	11	I44 c, J44 d	Vb	溝状/溝状	1.67	0.59	1.67	0.17	1.62	N-11°	-W	0		9.8	A2		
*		9-5-6	12	I44 b, J44 a	Vc	楕円形/溝状	2.09	0.97	1.98	0.13	1.74	N-5°	-W	0		15.2	A2		
	N-2-13	9-7-8	13	J44 a・b	Vb	長楕円形/溝状	2.03	0.82	1.95	0.19	1.38	N-8°	-W	0		10.3	A2		
*		9-9,10-1	14	J44 c, J45 b, K44 d, K45 a	Vc	溝状/溝状	(2.00)	0.60	(1.78)	0.22	1.08	N-24°	-W	1		8.1	B2		
*		10-2-3	15	K44 d, K45 a	Vc	溝状/溝状	(2.80)	0.62	2.76	0.22	1.10	N-44°	-W	0		12.5	A1-L		
	N-2-14	10-4-5	16	K44 a・b・c・d	Vc	長楕円形/溝状	2.84	0.74	2.62	0.13	1.11	N-71°	-W	0		20.2	A1-L		
*		8-2-3	17	L44 a・d, L45 a	Vc	溝状/溝状	3.40	0.34	3.15	0.16	0.59	N-88°	-W	0		19.7	A1-L		
	N-2-15		18	I43 c, I44 b	Vb	楕円形/溝状	1.43	0.65	1.33	0.16	1.08	N-8°	-W	0		8.3	B1		
*			19	I43 b, J43 a・d	Vc	長楕円形/溝状	2.16	0.76	2.01	0.29	1.58	N-12°	-E	0		6.9	B1		
*			20	I43 b, J43 a	Vc	楕円形/溝状	1.80	1.14	1.20	0.22	1.88	N-23°	-E	0	(81)	5.5	B1		
	N-2-16		21	I42 c, J42 d	Vc	楕円形/溝状	1.79	0.96	1.55	0.18	1.21	N-21°	-E	0		8.6	B1		
*			22	J43 a・b	Vc	楕円形/溝状	1.28	0.69	1.05	0.16	1.14	N-21°	-E	0		6.6	B1		
*		10-6-7	23	J43 b, K43 a	Vc	溝状/溝状	1.73	0.61	1.50	0.13	1.35	N-1°	-E	0		11.5	A2		
	N-2-17	10-8-9	24	K43 b	Vc	溝状/溝状	1.98	0.53	1.67	0.16	1.12	N-6°	-E	0		10.4	A2		
*		11-1-2	25	K42 c・d	Vc	溝状/溝状	2.32	0.52	2.09	0.16	1.29	N-12°	-W	0		13.1	A1		
*			26	K42 b・c	Vc	楕円形/溝状	2.04	0.77	1.73	0.10	1.26	N-33°	-W	0		17.3	A2		
	N-2-18	11-3-4	27	L42 b・c, L43 b	Ⅱ	溝状/溝状	3.30	0.49	3.28	0.16	0.94	N-45°	-W	0		20.5	A1-L		
*		11-5-6	28	K42 a・d	Vc	溝状/溝状	3.02	0.53	2.87	0.11	1.18	N-87°	-W	0		26.1	A1-L		

図	図版番号	調査区	出土部位	平面形態 破断面/底面	埋断面規模(m)		底面傾斜(m)		深さ (m)	軸方向	抗 剪	縦 長	分 析
					長さ	短径	長さ	短径					
IV-2-19	11-7-8	J42 a	VI	溝状/溝状	1.16	0.41	1.05	0.14	0.95	N-55°-E	0	7.5	B1
*	30	I42 a・b	VI	溝状/溝状	2.09	0.50	1.94	0.25	0.89	N-24°-E	0	7.8	B1
*	11-9,12-1	I41 c・d	VI	楕円形/溝状	2.26	1.16	1.98	0.23	1.44	N-10°-E	0	8.6	B1
IV-2-20	12-2-3	J41 a	VI	楕円形/溝状	1.46	0.87	1.02	0.19	1.64	N-3°-W	0	5.4	B1
*	12-4-5	J41 b, K41 a	Vc	楕円形/溝状	1.68	0.79	1.48	0.23	1.31	N-26°-E	0	6.4	B1
*	12-6-7	J40 b・c	Vb	溝状/溝状	(3.13)	0.71	2.94	0.20	1.46	N-70°-W	0	(80)	A1-L
IV-2-21	12-8-9	J40 c, K40 d, K41 a	Vb	溝状/溝状	2.19	0.96	1.98	0.26	1.68	N-1°-W	0	7.6	B1
*	36	L41 a・b・c・d	Vb	長楕円形/溝状	2.26	0.68	1.84	0.22	1.36	N-3°-E	0	8.4	B1
*	13-1-2	K40 c, L40 a・d	Vb	溝状/溝状	3.04	0.72	3.06	0.30	1.51	N-75°-W	0	10.2	A1-L
IV-2-22	11-9,12-1	L40 a・b・c・d	Vb	溝状/溝状	3.46	0.74	3.21	0.28	1.05	N-60°-E	0	11.5	A1-L
*	39	L40 b・c	Vb	溝状/溝状	3.57	0.83	3.38	0.27	0.90	N-78°-W	3	12.5	A1-L-2
IV-2-23	12-6-7	M39 b・c・d	Vc	溝状/溝状	3.15	0.71	3.11	0.27	1.18	N-70°-E	0	11.5	A1-L
*	41	K39 c・d, K40 a	Vb	楕円形/溝状	1.78	0.64	1.69	0.14	1.53	N-48°-E	0	12.1	A2
*	42	K39 c・d	Vc	楕円形/溝状	1.43	0.64	0.96	0.19	1.24	N-24°-W	0	5.0	B1
IV-2-24	13-3-4	J39 b, K39 a	Vc	長楕円形/溝状	2.16	0.82	2.28	0.24	1.57	N-32°-W	0	9.5	A1
*	44	J38 c・K39 d	Vb	楕円形/溝状	1.51	0.65	1.69	0.26	1.67	N-33°-W	0	6.5	B1
*	45	J39 b	Vc	楕円形/溝状	1.83	0.69	1.63	0.13	1.40	N-36°-W	0	12.5	A2
IV-2-25	13-3-4	I39 b・c	Vc	溝状/溝状	2.64	0.58	2.96	0.24	1.44	N-45°-W	0	12.3	A1-L
*	47	I39 a・d	Vc	溝状/溝状	2.86	0.65	2.68	0.28	1.39	N-49°-W	0	9.6	A1-L
IV-2-26	13-5-6	H39 c, I39 d	VI	長楕円形/溝状	2.03	0.85	1.77	0.20	1.43	N-38°-W	0	8.9	B1
*	49	H38 c	Vc	楕円形/溝状	1.74	0.90	1.38	0.24	1.50	N-49°-W	0	5.8	B1
*	13-7-8	I38 c, I39 b	Vc	楕円形/溝状	1.61	0.70	1.46	0.26	1.54	N-61°-W	0	5.6	B1
IV-2-27	51	J38 c・d, J39 a・b	Vc	楕円形/溝状	2.16	0.94	2.13	0.32	1.50	N-8°-E	2	6.7	B2
*	52	K38 a・b	Vc	楕円形/溝状	2.01	0.96	1.81	0.25	1.50	N-5°-W	0	7.3	B1
*	53	K38 b, L38 a	Vc	楕円形/溝状	1.46	0.77	1.25	0.19	1.44	N-15°-W	0	6.6	B1
*	54	K38 b, L38 a	Vc	楕円形/溝状	1.98	0.92	1.75	0.16	1.70	N-14°-E	0	10.9	A2
IV-2-28	13-9,14-1	L37 d, L38 a	Vc	長楕円形/溝状	(1.44)	0.57	(1.55)	0.13	1.07	N-11°-W	0	11.9	A2
*	55	L38 d, K38 a	Vc	溝状/溝状	4.00	0.79	4.07	0.36	1.33	N-49°-E	0	-78	A1-L
IV-2-29	14-2-3	L38 d, K38 b	Vb	溝状/溝状	2.41	(0.63)	2.12	0.21	1.24	N-10°-E	0	10.1	A1-L
IV-2-28	14-4-5	L38 c, M38 d	Vb	溝状/溝状	2.41	(0.63)	2.12	0.21	1.24	N-10°-E	0	-F14	10.1

因	區	版	TP 番号	調	查	区	抽出 部位	平面形態 埋設面/底面	埋設面傾斜(m) 長徑 短徑	底面傾斜(m) 長徑 短徑	深さ (m)	長軸方向	板 重	底面 長短比	分 析
N-2-29	14-6-7	58		M38 a · b	V c	長槽凹形/溝状	2.74	0.72	2.58	0.19	0.87	N-3°-W	0	13.6	A1-L
N-2-30	14-8-9	59		L37 b · c	W	長槽凹形/溝状	1.62	0.48	1.50	0.17	1.41	N-48°-W	0	8.8	B1
*		60		M36 d, M37 a	V c	長槽凹形/溝状	3.24	1.16	3.31	0.31	1.04	N-85°-W	0	10.7	A1-L
*		61		M36 b · c · d	W a	溝状/溝状	3.30	0.47	3.27	0.16	1.00	N-83°-W	0	20.4	A1-L
N-2-31	15-1-2	62		M36 a · d	V c	槽凹形/溝状	2.19	0.90	1.78	0.12	1.28	N-22°-W	0	14.8	A2
*	15-3-4	63		L36 b · c	V c	槽凹形/溝状	1.58	0.76	1.61	0.23	1.33	N-4°-W	0	7.0	B1
*		64		L36 c · L37 b	V c	槽凹形/溝状	1.28	0.67	1.13	0.17	1.33	N-4°-E	0	6.6	B1
N-2-32		65		L36 c · d, L37 a · b	V c	槽凹形/溝状	1.67	0.73	1.16	0.17	1.44	N-2°-W	0	-67	B1
*	15-5-6	66		L36 c · d	V c	槽凹形/溝状	1.94	0.76	1.24	0.24	1.51	N-25°-E	0	-67	B1
*	15-7-8	67		L36 a · b · c · d, L37 a	V c	溝状/溝状	(3.66)	0.78	3.58	0.18	1.20	N-78°-W	0	+65 · 66	19.9 A1-L
*		68		K36 b · c	V c	槽凹形/溝状	2.03	0.72	1.88	0.21	1.46	N-20°-W	0	9.0	A2
N-2-33		69		K37 b · c	V c	槽凹形/溝状	1.80	0.72	1.82	0.18	1.76	N-14°-E	0	10.1	A2
*	15-9,16-1	70		J37 b · c	V c	槽凹形/溝状	1.64	0.80	1.38	0.27	1.58	N-23°-W	0	5.1	B1
*		71		L35 a	V a	槽凹形/溝状	1.60	0.80	1.16	0.27	1.48	N-26°-E	0	4.3	B1
N-2-34	16-2-3	72		L35 c	V a	槽凹形/溝状	1.85	0.98	1.84	0.26	1.67	N-1°-E	0	7.1	B1
*	口輪4-3	73		E40 b · c	W	長槽凹形/溝状	(2.93)	1.02	(2.73)	0.25	1.69	N-35°-W	0	10.9	A1-L
*		74		E39 c, E40 b, F39 d, F40 a	W	長槽凹形/溝状	3.01	0.96	2.45	0.14	1.54	N-12°-E	0	17.5	A1-L
N-2-35	16-4-5	75		F34 c, F35 b, G34 d, G35 a	V f	溝状/溝状	3.09	0.70	2.92	0.30	1.16	N-35°-W	0	9.7	A1-L
*	16-6-7	76		J39 c, J40 b, K39 d, K40 a	V c	槽凹形/溝状	1.85	0.89	1.37	0.17	1.27	N-43°-E	0	8.1	B1
*		77		H37 a	W	溝状/溝状	(1.36)	0.38	(1.09)	0.19	0.71	N-36°-W	0	-	-
N-2-29	16-8-9	78		L36 d, K36 d	V b	槽凹形/溝状	1.53	(0.74)	1.29	0.16	1.26	N-13°-W	0	-56	B1
N-2-36		79		M39 d, M40 a	V c	槽凹形/溝状	2.17	0.80	1.77	0.28	1.31	N-30°-W	0	6.3	B1
N-2-20		80		J40 b	V b	長槽凹形/溝状	1.55	0.57	1.45	0.22	1.38	N-13°-W	0	(34)	6.5 B1
N-2-15		81		I44 b, J43 a	V c	槽凹形/長槽凹形	-	-	(0.52)	(0.30)	1.12	N-54°-E	0	(20)	1.7 B1
N-2-36	17-1-2	82		L36 d	V b	-/-	(0.75)	(0.98)	-	-	1.24	N-37°-W	1	-	-
*		83		M37 a · b	W b	溝状/溝状	1.99	0.41	2.12	0.13	0.83	N-29°-W	0	16.3	A1
N-2-37		84		M37 b, N37 a	W b	溝状/溝状	3.09	0.47	3.06	0.15	0.73	N-5°-W	0	20.4	A1-L
*	17-3-4	85		H42 c	W a	-/-溝状	(0.78)	0.47	(0.79)	0.11	0.99	N-31°-E	0	-	-
*		86		H44 d, H45 a	W a	-/-	(0.67)	1.01	(0.23)	0.16	1.45	N-1°-W	-	-	-

図	図版	T.P 番号	調査区	検出 層位	平面形態 竪断面/底面	障壁画 長さ 短径 長さ 短径	底面規模(m) 長さ 短径 長さ 短径	深さ (m)	長軸方向	抗 防	重積	底面 長短比	分類 分析		
IV-2-38		87	H45c, H46b, I45d, I46a	Vc	楕円形/溝状	(2.29) (3.03)	1.12 0.73	2.24 (3.29)	1.58 N-83°-W	0	-88	5.3	B1		
*	17-5-6	88	H45c, H46b	Vc	溝状/溝状	(3.03)	0.73	0.34	1.19	N-83°-W	0	-87.89	9.7	A1-L	
*	17-5-7	89	H45b・c, I45d	Vc	楕円形/溝状	1.58	0.86	1.39	2.23	1.40	N-10°-W	0	-88	6.0	B1
IV-2-39		90	H44c, I44d	Vc	楕円形/溝状	1.40	0.70	1.34	0.15	1.33	N-2°-W	0	-88	8.9	B1
*	17-8-9	91	I44d	Vc	楕円形/溝状	1.28	0.66	0.90	0.14	1.40	N-12°-W	0	-	6.4	B1
IV-2-40		92	I38d, I39a	W	楕円形/長楕円形	1.53	0.89	1.30	0.40	1.40	N-24°-W	0	3.3	C1	
*	18-1-2	93	K40c, K41b, L40d, L41a	Vb	楕円形/溝状	(1.70)	0.97	1.53	0.20	1.40	N-13°-W	0	7.7	B1	
*		94	L34c, L35b	Va	-/-	(0.71)	(0.91)	(0.53)	(0.21)	1.53	N-26°-E	-	-	-	
*		95	G46a・b	W	長楕円形/溝状	1.75	0.75	1.65	0.17	1.25	N-27°-W	0	9.7	A2	
IV-2-41		96	N36a・d	W	長楕円形/溝状	1.70	0.53	1.61	0.25	0.70	N-3°-W	0	6.4	B1	
*	18-1-2	97	L38a	Vc	楕円形/溝状	1.62	0.78	1.52	0.15	1.30	N-14°-E	0	10.1	A2	
*		98	J37d, I37c	Vc	長楕円形/溝状	1.76	0.66	1.76	0.14	1.04	N-24°-W	0	12.6	A2	
IV-2-42		99	J37c, K37d	Vc	楕円形/不整形楕円形	1.73	1.30	1.00	0.33	2.20	N-18°-W	2	3.0	C2	
*	18-5-6	100	I34c, J34d	Vc	楕円形/楕円形	2.53	1.53	2.22	0.64	1.34	N-2°-W	2	3.5	C2	
IV-2-43		(101)	L32b・c, M32a・b	W	長楕円形/-	1.86	0.66	-	-	(0.38)	N-6°-E	-	-	-	
*	18-7-8	(102)	L32b, M32a	W	溝状/-	2.51	0.50	-	-	(0.36)	N-24°-E	-	-	-	
*	18-9, 19-1	(103)	M32a・b・c・d	W	楕円形/-	1.16	0.50	-	-	(0.64)	N-5°-E	-	-	-	
*	19-2-3	(104)	L32b・c	W	溝状/-	1.46	0.40	-	-	(0.18)	N-7°-W	-	-	-	
*		(105)	L31c, M31d	W	長楕円形/-	2.10	0.70	-	-	(0.52)	N-36°-E	-	-	-	
IV-2-44		(106)	L31b・c	W	溝状/-	2.74	0.62	-	-	(0.28)	N-69°-W	-	-	-	
*		(107)	L31a・d, M31b	W	楕円形/-	1.52	0.78	-	-	(0.62)	N-11°-E	-	-	-	
*	19-4-5	108	M30b, N29d, N30a	W	溝状/溝状	3.42	0.54	3.78	0.19	1.40	N-79°-W	0	-113	19.9	A1-L
IV-2-45		109	N30a, N30b	W	楕円形/溝状	2.20	1.05	1.75	0.23	1.20	N-11°-E	0	7.6	B1	
*		110	N30b, O30a	W	長楕円形/溝状	1.86	0.54	1.35	0.19	1.10	N-17°-E	0	7.1	B1	
*	19-6-7	111	O31a	W	楕円形/溝状	1.93	0.92	1.73	0.24	1.15	N-4°-E	0	7.2	B1	
IV-2-46		(112)	M30a	W	楕円形/-	1.50	0.96	-	-	(0.96)	N-11°-E	-	-	-	
IV-2-44		113	M29c, N29d	W	長楕円形/溝状	1.75	0.55	1.37	0.25	1.54	N-1°-E	0	-108	5.5	B1
IV-2-47		20-1-2	M29a・b・c	W	楕円形/不整形楕円形	2.28	1.44	1.56	0.75	1.09	N-32°-E	4	2.1	C2	
*		(115)	M28c, M29b	W	長楕円形/-	3.00	1.30	-	-	(1.26)	N-66°-W	-	-	A1-L	

図	図版番号	T P	調査区	橋出部位	平面形態	橋脚面規模(m)	底面規模(m)	深さ(m)	橋脚方向	杭筋	重複	底面長短比	分期	分期
IV-2-47	(116)		M28 b	Ⅱ	楕円形/-	長さ 1.50 短径 0.80	-	(0.85) N-3°-W	-	-	-	-	-	-
IV-2-46	(117)		M28 a	Ⅱ	楕円形/-	長さ 1.30 短径 0.63	-	(0.42) N-12°-E	-	-	-	-	-	-
*	118		P 26 a-d	V a	-	-	-	(0.83)	-	-	-	-	-	-
*	(119)		L 28 b, M28 a	Ⅱ	長楕円形/-	長さ 1.60 短径 0.48	-	(0.17) N-8°-E	-	-	-	-	-	-
*	(120)		L 27 c, M27 d	Ⅱ	長楕円形/-	長さ 1.80 短径 0.65	-	(0.24) N-13°-W	-	-	-	-	-	-
*	20-3-4	(121)	M27 c-d	Ⅱ	楕円形/-	長さ 1.86 短径 0.73	-	(0.54) N-5°-W	-	-	-	-	-	-
IV-2-48	(122)		M27 a-b, c-d	Ⅱ	長楕円形/-	長さ 1.97 短径 0.73	-	(0.65) N-12°-W	-	-	-	-	-	-
*	(123)		M27 b-c	Ⅱ	楕円形/-	長さ 1.38 短径 0.64	-	(0.50) N-76°-E	-	-	-	-	-	-
*	(124)		M27 a	Ⅱ	長楕円形/-	長さ 1.49 短径 0.43	-	(0.24) N-0°-W	-	-	-	-	-	-
*	20-5-6	(125)	M26 c, M27 b	Ⅱ	長楕円形/-	長さ 1.58 短径 0.45	-	(0.43) N-2°-W	-	-	-	-	-	-
*	(126)		M26 a	Ⅱ	楕円形/-	長さ 1.18 短径 0.54	-	(0.43) N-10°-W	-	-	-	-	-	-
*	20-7	(127)	M26 b, N26 a	Ⅱ	長楕円形/-	長さ 2.20 短径 0.65	-	(0.43) N-16°-W	-	-	-	-	-	-
IV-2-49	20-8-9	128	N25 c, O25 d	Ⅱ a	溝状/溝状	長さ 2.84 短径 0.55	3.10	0.32	0.92	N-6°-E	0	9.7	A1-L	-
*	129		O25 c, O26 a-b	Ⅱ	溝状/溝状	長さ 3.10 短径 0.81	3.31	0.36	0.89	N-88°-E	0	9.2	A1-L	-
*	21-1-2	130	O26 b, P26 a	Ⅱ	溝状/溝状	長さ 1.81 短径 0.51	1.70	0.21	1.00	N-7°-W	0	5.5	B1	-
*	21-3-4	131	O26 c, P26 d	Ⅱ a	楕円形/長楕円形	長さ 1.81 短径 0.64	1.70	0.56	0.71	N-17°-E	3	3.0	C2	-
*	21-5-6	132	O26 c, O27 b, P26 d, P27 a	Ⅱ a	溝状/溝状	長さ 2.13 短径 0.55	1.90	0.18	1.04	N-4°-W	0	10.6	A2	-
*	133		O27 a-b	Ⅱ	長楕円形/溝状	長さ 1.82 短径 0.68	1.57	0.19	1.05	N-22°-W	0	8.3	B1	-
IV-2-51	21-7-8	134	N27 c-d, N28 a-b	Ⅱ	楕円形/楕円形	長さ (1.76) 短径 0.49	0.68	0.64	1.27	N-68°-W	-	169	1.5	C
*	21-9	(135)	L32 c-d, L33 b	Ⅱ	溝状/-	長さ 2.47 短径 (0.92)	0.36	-	(0.28) N-28°-W	-	(168)	-	-	-
*	22-1	136	L33 c, M33 d	V a	-	長さ (0.92) 短径 -	0.68	(0.28)	(1.84) N-37°-E	-	-	-	-	-
*	137		M33 d	V a	-	-	-	(0.98)	-	-	-	-	-	-
IV-2-52	22-3-4	138	N33 a	Ⅱ	長楕円形/溝状	長さ 1.80 短径 0.61	1.54	0.20	1.09	N-1°-W	2	7.7	B2	-
*	22-5-6	139	N32 b	Ⅱ	長楕円形/溝状	長さ 1.46 短径 0.61	1.33	0.26	0.92	N-20°-E	0	5.1	B1	-
*	22-7-8	140	E47 b-c, F47 d	Ⅱ	楕円形/溝状	長さ 1.92 短径 0.80	1.82	0.25	0.93	N-56°-W	0	7.3	B1	-
IV-2-53	22-9, 23-1	141	E46 c-d, E47 a-b	Ⅱ	楕円形/溝状	長さ 2.78 短径 1.17	2.18	0.20	1.32	N-31°-W	0	168	5.7	B1
*	22-9-3	142	D46 c, D47 b	Ⅱ	溝状/溝状	長さ 1.30 短径 0.46	1.24	0.20	1.07	N-30°-W	0	6.2	B1	-
*	23-4-5	143	D46 b-c, E46 a-b	Ⅱ	長楕円形/溝状	長さ 3.21 短径 0.92	3.21	0.32	1.54	N-49°-W	0	10.0	A1-L	-
IV-2-54	23-6-7	144	D45 c-d, D46 a-b	Ⅱ	楕円形/溝状	長さ 1.72 短径 0.68	0.76	0.15	1.39	N-32°-W	0	5.1	B1	-

図	図版	T P 番号	調査区	出土 層位	平面形態	断面縦横(m)	底面縦横(m)	深さ (m)	長軸方向	坑 跡	遺 痕	断面 長短比	分 類 析	
IV-2-54	25-8-9	145	E46 a・b	Ⅲ a	楕円形/長楕円形	1.98 1.21	1.12 0.34	1.60	N-11°-W	1		3.4	C2	
◊	24-1-2	146	E46 a・b・c・d	Ⅲ a	楕円形/溝状	1.76 0.93	1.16 0.19	1.84	N-49°-W	0		5.9	B1	
IV-2-55	24-3-4	147	E46 c, F46 d	Ⅲ a	溝状/溝状	1.72 0.50	1.79 0.24	1.22	N-29°-W	0		7.5	B1	
◊	24-5-6	148	F47 a・d	Ⅲ a	楕円形/溝状	1.89 1.01	1.84 0.26	1.47	N-37°-W	0		7.1	B1	
◊	24-7-8	149	F47 a	Ⅲ a	溝状/溝状	1.92 0.48	1.96 0.16	1.38	N-43°-W	0		12.3	A2	
IV-2-56	24-9, 25-1	150	F46 c, F47 b	Ⅲ	長楕円形/長楕円形	1.79 0.86	1.73 0.39	0.68	N-101°-E	10	→151	4.4	A2	
◊	25-2	151	F46 c・d, F47 a・b	Ⅲ	溝状/溝状	(2.06) (0.45)	1.84 0.19	1.39	N-20°-W	0	→150, →152	9.7	A2	
◊		152	F46 c・d	Ⅲ a	溝状/溝状	2.87 0.62	3.06 0.26	1.02	N-51°-E	0	→151	11.8	A1-L	
IV-2-57	25-3-4	153	F46 a・b・c・d	Ⅲ	長楕円形/溝状	1.84 0.86	1.33 0.22	1.16	N-24°-W	0		6.0	B1	
◊		154	E45 c, F45 d	Ⅲ a	長楕円形/溝状	1.60 0.70	1.68 0.27	1.43	N-62°-E	0		6.2	B1	
◊		155	F45 a・b・c・d	Ⅲ a	溝状/溝状	3.76 0.82	3.58 0.22	1.40	N-76°-E	0		16.0	A1-L	
IV-2-58		156	G45 d	Ⅵ	溝状/溝状	1.54 0.46	1.48 0.19	0.88	N-6°-W	0		7.8	B1	
◊		157	G45 a	Ⅵ	溝状/溝状	2.14 0.57	1.70 0.18	0.70	N-6°-W	0		9.4	A2	
IV-2-53	22-9, 23-1	158	E47 a・b	Ⅲ	楕円形/楕円形	-	-	(0.62)	1.16	N-33°-E	0	→141	2.3	B1
IV-2-58	25-5-6	(159)	L31 b, M31 a	Ⅲ	長楕円形/-	1.64 0.50	-	-	(0.52)	N-30°-E	-	-	-	
IV-2-59	25-7-8	160	F46 b	Ⅲ a	長楕円形/溝状	1.21 0.44	1.12 0.20	1.20	N-37°-W	0		6.0	B1	
◊	25-1-2	161	F46 b・c, G46 d	Ⅲ	長楕円形/溝状	1.61 0.57	1.58 0.24	1.32	N-64°-E	0		6.6	B1	
◊		162	G45 b	Ⅲ	楕円形/溝状	(1.63) 0.80	1.52 0.22	0.97	N-26°-W	0	(171)	6.9	B1	
IV-2-60	(163)		M26 d	Ⅲ	楕円形/-	1.76 1.12	-	-	(0.26)	N-105°-E	-	-	-	
◊	(164)		M26 b・c, N26 d	Ⅲ	楕円形/-	1.60 1.04	-	-	(0.32)	N-50°-E	-	-	-	
◊	26-3-4	(165)	N26 a・b, c・d	Ⅲ	楕円形/-	1.96 1.40	-	-	(0.50)	N-38°-E	-	-	-	
◊		(166)	L29 c, M29 d	Ⅲ	楕円形/-	2.29 1.18	-	-	(0.72)	N-29°-E	-	-	-	
◊	26-5	(167)	K32 b・c, L32 a・d	V c	長楕円形/-	1.79 0.59	-	-	(0.54)	N-1°-W	-	-	-	
◊	26-6	(168)	L32 d	Ⅲ	楕円形/-	2.12 1.32	-	-	(0.58)	N-15°-W	-	(135)	-	
IV-2-51	21-8	169	N27 c・d, N28 a・b	Ⅲ	長楕円形/溝状	3.60 1.08	4.01 0.40	1.50	N-112°-E	-	→134	10.0	A1-L	
IV-2-61	26-7-8	170	F36 d, F37 a	Ⅲ	不整楕円形/不整楕円形	(2.86) (1.02)	1.94 0.76	1.04	N-36°-W	15		2.6	C2	
IV-2-59		171	G45 b・c	Ⅲ	楕円形/溝状	(1.48) 0.52	1.30 0.16	1.03	N-27°-W	0	(162)	8.1	B1	
IV-2-61		(172)	L30 b, M30 a	Ⅲ	楕円形/-	1.94 1.04	-	-	(0.65)	N-6°-E	-	-	-	
◊		(173)	L29 c・d, L30 a・b	Ⅲ	長楕円形/-	1.64 0.58	-	-	-	N-28°-E	-	-	-	

Tピット出土の遺物

概要

39基のTピットから108点の遺物が出土した。TP-77の風倒攪乱から出土したものを除き、すべて覆土からの出土である。V層下位からVI層にかけて、縄文時代早期後半の遺物包含層があり、Tピットはこの層を掘り抜いて構築されている。遺物はこの際に掘り上げられたものが、覆土に流れ込んだものである。

土器

18基のTピットの覆土から67点の土器が出土している。47点がI群b-1類であり、東銅路Ⅱ式に相当するものである。I群b-3類は1点、I群b-4類は18点、Ⅲ群a類は1点出土した。

1～8・10・11・13はI群b-1類、9はI群b-4類、12はⅢ群a類、14はI群b-3類である。

1はTP-15から出土した。器厚5mmで、器面に条の幅2～3mmのLR羽状縄文が浅く施されている。内面は横になで調整されている。胎土は緻密で、黒色鉱物・黄褐色火山灰を含む。焼成は良好で、堅く焼き締まる。2はTP-21から出土した。器厚5～6mmで口縁がわずかに外反する。口唇・内面と口縁の幅14～15mmの部分は横になで調整されている。器面には条の幅2～3mmの整ったLR縄文が浅く施されている。胎土は緻密で微量の黒色鉱物を含む。焼成はよく、堅く焼き締まる。3はTP-34から出土した。器面にはLRとRLの原体による縄文が施されている。縄を転がす方向を変え、斜行縄文を組み合わせることで羽状縄文風な構成になっている。器厚は5～10mmである。なで調整された内面には成形の際の凹凸や指頭痕がある。胎土は緻密で、黒色鉱物・砂・黄白色火山灰を含む。焼成は良好で堅く焼き締まる。4はTP-42から出土した。底面は欠落しており、底部は無文で「く」の字状に張り出す。胎土に黒色鉱物・黄褐色火山灰・細礫を含む。5はTP-42から出土した。器面には条の幅2mmのLR縄文が施される。内面は横になで調整されている。胎土に白色火山灰・細礫を含む。器壁6～7mmを計る。6・7はTP-54から出土した。6は器面に直前段反摺LLの縄文が施されている。条の幅は3mmである。内面は横になで調整されており、成形の際の凹凸や指頭痕が残る。胎土に砂・細礫を含む。器壁6～7mmを計る。この個体はTP-55からも出土している。7a～7cは同一個体である。器厚3～6mmと薄手で、口縁が内傾気味である。口唇断面は丸みを帯びる。器面には横走気味のLR縄文が施されている。条の幅は2mmである。底部は上底で直線的に立ち上がる。横になで調整された内面には、成形の際の凹凸や指頭痕が残る。胎土には白色火山灰・砂・細礫を含む。8はTP-55から出土した。6と同一個体である。9はTP-69から出土した。器面にRLの自縄自巻の原体による羽状縄文が施されている。条の幅は1mm以下である。内面は丁寧な横になで調整されている。胎土に黒色鉱物・石英・砂を含む。器壁6～7mmを計る。10・11はTP-80から出土した。10は器面に条の幅2mmのLR縄文が方向を変えて施文されている。横になで調整された内面には指頭痕が残る。胎土に黄白色火山灰・砂・細礫を含む。器壁6～9mmを計る。11a・bは同一個体である。口唇断面は丸みを帯びる。器面には条の幅3～4mmのLR縄文と縄線文が施されている。2条の縄線文の下には、縄端刺突文が認められる。内面は横になで調整されており、胎土に黄白色火山灰・砂・細礫を含む。器壁4～7mmを計る。12はTP-136から出土した。器面にLR+RLの結束羽状縄文が施されている。内面は横になで調整されており、胎土に砂・白色粒を含む。13はTP-161から出土した。器面に条の幅1～2mmのRL縄文が施されている。内面調整は横になで、胎土に黒色鉱物・砂・黄白色火山灰を含む。焼成は良好で堅く焼き締まる。器壁5～9mmを計る。14はTP-165から出土した。口縁はわずかに外反し、口唇断面は尖り気味である。器面に幅2～3mmの断面が半円形を呈した貼付帯と、条の幅1mmの短縄文が施されている。内面は横になで調整されてい

る。胎土に黒色鉱物・石英・砂・細礫を含む。

(鎌田)

石器

いずれも覆土中より出土し、流れ込みの遺物でTピットには伴わないと考えられる。1はTP-6出土の石畿片。中半で切損しており、下半分のみが残る。残存部の形状から柳葉形と推測される。黒曜石製。2はTP-19出土のUフレイク。縦長剥片の内湾する側縁に使用痕が見られる。表面に自然面を残す。頁岩製。3はTP-45、4はTP-65出土の石核。いずれも打面を転移しながら、剥片を剥ぎ取っている。各作業面から、少なくとも3は2回、4は3回の転移が認められる。ともに黒曜石製で、自然面を残す。5はTP-77と切り合う風倒木痕より出土した石槍・ナイフ。両面の調整は粗雑である。基部を欠損する。黒曜石製。6はTP-86出土のピエス・エスキュー。剥片の上下端に打撃による階段状の細かな剥離が認められる。側面の剥離作業により、下端が鋭角に整形されている。石材は結晶片岩である。磨製石斧としては、研磨されておらず、刃部が作り出されていないことから未製品に分類した。しかしながら、下端の弧状になった部分に、剥落や磨滅といった使用痕が見られることを考慮すると、これを打製石斧として捉えることもできる。本遺跡ではTピットの掘り具としての機能が想定される。ただし、他のTピットや遺物包含層より同形のものが出土しておらず、使用に伴って生じると考えられる石斧剥片もほとんど見られないことから、今回は可能性を指摘するにとどめる。今後Tピットの構築方法を推定する上で、掘り具の可能性のある石斧類の観察に注意する必要があると思われる。

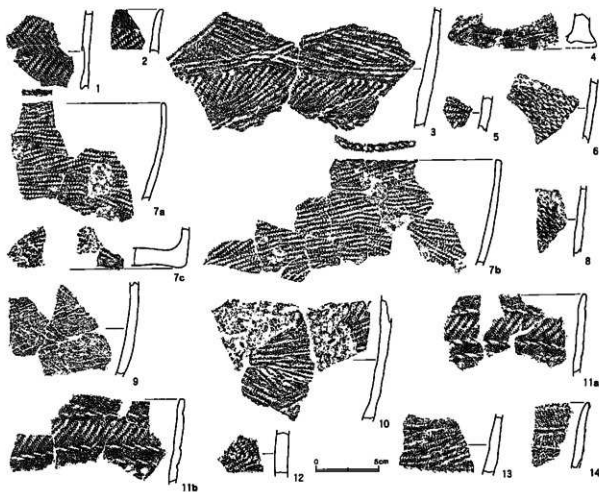
(芝田)

表N-2-5 Tピット出土遺物一覧

遺構名	層位	分類	点数	備考	遺構名	層位	分類	点数	備考
TP-4	覆土	フレイク	1		TP-65	覆土	石核	1	
TP-6	覆土	石畿	1		TP-68	覆土	Rフレイク	1	
TP-10	覆土	Ib-1	2		TP-69	覆土	Ib-4	5	
		Ib-4	13		TP-77	風倒	石槍・ナイフ	1	
		フレイク	1		TP-80	覆土	Ib-1	1	
TP-13	覆土	フレイク	1		TP-86	覆土	Ib-1	1	
TP-15	覆土	Ib-1	3				石畿	1	
		礫片	1				Uフレイク	4	
TP-16	覆土	フレイク	1				フレイク	3	頁岩1
TP-17	覆土	Uフレイク	1				ピエス・エスキュー	1	
TP-19	覆土	Uフレイク	1		TP-89	覆土	Ib-1	2	
TP-20	覆土	Ib-1	3		TP-99	覆土	フレイク	1	
TP-21	覆土	Ib-1	8		TP-129	覆土	礫	1	
TP-22	覆土	フレイク	1		TP-136	覆土	皿a	1	
TP-24	覆土	フレイク	1	頁岩	TP-143	覆土	石斧	1	
TP-28	覆土	フレイク	4		TP-146	覆土	Uフレイク	1	
TP-34	覆土	Ib-1	6		TP-151	覆土	フレイク	1	
TP-36	覆土	すり石	1		TP-152	覆土	Rフレイク	1	
TP-42	覆土	Ib-1	1		TP-155	覆土	Ib-1	5	
		礫	1				礫片	1	
TP-45	覆土	Ib-1	2				TP-156	覆土	Rフレイク
		石核	1		TP-161	覆土	Ib-1	1	
TP-54	覆土	Ib-1	9				フレイク	1	
TP-55	覆土	Ib-1	2		TP-164	覆土	礫片	1	
		フレイク	1		TP-165	覆土	Ib-3	1	
TP-56	覆土	Ib-1	1		合	計			108点
		フレイク	1						

表IV-2-6 Tピット掲載土器一覧

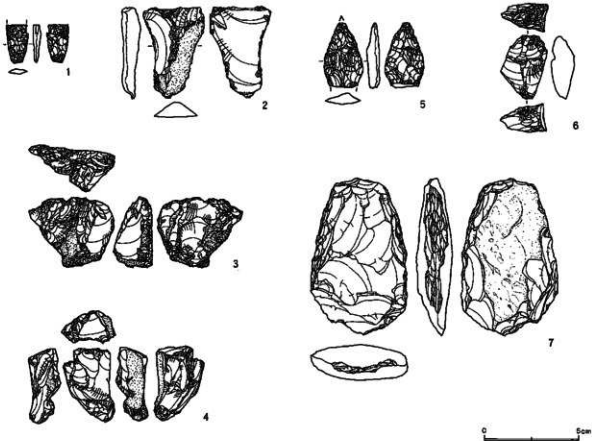
掲載 番号	遺構名	遺物 番号	層位	破 片			分 類	同一個体破片の情報 発掘区、層位、点数(1点の場合は省略)前に同じ部分は同じとした
				点数	掲載	総数		
1	TP-15	1	覆土	1	3	3	I b-1	(掲載) TP-15-3覆土(1)
2	TP-21	1	覆土	1	1	8	I b-1	(非掲載) TP-21-1覆土(?)
3	TP-34	2	覆土	1	3	9	I b-1	(掲載) L40d1Vc2.(非掲載) K41a5Vc. 同c1同2. L40c3同. 同41d1Vc2.
4	TP-34	1	覆土	2	2	5	I b-1	(非掲載) TP-34-1覆土(3)
5	TP-42	1	覆土	1	1	1	I b-1	
6	TP-54	3	覆土	1	1	1	I b-1	
7	TP-54	1	覆土	2	29	45	I b-1	(掲載) a : TP-54-2覆土(2), b : TP-56-1覆土(1), L37d3Vb, 同38a1同3, 同6同2, 同7Vc9. c : L38a6Vb3, 同7Vc6.(非掲載) TP-45-1覆土(1)
8	TP-55	1	覆土	1	1	2	I b-1	(非掲載) TP-55-1覆土(1)
9	TP-69	1	覆土	1	5	5	I b-1	(掲載) TP-69-2覆土(4)
10	TP-80	1	覆土	1	5	6	I b-1	(掲載) K40b1Vc4.(非掲載) L41a1Vc.
11	TP-89	1	覆土	1	11	15	I b-1	(掲載) a : H45c2Vb6, 同4同. b : H44b1W, 同45c2Vb, 同8Vc. (非掲載) TP-89-1覆土. G45b17Vc, H45c2Vb.
12	TP-136	1	覆土	1	1	1	I b-1	
13	TP-161	1	覆土	1	1	1	I b-1	
14	TP-165	1	覆土	1	1	1	I b-1	



図IV-2-63 Tピット出土の土器

表M-2-7 Tピット掲載石器一覧

掲載 番号	遺構名	遺物 番号	分 類	層 位	長さ×幅×厚さ (cm)	重量 (g)	石 質	備 考
1	TP-6	1	石 鏃	覆土	2.0×1.03×0.42	0.8	黒曜石	破片
2	TP-19	1	Uフレイク	覆土	4.75×3.21×0.94	11.3	頁岩	
3	TP-45	2	石 核	覆土	3.65×4.50×1.77	22.1	黒曜石	
4	TP-65	1	石 核	覆土	3.88×2.49×1.49	12.5	黒曜石	
5	TP-77	1	石槍ナイフ	風倒擾乱	3.35×2.06×0.69	3.7	黒曜石	欠損品
6	TP-86	1	ピエス・エスキーユ	頁岩	3.21×2.49×1.23	8.6	頁岩	
7	TP-143	1	石斧	覆土1層	8.24×5.10×1.91	87.5	結晶片岩	未製品



図M-2-64 Tピット出土の石器

3 土坑 (図Ⅳ-2-62)

1基のみである (P-1)。I45b、J45a区のVc層上面で、Vb層の落ち込みとして確認された。形態は皿状を呈する。規模は確認面で1.24×1.06m、底面で0.62×0.40m、深さ0.36mである。Ⅱb層と覆土3層 (Vc主体)との層界が明瞭で、整った平面形であることから土坑として扱ったが、Ⅱb層とVc層の層界は、遺跡内の場所によって本遺構のように明瞭な部分もあり、人為でない可能性もある。遺物の出土はない。

4 焼土 (図Ⅳ-4-1・2/表Ⅳ-4-1~4)

焼土は14カ所検出された。各焼土の属性は表Ⅳ-4-1にまとめ、以下では各層の焼土について概括して述べる。 (山中)

Ⅱ層の焼土

1カ所のみ検出された (F-1)。調査区北側の台地から続く斜面上に形成されている。非常に強く焼けており、炭化物の集中を伴う。断面観察により、その場で形成されたものと判断したが、平面が不整形を呈し、遺物を伴わないことから、自然営力 (落雷による野火など)の可能性もある。

周辺に白頭山-苦小牧降下火山灰 (B-Tm)の堆積が部分的に見られ、焼土の形成面がこれよりも上位であることから、時期は縄文時代~アイヌ文化期と考えられる。 (芝田)

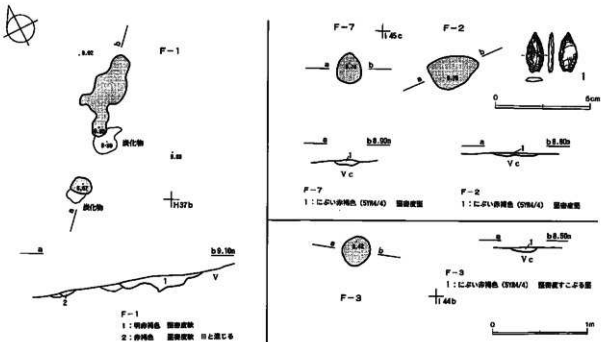
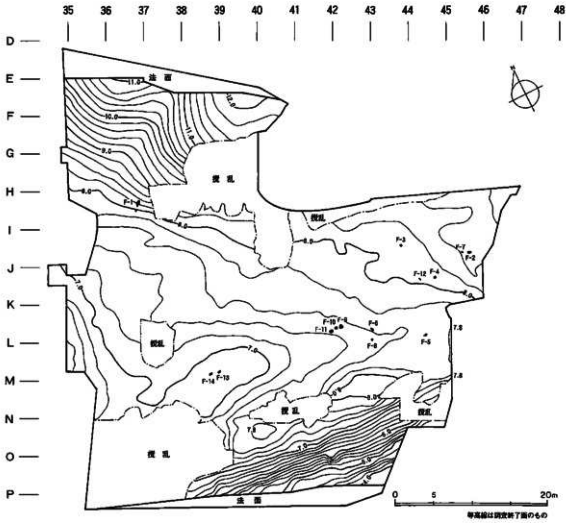
Vc層の焼土

13カ所で検出された (F-2~14)。F-3・5を除き、2、3カ所のまとまりが点在している。F-13・14は幅広い沢状地形内に位置する。いずれもVc層の上面・上位が赤みを帯びた部分を半截し、断面観察の結果焼土と判断したものである。平面形は円形・楕円形に近く、厚さは5cm前後である。周囲ではI群b-I類土器 (東銅路Ⅱ式相当)、黒曜石製のフリイク、炭化したクルミ殻等がまばらに出土している。F-9~11では、黒曜石製のフリイクが多くみられたため、周囲の土壌を水洗選別したところ、微細なフリイクが約800点得られた。

検出された層位と周囲の遺物出土状況から、時期は縄文時代早期後半、東銅路Ⅱ式期とみてよい。

表Ⅳ-4-1 焼土一覽

図	図原	遺構名	発掘区	検出層位	色調	規模 (m) 長径×短径/厚さ	遺物	時期	備考
Ⅳ-4-1	27-1-2	F-1	H36d	Ⅱ層上位	明赤褐色 ~赤褐色	0.89×0.44/0.16	なし	縄文時代 ~アイヌ文化期	
+		F-2	I45c	Vc層上面	にぶい赤褐色	0.52×0.34/0.03	有り	縄文時代早期後半	
+		F-3	I43d	Vc層上面	にぶい赤褐色	0.32×0.30/0.04	有り	縄文時代早期後半	
Ⅳ-4-2		F-4	J44d	Vc層上面	にぶい赤褐色	0.45×0.36/0.06	有り	縄文時代早期後半	
+	27-3	F-5	K44b	Vc層上位	にぶい赤褐色	0.48×0.32/0.06	有り	縄文時代早期後半	
+		F-6	K43b	Vc層上面	にぶい赤褐色	0.48×0.28/0.06	有り	縄文時代早期後半	
Ⅳ-4-1		F-7	I45c	Vc層上面	にぶい赤褐色	0.32×0.26/0.06	有り	縄文時代早期後半	
Ⅳ-4-2		F-8	K43b	Vc層上面	明赤褐色	0.34×0.28/0.06	有り	縄文時代早期後半	6,890±40 (yBP)
+	27-4	F-9	K41c, K42b	Vc層上位	明赤褐色	0.52×0.48/0.06	有り	縄文時代早期後半	
+		F-10	K41c, K42b	Vc層上位	明赤褐色	0.40×0.40/0.06	有り	縄文時代早期後半	
+		F-11	K41c, K42b	Vc層上位	明赤褐色	0.58×0.40/0.07	有り	縄文時代早期後半	6,890±40 (yBP)
+		F-12	J44a	Vc層上面	暗赤褐色 ~明赤褐色	(0.48)×(0.12)/(0.10)	有り	縄文時代早期後半	TP-131に壊される
+		F-13	L38c, L39b	Vc層上位	暗赤褐色	0.40×0.24/0.06	有り	縄文時代早期後半	
+		F-14	L38c	Vc層上位	暗赤褐色	0.48×(0.34)/0.06	有り	縄文時代早期後半	TP-57に壊される



図IV-4-1 焼土分布図とF-1~3・7

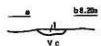


TP-13

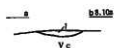
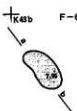
F-12
1: 卵形褐色, 假丝状
2: 卵形褐色+网状褐色, 假丝状+短



F-4
1: 圆形卵形褐色 (S134/4) 假丝状



F-5
1: 圆形卵形褐色 (S134/4) 假丝状

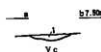


F-6
1: 圆形卵形褐色 (S134/4) 假丝状



F-8
1: 卵形褐色 (S135/3) 假丝状

TL43a

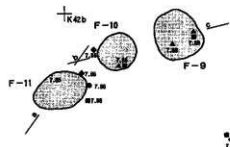


F-14
1: 卵形褐色 (S133/3) 假丝状

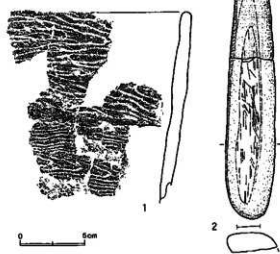


F-13
1: 卵形褐色 (S133/3) 假丝状

●: 土 磁
▲: 卵形石磁
■: 网状
◆: 假+短片



F-9~F-11
1: 卵形褐色, 假丝状



图N-4-2 F-4~6·8~14

表IV-4-2 焼土出土遺物一覧

遺構名	分類	点数	備考	遺構名	分類	点数	備考	遺構名	分類	点数	備考	
F-2	I b-1	3		F-8	I b-1	27		F-10	すり石	1		
	石礫	1			フレイク	1	頁岩		礫片	1		
	Uフレイク	2			Rフレイク	5		F-11	I b-1	4		
	フレイク	68	頁岩5		Uフレイク	4			フレイク	7	頁岩1	
F-3	フレイク	4	頁岩	F-9	フレイク	270	頁岩30		礫片	3		
	礫片	1			石礫	1		F-12	フレイク	2		
F-4	フレイク	5	頁岩1			石筍フレイク	1		F-13	Uフレイク	3	
F-5	フレイク	1	頁岩			礫	1			フレイク	11	
F-6	フレイク	1		F-10	フレイク	23	頁岩2	F-14	フレイク	9		

表IV-4-3 焼土掲載土器一覧

掲載番号	遺構名	遺物番号	層位	破片			分類	同一個体破片の情報 発掘区、層位、点数(1点の場合は省略) 跡に同じ部分は同じとした
				点数	掲載	総数		
1	F-11	1		2	9	29	I b-1	(掲載) T P-10-2覆土(2), T P-20-1覆土, J 43 b 1 b (4), (非掲載) F-11-1(2), J 43 b 2 V b 2, 同 d 4 同, 同 5 同, 同 8 V (2), 同 9 V c, 同 13 同, J 37 c 2 同 2, L 42 d 2 V c 5.

表IV-4-4 焼土掲載石器一覧

掲載番号	遺構名	遺物番号	分類	層位	長さ×幅×厚さ (cm)	重量 (g)	石質	備考
図IV-4-1-1	F-2	1	石礫	焼土1層	2.10×0.90×0.20	0.4	黒曜石	
図IV-4-2-2	F-10	1	すり石	焼土1層	19.7×3.90×1.60	207.0	緑色凝灰岩	T P-36-1と接合被熱

あろう。F-8の炭化クルミ殻、F-11の炭化材について、放射性炭素年代測定(AMS法)を依頼したところ、いずれも6,890±40(yBP)と測定された(Ⅴ章-1参照)。

なお、焼土の検出されたVc層の上面・上位については、当時の植生に関する情報を得るため、基本土層の一部から土壌試料を採取し、花粉分析・植物珪酸体分析を依頼した(Ⅴ章-2参照)。

(山中)

焼土出土の遺物

14ヶ所の焼土のうち、縄文時代早期後半の焼土13ヶ所すべてから遺物が出土した。このうち、12ヶ所から土器・石器等460点の遺物が出土している。

土器

1はF-11から出土したI群b-1類土器である。東銅路Ⅱ式に相当する。口縁は直立気味で、口唇断面は丸みを帯びる。器面には無節の原体を何本か一単位にして並列を押しつけている。横になで調整された内面には指頭痕が残る。胎土には黄褐色火山灰、細礫を含む。この個体の破片はF-11、T P-10・20の覆土、I 43 b、J 37 c、L 42 dのV b～VI層から29点出土している。(鎌田)

石器

図IV-4-1-1は、F-2の焼土1層より出土した石礫。小型の柳葉形。周縁部のみ粗く加工されており、両面に剥離面が残る。石材は黒曜石である。図IV-4-2-2は、すり石。F-10の焼土1層、T P-36の覆土中より出土した2点が接合したもの。F-10出土の破片は被熱している。棒状礫を縦方向に半割し、腹面を弱く擦っている。石材は緑色凝灰岩である。F-10の形成以前に破砕したものが、一方は焼土中において被熱し、もう一方はT P-36に流れ込んだものと推測される。F-10の時期から、縄文時代早期後半(東銅路Ⅱ式期)以前の所産と考えられる。(芝田)

V 包含層出土の遺物

1 土器

概要

平成14年度、浜厚真3遺跡では遺物包含層より679点の土器が出土した。このうち、縄文時代のものが678点で99.9%を占める。統縄文時代のものは1点で0.1%である。時期別の点数と包含層出土土器全体に占める割合を多い順に記すと、縄文時代早期後半のものが389点と57.3%を占める。次いで、後期後葉が183点で27%、後期初頭が87点で12.8%、中期後半が14点で2.1%となっている(表V-1-1)。

各時期の出土層位別点数と時期別出土土器点数に占める割合は、縄文時代早期後半のものはVc層で199点(51.2%)、Vb層で151点(38.8%)、VI層で14点(6.2%)、中期後半はVc層で7点(50%)、Vb層で6点(42.9%)、後期初頭はVa層で87点(100%)、後期後葉はVa層で146点(79.8%)、III層で25点(13.7%)である。統縄文時代のものはIII層から1点だけ出土した。

図V-1-1・2では各時期の土器の分布図を示した。また、表V-1-2の包含層掲載土器一覧で「破片」の欄で「点数」とあるのは見出しとなった破片の点数、掲載とあるのは拓本で掲載した破片の数、「総数」は当該個体の破片総数である。「同一個体破片の情報」の部分では見出しに記した破片以外の掲載破片と非掲載破片の情報を、発掘区(グリッド・小グリッド)・遺物番号・層位(Va層はVa、Vb層はVb、Vc層はVcと略した)・点数の順に記載した。発掘区と層位の部分については前に記載したものと同一場合には「同」として省略した。層位の次の数字は点数であり、1点の場合は1を省略した。

縄文時代早期の土器

I群b-1類(1~25)

321点出土している。東鋼路Ⅱ式に相当するもので、施文の特徴等によりa~gに分けた。

a 縄文をもつもの(1~3・5~8・13)

1~3・5~8・13は撚りの緩い縄文による地文をもつ。斜位・横位と方向を変えて施文するものがある。施文の重複のあるものもある。1・2・5・7・8はLR、3・6・13はRLの縄文をもつ。5・13は方向を変えて施文される。3・5・7・13は施文が重複する。1・2は焼成が良好で堅く焼き締まる。

表V-1-1 層位別出土土器点数一覧

分類	III層	V層			VI層	風割 擾乱	埴土	計
		Va	Vb	Vc				
縄文時代早期								
I群b-1類		7	115	175	17			7 321
I群b-4類				2				2
I群b類細分不能		1	36	22	7			66
縄文時代中期								
III群b-2類			1	3	7			11
III群b類細分不能				3				3
縄文時代後期								
IV群a類テコブ式				87				87
IV群c類		25	146	10		2		183
統縄文時代								
VI群c類		1						1
分類不明								
		2	1	2				5
合計		28	243	169	206	24	2	7 679

b 撚糸文をもつもの(9~11)

9~11は撚糸による施文をもつ。9・11は右撚、10は左撚である。11は内面が剥落している。

c 直前段反撚・合撚の原体による

施文をもつもの(4・12・14)

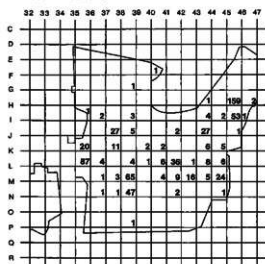
4は反撚の混合したLLR、12は反撚のRRである。14はLRとRLを撚った3段の原体による施文をもつ。

d 縄文と縄端庄直文・縄線文が

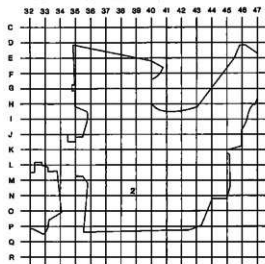
組み合わせられたもの(15~17)

15はLRの比較的整った縄文が方向を変えて施文

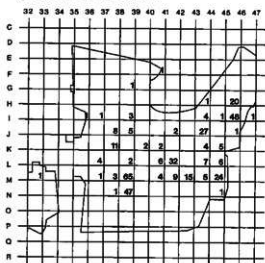
全体の土器分布



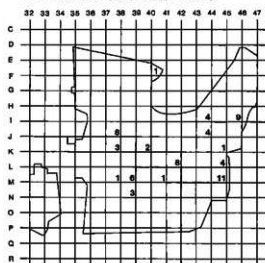
I 群 b-4 類土器の分布



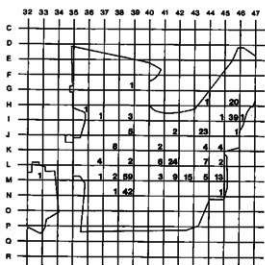
縄文時代早期の土器分布



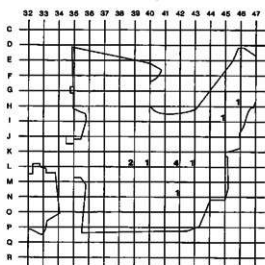
I 群 b 類土器 (細分不能) の分布



I 群 b-1 類土器の分布

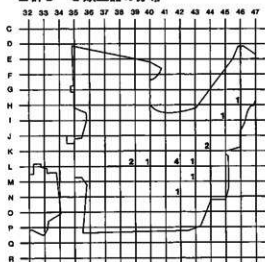


縄文時代中期の土器分布

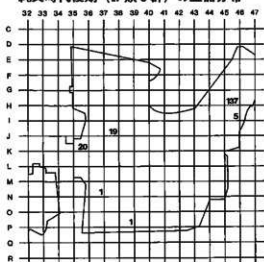


図V-1-1 包含層出土土器分布図(1)

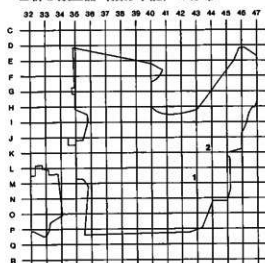
Ⅲ群b-2類土器の分布



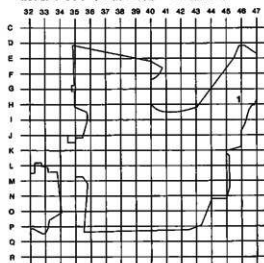
縄文時代後期 (Ⅳ群c群) の土器分布



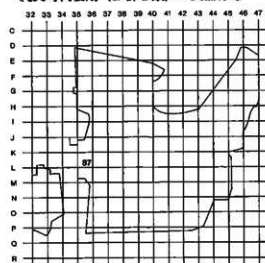
Ⅲ群b類土器 (細分不能) の分布



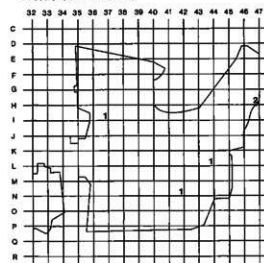
縄文時代 (Ⅳ群c類) の土器分布



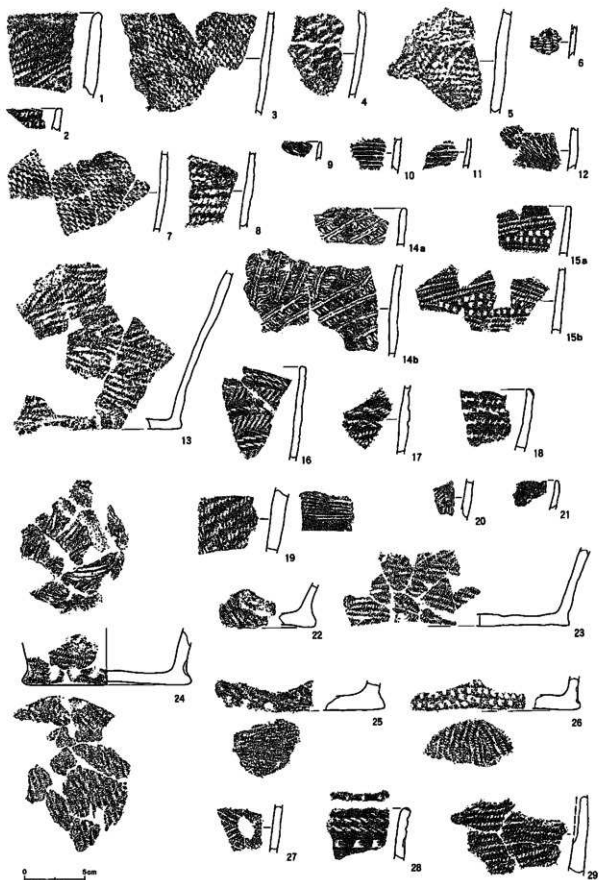
縄文時代後期 (Ⅳ群a類) の土器分布



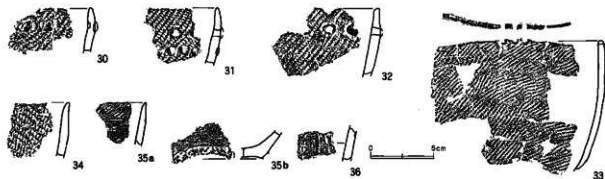
分類不明の土器分布



図V-1-2 包含層出土土器分布図 (2)



図V-1-3 包含層出土の土器(1)



図V-1-4 包含層出土の土器(2)

され、その間に縄端疔痕文が施される。16は縄端部を強く押して回転させた、整った半羽状風のLRの縄文と縄線文をもつ。17は然りの緩いLRの縄文と縄線文が施されている。

e 結条体疔痕文をもつもの(18~20)

18~20は単軸結条体による疔痕文をもつ。結条体の軸は丸軸である。18の口唇は指頭により抓まれている。19は内面に条痕をもつ。20は横位・斜位の結条体疔痕文をもつ。

f 無文(21)

21は無文である。器厚3~4mmで、器面には指頭痕がある。口唇断面は丸みを帯びる。

g 底部(22~23)

22~26は底部が張り出す。縄文の施されたもの(22~24)、底部の張り出しが抓まれたもの(25)、縄端刺突文が施されたもの(26)がある。24~26は底面に縄文をもつ。24は内面および底部内面に条痕がある。

I群b-4類(27)

I群b-4類は2点のみの出土である。27・28は自縄自巻の原体による羽状縄文をもつ。条の幅は1mmである。

縄文時代中期の土器

III群b-2類(28)

III群b-2類は11点出土している。29は口縁に2条の縄線文が施される。断面形が丸みを帯びた口唇と口縁には笥状工具による右方向からの連続刺突文をもつ。口縁には胎土には砂・黒色鉱物・細礫を含む。縄文時代後期の土器

IV群a類(29)

IV群a類は87点出土している。29はLRの縄文を施して、器面をなでている。内面は剥落している。胎土には黄白色火山灰・砂・細礫を含む。

IV群c類(30~35)

IV群c類は183点出土している。30~32は口縁に突瘤文をもつ。30は突瘤が抓まれている。31は突瘤の下に爪形文をもつ。32の口縁は小波状を呈す。33は口唇に3つ一組で丸棒状工具による刻みがある。34は口唇が切り出しナイフ状を呈す。35は沈線文をもち、口縁に縄文が施される。沈線文より下は無文である。いずれも、地文はLRの斜行縄文である。

続縄文時代の土器

IV群c類(36)

IV群c類はIII層から1点のみの出土である。36は器面に隆起線と三角列点文をもつ。胎土に黒色鉱物・白色粒・細礫を含む。

(鎌田)

表V-1-2 包含層出土掲載土器一覽

掲載 番号	遺物 番号	層位 番号	破片			分類	同一個体破片の情報 発掘区、層位、点数(1点の場合は省略)前に同じ部分は同した
			点数	掲載	総数		
1	L41c	3	Vc	1	1	6	Ib-1 (非掲載) I38c1Vb, L41d1Vc, 同42b1Vb3
2	J44d	1	Vb	1	1	1	Ib-1
3	M38b	4	Vc	1	2	13	Ib-1 (掲載) M38c2Vc, (非掲載) L38b10Vc2, M38a2Vb, 同c2Vc8.
4	L38a	6	Vb	5	5	5	Ib-1
5	L44d	1	Vb	1	1	1	Ib-1
6	I41a	1	VI	2	3	3	Ib-1 (掲載) L38a1Vb. (非掲載) K36b1Vb2, L38b4V2, 同9Vc, 同42a3Vb, M37d1Vb, 同38a1Vb, 同b4Vc5, 同c2Vc6.
7	M38c	2	Vc	5	5	24	Ib-1
8	L43b	2	Vb	1	1	1	Ib-1
9	J37c	3	Vc	1	1	1	Ib-1
10	H46b	1	Vc	1	1	1	Ib-1
11	L43a	1	Vb	1	1	1	Ib-1
12	J37d	3	Vb	2	2	5	Ib-1
13	G45b	13	Va	1	7	15	Ib-1 (掲載) G45b17Vc6, (非掲載) G45b2Vc, 同12同, 同17同6.
14	M38b	4	Vc	1	8	12	Ib-1 (掲載) b: I43c2Vc, 同d7M6, (非掲載) I43b1Vb, 同d12Vc, L44d1Vb2.
15	L38c	1	Vc	2	7	20	Ib-1 (掲載) a: L38b9Vc, b: L38b9Vc2, 同d1Vb, M38c2Vc. (非掲載) I45a4Vc, L38b9Vc, 同b10同2, 同c1同2, M38c2Vc7.
16	K43d	1	Vb	2	2	7	Ib-1 (非掲載) K43c1Vc, 同d1Vb2, 同4Vc, L43a1Vb.
17	M44b	1	Vb	1	1	1	Ib-1
18	I38b	1	Va	2	2	6	Ib-1 (非掲載) F38c1M, H36c1VF, I38a1Vb, J44d11Vb.
19	L36a	1	Vc	1	1	1	Ib-1
20	G45b	17	Vc	1	1	1	Ib-1
21	L44a	1	Vb	1	1	1	Ib-1
22	L37c	2	Vc	1	1	1	Ib-1
23	H45c	2	Vb	1	1	1	Ib-1 (掲載) H45c8Vc16, (非掲載) H45c2Vb4, 同4同3, 同8Vc4.
24	K41b	1	Vc	6	12	19	Ib-1 (掲載) K41b2Vc6, (非掲載) K40d1Vc, 同41aVb4, 同b2Vc2.
25	K40d	2	Vc	1	1	1	Ib-1
26	L38b	10	Vb	1	1	1	Ib-1
27	M38d	1	Vc	2	2	2	Ib-4
28	K42b	4	Vc	1	1	1	IIIb-2
29	K35a	1	Va	4	4	87	IVa
30	J35c	1	Vb	2	2	2	IVc
31	J35d	1	Va	1	1	17	IVc (掲載) J35a1V上, (非掲載) J35a1V上, 同c1Vb2, 同2同, 同4V上, 同d1V中10, 同4Va.
32	G45b	2	Va	2	2	35	IVc (非掲載) G45b10Va8, 同13同24, 同c6同.
33	I37a	1	Va	5	15	17	IVc (掲載) I37a2Va, 同4同6, 同b2同, 同8同, 同d2同, (非掲載) I37a4Va, 同b2同.
34	G45b	13	Va	1	1	70	IVc (非掲載) G45b10Va25, 同13同33, 同c6同11.
35	G45b	10	Va	1	2	6	IVc (掲載) b: G45b1同, (非掲載) G45b10Va4.
36	G45b	18	Va	1	1	1	VIc

2 石器

概要：遺物包含層より1,398点の石器等が出土した。大部分がフレイク（1,224点）である。他に、剥片石器136点、磨製石器1点、礫石器11点、礫・礫片26点が出土している。出土層位は、V c層が1,194点と突出しているが、ほとんどがフレイク・Rフレイク・Uフレイクである。分布は、調査区北東側から続く浅い沢の内部より多く出土した。K-42グリッドで802点と最も多く出土しているが、これは焼土F-9～11の周辺の土壌を水洗選別した結果得られた、黒曜石製の微細なフレイクである。剥片石器は石鏃が40点と最も多い。磨製石器は石斧剥片が1点のみ出土した。礫石器および礫・礫片の出土は非常に少ない。付近に石材を獲得できるような河川がないことが原因と考えられる。

注目されるのはV c層より石鏃が2点出土している点である。遺跡が縄文時代中期後半にエゾシカの猟場として機能する以前に、南側の低地部分で漁労活動が行われていた可能性がある。周辺の厚真台地に立地する静川22遺跡では、3,577点という大量の石鏃が出土している（工藤・兵衛 2002）。

V c層出土の土器の約9割がI群b-1類（東銅路Ⅱ式）に相当することから、石器等の大部分も当該時期（縄文時代早期後半）の所産であろう。V c層はTピット群の構築により著しく攪乱されており、多くの石器等が掘り上げ土に混入して流失してしまった可能性が高い。

(1) 剥片石器

石 鏃（図V-2-3-1～12/表V-2-2/図版31）

40点出土している。形態別では、五角形2点、柳葉形9点、三角形13点、有茎7点、形態不明な破片9点となっている。石材は2点のみ頁岩で、他は黒曜石である。12点図示した。1～6は薄身のもの。1・2は五角形。1は裏面に主刺離面を残す。2は幅広で、先端部が全体の約1/3ほどである。3～6は柳葉形。4は基部に浅い切りが入る。5・6は縦長で、両側縁が直線的でよく整っている。7～10は三角形のもの。7は平基。形状は短身で、正三角形に近い。側縁は直線的である。8～10は凹基。いずれも側縁が外湾する。10の基部には装着痕と推測される潰れが見られる。11・12は有茎。どちらも縦長の基部を有する。11は平基、12は凸基である。11は基部、12は先端部を欠損する。12は非常に細かな調整が施されている。ここで図示したものは、すべて黒曜石製である。

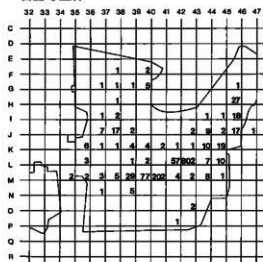
石槍・ナイフ（図V-2-3-13・14/表V-2-2/図版31）

3点出土している。石材はすべて黒曜石である。2点図示した。13は茎を持つもの。凸基である。厚みがあり、両面の調整は粗い。14は茎が不明瞭なもの。左右の側縁が非対称になっている。

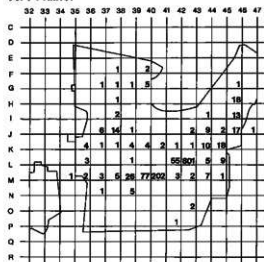
表V-2-1 層位別出土石器一覧

	分類	Ⅲ層	V				Ⅵ層				攪乱 風倒木	表探 掘土	不明	計
			a	b	c	上位	中位	下位	不明					
剥片石器	石 鏃	4	2	9	9	5	4	5		1	1			40
	石槍・ナイフ			2					1					3
	石 鏃			3	1									4
	スクレイパー			4	1				1		1			7
	Rフレイク	1	1	11	15					2				30
	Uフレイク		1	21	16			5		3			1	47
剥片石器	石 鏃			1	3	1								5
	石 鏃	4	3	58	1,140	1	8		1	5	1	3	1,224	
磨製石器	石 斧				1									1
	た た き 石			1				2		1				4
礫 石 器	く ほ み 石					1								1
	す り 石			1										1
	石 鏃				2									2
	砥 石			3										3
礫・礫片	加工痕のある礫	1		3										4
	礫・礫片	1		12	6			2			1			22
合 計		11	7	129	1,194	8	19	10	1	11	4	3	1,398	

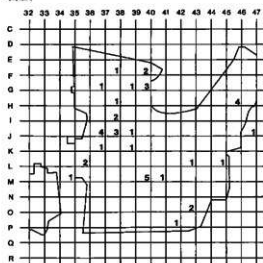
石器等全体



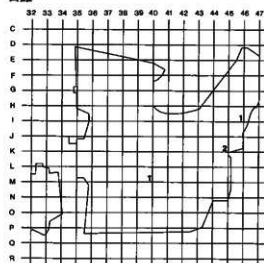
剥片石器類



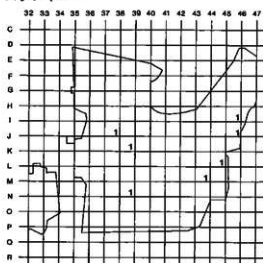
石鏃



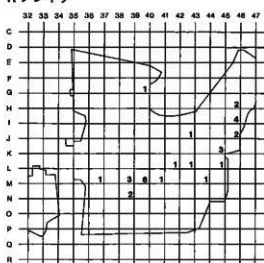
石鏃



スクレイパー

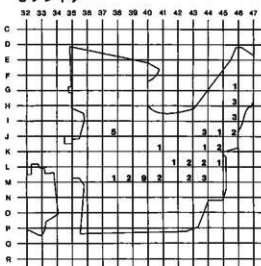


Rフレイク

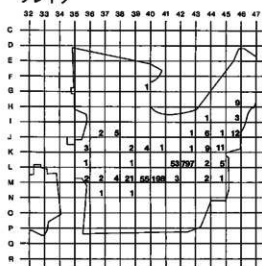


図V-2-1 包含層出土石器等分布図(1)

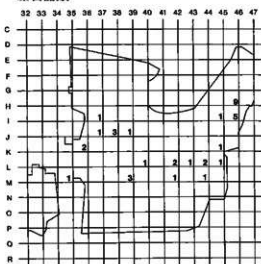
Uフレイク



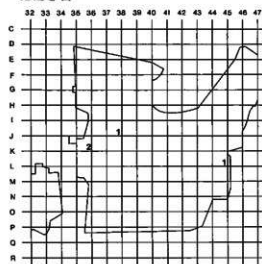
フレイク



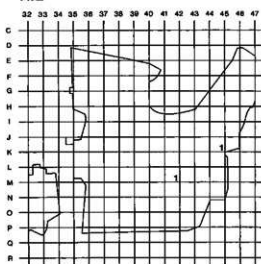
礫石器類



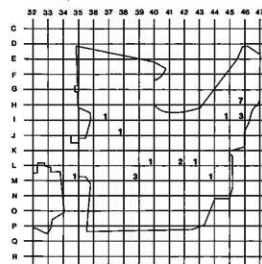
たたき石



石錘

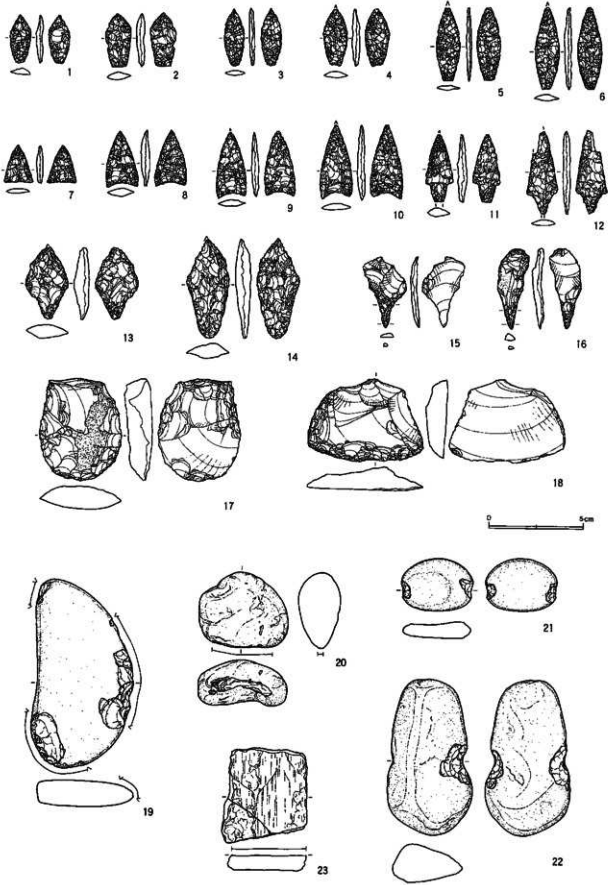


礫・礫片



図V-2-2 包含層出土石器等分布図(2)

V 包含層出土の遺物



図V-2-3 包含層出土の石器

表V-2-2 包含層出土掲載石器一覧

番号	分類	出土地点・番号	層位	長さ×幅×厚さ (cm)	重量 (g)	石質	備考
1	石 鏃	K42 b・2	V c層	2.51×1.10×0.28	0.7	黒曜石	F-9~11周辺
2	石 鏃	F38 d・1	V層下	2.80×1.31×0.41	1.4	黒曜石	
3	石 鏃	H37 b・1	V層下	2.99×1.09×0.25	0.8	黒曜石	
4	石 鏃	G45 b・6	V c層	2.91×1.25×0.36	1.2	黒曜石	
5	石 鏃	I37 a・5	V層下	3.80×1.25×0.23	1.0	黒曜石	
6	石 鏃	K35 c・2	V b層	4.22×1.30×0.36	1.7	黒曜石	
7	石 鏃	I36 d・2	V b層	1.95×1.51×0.29	0.6	黒曜石	
8	石 鏃	F39 a・1	Ⅱ層	2.92×1.71×0.40	1.6	黒曜石	
9	石 鏃	F39 b・1	V a層	3.30×1.59×0.35	1.6	黒曜石	
10	石 鏃	L34 b・1	V層上	3.82×1.70×0.32	2.1	黒曜石	
11	石 鏃	O41 b・1	V層上	3.50×1.41×0.47	1.7	黒曜石	
12	石 鏃	N42 b・1	V層	4.30×1.61×0.36	2.0	黒曜石	欠損品
13	石槍ナイフ	J41 a・1	V b層	3.78×2.21×0.73	4.5	黒曜石	
14	石槍ナイフ	F37 c・1	V層下	5.20×2.20×0.83	7.3	黒曜石	
15	石 鏃	H45 b・1	V b層	3.70×2.28×0.32	1.7	黒曜石	
16	石 鏃	J44 d・9	V b層	4.20×1.50×0.42	2.2	黒曜石	
17	スクレイパー	J38 b・2	風筒木痕	5.39×4.35×1.25	34.5	頁岩	
18	スクレイパー	I37 b・6	V層下	4.31×6.09×1.23	30.6	頁岩	
19	たたき石	I37 c・2	V層下	14.9×8.0×2.05	4.3	緑色泥岩	
20	すり石	I38 a・2	V b層	5.90×7.0×3.60	164.0	凝灰岩	
21	石 鏟	J44 a・1	V c層	4.17×5.67×1.33	47.0	砂岩	
22	石 鏟	L41 b・1	V c層	12.2×6.70×3.30	370.0	珪岩	
23	砥 石	K43 d・2	V b層	(7.50)×(6.70)×(1.25)	(85.0)	凝灰質砂岩	2点接合 破片

石 鏃 (図V-2-3-15・16/表V-2-2/図版31)

4点出土している。石材はすべて黒曜石である。2点図示した。15・16は刺突部を顕著に作り出したもの。15は表面のみの調整で、刺突部以外は剥片の形状を変えていない。16は両面を調整しているが、表面に自然面を、裏面に打瘤を残す。側面に使用による潰れが見られる。

スクレイパー (図V-2-3-17・18/表V-2-2/図版32)

7点出土している。石材は図示した2点が頁岩で、他は黒曜石である。17は石べらと称されるもの。上面に打面が残る剥片の周縁を弧状に加工し、粗く調整して刃部を設けている。表面に自然面を残す。18は素材の形状を大きく変えていないもの。横長の剥片の下縁と左側縁に急角度の刃部を設けている。右側縁にも使用痕が見られる。

(2) 礫石器

たたき石 (図V-2-3-19/表V-2-2/図版32)

4点出土している。1点図示した。19は扁平礫の周縁部にたたき痕が見られるもの。たたかれている部分に打ち欠きの痕跡が残ることから、石斧未製品の可能性もある。石材は緑色泥岩である。

すり石 (図V-2-3-20/表V-2-2/図版32)

1点のみ出土した。20は亜円礫の下面を撫っているもの。すり面は素材礫の形状のため、直線的ではなく、湾曲している。石材は凝灰岩である。

石 鏟 (図V-2-3-21・22/表V-2-2/図版32)

2点出土した。21は小型の扁平礫を素材とし、長軸の両端に打ち欠きをもつもの。表裏両面から打ち欠いている。22はやや厚みのある亜円礫を素材とし、短軸の両端に打ち欠きをもつもの。石材は21が砂岩、22が珪岩である。

砥 石 (図V-2-3-23/表V-2-2/図版32)

3点出土している。23は破片で、2点が接合したもの。板状礫の表面を砥面として使用している。石材は凝灰質砂岩である。 (芝田)

VI 自然科学的手法による分析

1 放射性炭素年代測定

(株)地球科学研究所

報告内容の説明

- 14C age (y BP)** : 14C 年代 "measured radiocarbon age"
試料の 14C/12C 比から、単純に現在(1950年AD)から何年前(BP)かを計算した年代。
半減期はリビーの5568年を用いた。
- 補正14C age (y BP)** : 補正 14C 年代 "conventional radiocarbon age"
試料の炭素安定同位体比(13C/12C)を測定して試料の炭素の同位体分別を知り
14C/12Cの測定値に補正値を加えた上で、算出した年代。
試料の 13C値を-25(‰)に標準化することによって得られる年代値である。
暦年代を得る際にはこの年代値をもちいる。
- δ 13C (permil)** : 試料の測定 14C/12C 比を補正するための 13C/12C 比。
この安定同位体比は、下式のように標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)
で表現する。

$$\delta 13C (\text{‰}) = \frac{(13C/12C)_{\text{試料}} - (13C/12C)_{\text{標準}}}{(13C/12C)_{\text{標準}}} \times 1000$$

ここで、 $13C/12C$ [標準] = 0.0112372である。

- 暦年代** : 過去の宇宙線強度の変動による大気中14C濃度の変動に対する補正により、暦年代を算出する。具体的には年代既知の樹木年輪の14Cの測定、サンゴのU-Th年代と14C年代の比較により、補正曲線を作成し、暦年代を算出する。最新のデータベース("INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40(3))により約19000yBPまでの換算が可能となった。*

*但し、10000yBP以前のデータはまだ不完全であり今後改善される可能性が高いので、補正前のデータの保管を推奨します。

"The calendar calibrations were calculated using the newest calibration data as published in Radiocarbon, Vol. 40, No. 3, 1998 using the cubic spline fit mathematics as published by Talma and Vogel, Radiocarbon, Vol. 35, No. 2, pg 317-322, 1993: A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates. Results are reported both as cal BC and cal BP. Note that calibration for samples beyond about 10,000 years is still very subjective. The calibration data beyond about 13,000 years is a "best fit" compilation of modeled data and, although an improvement on the accuracy of the radiocarbon date, should be considered illustrative. It is very likely that calibration data beyond 10,000 years will change in the future. Because of this, it is very important to quote the original BP dates and these references in your publications so that future refinements can be applied to your results."

測定方法などに関するデータ

測定方法 AMS : 加速器質量分析

Radiometric : 液体シンチレーションカウンタによるβ-線計数法

処理・調製・その他 : 試料の前処理、調製などの情報

前処理 acid-alkali-acid : 酸-アルカリ-酸洗浄
acid washes : 酸洗浄
acid etch : 酸によるエッチング
none : 未処理

調製・その他

Bulk-Low Carbon Material : 低濃度有機物処理
Bone Collagen Extraction : 骨、歯などのコラーゲン抽出
Cellulose Extraction : 木材のセルロース抽出
Extended Counting : Radiometric による測定の際、測定時間を延長する

分析機関 BETA ANALYTIC INC.
4985 SW 74 Court, Miami, FL, U.S.A 33155

試料データ	C14年代(y BP) (Measured C14 age)	$\delta^{13}C$ (permil)	補正 C14年代(y BP) (Conventional C14 age)
Beta- 174517	6900 ± 40	-25.7	6890 ± 40
試料名 (21723) HAMA3-1			
測定方法、期間	AMS-Standard		
試料種、前処理など	nutshell acid/alkali/acid		
Beta- 174518	6890 ± 40	-25.3	6890 ± 40
試料名 (21724) HAMA3-2			
測定方法、期間	AMS-Standard		
試料種、前処理など	charred material acid/alkali/acid		

年代値はRCYBP(1950 A.D.を0年とする)で表記。モダン リファレンス スタンダードは国際的な慣例としてNBS Oxalic AcidのC14濃度の95%を使用し、半減期はリビーの5568年を使用した。エラーは1シグマ(68%確率)である。

表1 厚真町 浜厚真3遺跡 放射性炭素年代測定分析試料一覧

試料番号	測定方法	種類	重量(g)	遺構名	発掘区	層位	試料採取日	備考
HAMA3-1	AMS	炭化コルク片	0.09	F-8※	K-43	Vc層上面	2002. 9.26	フローテーション後に採取
HAMA3-2	AMS	炭化材	0.05	F-11※	K-41・42	Vc層上面	2002. 9.30	フローテーション後に採取

※F-8・11とも焼土跡

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-25.7;lab. mult=1)

Laboratory number: Beta-174517

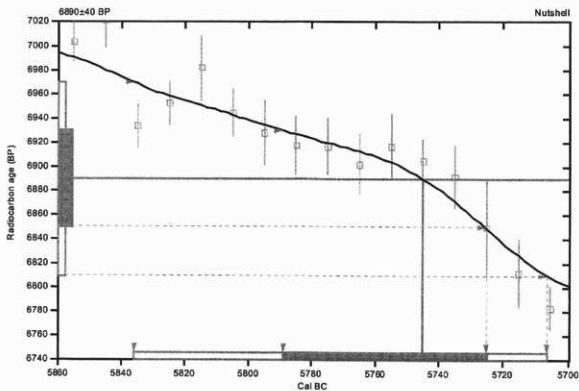
Conventional radiocarbon age: 6890±40 BP

2 Sigma calibrated result: Cal BC 5840 to 5710 (Cal BP 7790 to 7660)
(95% probability)

Intercept data

Intercept of radiocarbon age
with calibration curve: Cal BC 5740 (Cal BP 7700)

1 Sigma calibrated result: Cal BC 5790 to 5720 (Cal BP 7740 to 7680)
(68% probability)



References:

Database used

Calibration Database

Editorial Comment

Stiver, M., van der Plicht, H., 1998, *Radiocarbon* 40(β), p.xii-xiii

INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration

Stiver, M., et. al., 1998, *Radiocarbon* 40(β), p1041-1083

Mathematics

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, *Radiocarbon* 35(2), p317-322

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-25.3;lab. mult=1)

Laboratory number: Beta-174518

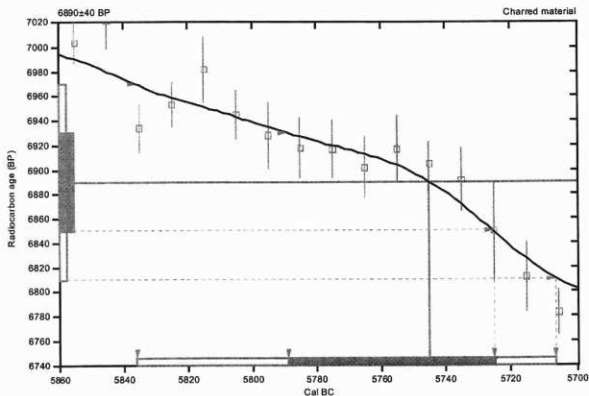
Conventional radiocarbon age: 6890±40 BP

2 Sigma calibrated result: Cal BC 5840 to 5710 (Cal BP 7790 to 7660)
(95% probability)

Intercept data

Intercept of radiocarbon age
with calibration curve: Cal BC 5740 (Cal BP 7700)

1 Sigma calibrated result: Cal BC 5790 to 5720 (Cal BP 7740 to 7680)
(68% probability)



References:

Database used

Calibration Database

Editorial Comment

Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, *Radiocarbon* 40(3), pxi-xlii

INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration

Stuiver, M., et. al., 1998, *Radiocarbon* 40(3), p1041-1083

Mathematics

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talbot, A. S., Vogel, J. C., 1993, *Radiocarbon* 35(2), p317-322

2 浜厚真3遺跡の古植生について

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

浜厚真3遺跡は、北海道勇払郡厚真町の浜厚真地区に所在し、現海岸線から2kmほど内陸の台地縁辺部（現標高7～12m）に位置する。調査区の地形は、北側と南西側に台地、南東側に低湿地がみられ、それらの間は平坦部となっている。今回の発掘調査により、縄文時代早期の焼土や縄文時代中期後半～後期初頭の可能性があるTピットなど、縄文時代を中心とした遺構・遺物が検出されている。このうち、Tピットの多くは平坦部で検出されている。

今回の分析調査では、縄文時代早期～晩期の植生変遷とともに、Tピット周辺の古植生に関する情報を得るため、花粉分析と植物珪酸体分析を行った。

1. 試料

調査区内の基本土層は大きくI層～X層に区分され、主に火山灰やそれを母材とする土壌により構成される。Tピットは、縄文時代中期後半～後期初頭に堆積したとみられるV層から掘り込まれている。V層は場所により、Va層・Vb層・Vc層に細分される。このうち、Va層はTピットが掘り込まれた層位、Vb層は支笏第1テフラ（Spfa-1）の二次堆積と推測されている。またVc層は、東側路Ⅱ式の出土する縄文時代早期の遺物包含層で、上面～上位で焼土が確認された。今回の調査では、基本土層の観察されたL-33地点が基本土層試料採取地点とされた。なお、本地点ではVa層とVb層の間にVa層下位がもうけられている。試料は、Va層・Va層下位・Vb層・Vc層から3点ずつ、合計12点が採取された。

一方、Tピットについては、構築から埋積開始までの情報を包含すると思われる底部の土壌を分析対象とし、5基（TP-75・76・91・100・114）のTピットから1点ずつ、計5点の土壌試料が採取された。このうち、TP-75は調査区北側に位置する南向きの斜面下方、TP-114は調査区南側に位置する北向きの斜面下方、他の3基は平坦部に構築されている。なお試料の採取は、発掘担当者により現代の土壌などが混入しないように注意深く行われた。

分析試料は、基本土層試料およびTピット底部試料の合計17点である（表1）。

表1 分析試料

試料番号	採取地点	層位	推定時期	備考	分析項目	
					花粉	PO
1	L-33	Va層①	縄文時代後期～晩期	基本土層	●	●
2	L-33	Va層②	縄文時代中期～後期		●	●
3	L-33	Va層③			●	●
4	L-33	Va層下位①	縄文時代前期～後期		●	●
5	L-33	Va層下位②			●	●
6	L-33	Va層下位③			●	●
7	L-33	Vb層①	縄文時代前期～中期		●	●
8	L-33	Vb層②			●	●
9	L-33	Vb層③			●	●
10	L-33	Vc層①	縄文時代早期		●	●
11	L-33	Vc層②			●	●
12	L-33	Vc層③			●	●
13	TP-75	底面	縄文時代中期後半～後期初頭	Tピット	●	●
14	TP-76	底面			●	●
15	TP-91	底面			●	●
16	TP-100	底面			●	●
17	TP-114	底面			●	●

PO：植物珪酸体分析

2. 分析方法

(1) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

(2) 植物珪酸体分析

湿重5g前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W, 250KHz, 1分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作成する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生について検討するために、植物珪酸体群集図を作成した。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。

3. 結果

(1) 花粉分析

結果を表2、図1に示す。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。なお、木本花粉総数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を+で表示するにとどめておく。

基本土層の試料番号6～12（Vc層～Va層下位）についてみると、花粉化石・シダ類胞子の産出が少なく、保存状態も悪い。木本花粉ではコナラ亜属・ハンノキ属など、草本花粉ではイネ科・キク亜科などがわずかに認められる程度である。

試料番号1～5（Va層～Va層下位）では、保存状態はやや悪いものの、草本花粉・シダ類胞子が多産する。木本花粉ではコナラ属コナラ亜属が最も多く産出し、モミ属・マツ属・ハンノキ属などが認められる。

草本花粉ではキク亜科が最も多く産出し、イネ科・カラマツソウ属・ワレモコウ属・ヨモギ属などが認められる。また、いずれの試料からもシダ類胞子が多産し、ゼンマイ属が多く認められる。

一方、Tピットの試料番号13～17では基本土層の試料番号6～12と同様に、花粉化石・シダ類胞子の産出が少なく、保存状態も悪い。木本花粉ではコナラ亜属など、草本花粉ではイネ科・キク亜科などがわずかに認められるに過ぎない。

表2 花粉分析結果

種 類	V a 層						V b 層			V c 層			TP-75	TP-76	TP-91	TP-100	TP-1H	
	①	②	③	下位①	下位②	下位③	①	②	③	①	②	③	底層	底層	底層	底層	底層	
試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	
木本花粉																		
モミ属	27	4	9	14	9	2	2	1	-	1	-	-	2	-	1	-	-	
トウヒ属	8	2	3	3	1	2	1	3	1	-	1	-	1	-	-	-	-	
マツ属単雄管束亜属	5	1	1	1	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
マツ属複雄管束亜属	-	-	2	-	3	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
マツ属(不明)	19	22	17	26	8	2	1	-	1	1	-	1	2	-	-	-	-	
コウヤマキ属	-	1	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	
クルミ属	1	-	-	1	2	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
クマシダ属-アサダ属	1	2	1	1	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ハシバミ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
カバノキ属	-	-	2	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ハンノキ属	5	12	17	14	11	4	1	3	3	2	1	-	1	-	-	1	-	
ブナ属	1	-	1	2	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	
コナラ属コナラ亜属	35	68	62	42	61	12	9	1	10	3	4	3	1	2	1	-	2	
ニレ属-ケヤキ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
カエデ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
シナノキ属	-	1	1	1	-	2	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	
ウコギ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
ツツジ科	-	3	-	1	6	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
トネリコ属	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
草本花粉																		
ガマ属	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
イネ科	27	27	45	35	22	5	3	3	4	1	1	5	3	4	2	4	4	
カヤツリグサ科	1	3	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
アヤメ科	2	2	1	-	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
クワ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
サナエタア属-ウナギツカミ属	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
タデ属	3	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ナアシコ科	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
カラマツソウ属	20	34	28	13	18	3	-	-	1	-	-	-	-	-	-	2	-	
キンボウゲ科	-	2	-	-	1	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	
ワレモコウ属	74	25	15	10	2	3	3	-	-	2	1	-	1	-	-	-	1	
ソラマメ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	
セリ科	24	3	4	3	3	3	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
リンドウ属	1	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ネナシカズラ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
シソ科	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
オミナエシ属	6	1	-	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ツバキニシジミ属-オキナグサ科属	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ヨモギ属	11	18	14	13	9	9	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
キク亜科	256	229	168	166	80	29	8	8	3	3	3	2	5	-	2	1	3	
タンポポ科	2	1	8	12	18	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	
不明花粉	5	3	5	3	6	7	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	1	
シダ類孢子																		
ヒカゲノカズラ属	1	2	-	-	-	1	-	-	-	1	1	1	-	-	2	-	1	
ゼンマイ属	170	133	147	173	156	32	12	4	9	8	4	2	39	1	-	2	2	
他のシダ類孢子	502	444	710	398	238	85	41	19	18	18	16	6	36	39	47	20	8	
合 計																		
木本花粉	103	116	116	108	109	29	15	9	19	8	6	6	7	2	2	1	2	
草本花粉	428	354	286	256	156	56	15	11	9	6	6	8	11	4	4	8	9	
不明花粉	5	3	5	3	6	7	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1	
シダ類孢子	673	579	857	571	394	118	53	23	27	27	21	9	75	40	49	22	11	
総計(不明を除く)	1204	1049	1259	935	659	203	83	43	55	41	33	23	93	46	55	31	22	
その他の微化石																		
ミズゴケ属	3	10	17	4	4	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	

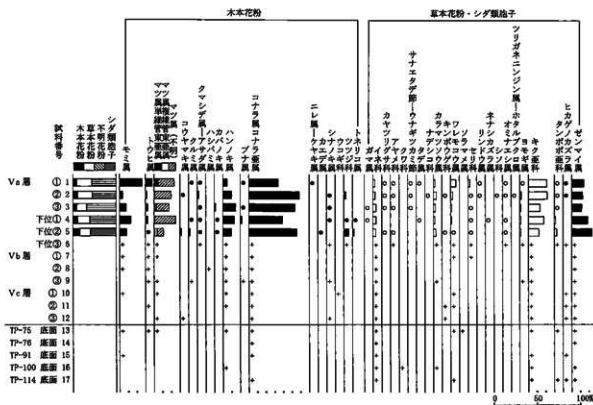


図1 花粉化石群集

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類孢子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、+は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

(2) 植物珪酸体分析

結果を表3、図2に示す。各試料からは植物珪酸体が見出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。

V層中では、植物珪酸体の産状に層位的な変化が見られる。

試料番号12~8(Vc層~Vb層)では、下位でイチゴツナギ亜科の産出が目立つが、上位に向かって減少し、代わってクマザサ属を含むタケ亜科が増加する傾向が認められる。またヨシ属、ススキ属なども認められる。

試料番号7~1(Vb層~Va層)では下位と同様な種類が認められるものの、クマザサ属を含むタケ亜科の産出が目立ち、イチゴツナギ亜科がこれに続く。ヨシ属、ススキ属などはわずか、あるいは稀に認められるに過ぎない。

一方、Tピット5基(TP-75・76・91・100・114)では、いずれもクマザサ属を含むタケ亜科およびイチゴツナギ亜科の産出が目立つ。このうち、試料番号13(TP-75)・14(TP-76)ではクマザサ属の機動細胞珪酸体、試料番号15(TP-91)ではイチゴツナギ亜科が目立つ。

このように、それぞれのTピットによる産状の違いは見られるものの、斜面下方と平坦部による産状の違いは明瞭ではない。

表3 植物珪酸体分析結果

種 類	試料番号	V a 層						V b 層		
		①	②	③	下位①	下位②	下位③	①	②	③
		1	2	3	4	5	6	7	8	9
イネ科葉部短細胞珪酸体										
タケ亜科クマザサ属		44	29	10	17	18	11	16	2	4
タケ亜科		210	231	189	212	209	147	152	40	69
ヨシ属		3	2	2	4	-	2	4	1	7
ウシクサ族ススキ属		-	-	-	-	-	-	2	-	-
イチゴツナギ亜科		77	48	42	31	36	24	26	27	83
不明キビ型		38	14	18	24	26	34	25	34	71
不明ヒゲシバ型		9	1	5	7	5	8	1	1	3
不明ダンチク型		4	1	5	5	4	10	2	4	1
イネ科葉身細胞珪酸体										
タケ亜科クマザサ属		52	46	39	36	42	37	34	5	6
タケ亜科		47	50	66	66	67	68	60	15	23
ヨシ属		1	-	-	-	-	2	3	-	-
ウシクサ族		2	-	-	-	-	-	-	-	-
不明		7	7	4	2	6	7	5	2	1
合 計										
イネ科葉部短細胞珪酸体		385	326	271	300	298	236	228	109	238
イネ科葉身細胞珪酸体		109	103	109	104	115	114	102	22	30
総 計		494	429	380	404	413	350	330	131	268

表3のつづき

種 類	試料番号	V c 層			T P-75	T P-76	T P-91	T P-100	T P-114
		①	②	③	底面	底面	底面	底面	底面
		10	11	12	13	14	15	16	17
イネ科葉部短細胞珪酸体									
タケ亜科クマザサ属		2	12	2	15	4	4	3	4
タケ亜科		70	85	73	146	158	135	122	53
ヨシ属		6	1	1	-	-	7	2	-
ウシクサ族ススキ属		11	-	-	-	3	5	2	-
イチゴツナギ亜科		144	180	185	64	63	181	39	27
不明キビ型		81	45	53	35	34	55	46	17
不明ヒゲシバ型		3	6	4	11	7	7	1	4
不明ダンチク型		9	3	4	10	9	15	4	4
イネ科葉身細胞珪酸体									
タケ亜科クマザサ属		3	10	7	48	41	16	10	5
タケ亜科		15	20	17	61	50	67	83	15
ヨシ属		-	-	-	-	-	-	2	-
ウシクサ族		-	-	-	-	-	-	-	-
不明		4	5	12	7	13	23	27	10
合 計									
イネ科葉部短細胞珪酸体		326	332	322	281	278	409	219	109
イネ科葉身細胞珪酸体		22	35	36	116	104	106	122	30
総計		348	367	358	397	382	515	341	139

4. 考 察

(1) V 層中の植生変遷

L-33地点のV c層上部～V a層下位下部にかけては、花粉化石の検出は少なく、その保存状態も悪かった。しかし、植物珪酸体は豊富に検出されたことから、花粉が土壤中に取り込まれにくかったとは考えにくい。一般的に花粉・シダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている(中村, 1967; 徳永・山内, 1971)。この点を考慮すれば、堆積時に取り込まれた花粉・シダ類胞子が酸化状態による経年変化により分解・消失したと考えられる。したがって、V c層上部～V a層下位下部は好気的環境下で堆積したと推測される。植物珪酸体の産状からは、クマザサ属を含むタケ亜科、イチゴツナギ亜科、ヨシ属、ススキ属などのイネ科植物が生育していたことがうかがえる。湿潤な場所に生育するヨシ属がわずかに認められたことから、周囲には湿潤な場所も存在していたと思われる。

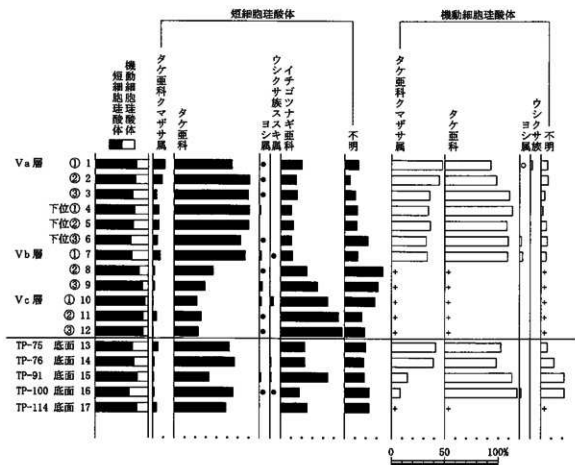


図2 植物珪酸体群集

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。
 なお、●○は1%未満、+は100個体未満の試料で検出された種類を示す。

なお、植物珪酸体の産状はVb層を挟んで変化している。すなわち、Vc層～Vb層では、下位でイチゴツナギ亜科の産出が目立つが、上位に向かって減少し、代わってクマザサ属を含むタケ亜科が増加する傾向が認められる。北海道では、胆振地方などの4地域で、5,000～6,000年前にウシノケサ亜科(イチゴツナギ亜科)からササ類にイネ科中の優占種が変化したことが報告されている(佐瀬・近藤, 1974)。V層内で見られた産状の変化は、このような植生の変化を反映している可能性がある。

上位のVa層下位～Va層にかけては、草本花粉とシダ類孢子が多産する。草本類ではキク亜科が多産し、イネ科・カラマツソウ属・ワレモコウ属・ヨモギ属などが検出される。また、植物珪酸体ではクマザサ属を含むタケ亜科の産出が目立ち、イチゴツナギ亜科、ヨシ属、ススキ属なども認められる。これらのうち多産するキク亜科やイネ科・ヨモギ属などは、開けた明るい場所を好む種を含む分類群である。森林植生を反映する木本類の産出が少ないことから、当時の本遺跡周辺はキク亜科やイネ科などが生育する、開けた草地であったと推測される。

また、道南の花粉化石群集をみると縄文時代にはコナラ亜属やカバノキ属などの広葉樹花粉が優勢で、マツ属やトヒ属などの針葉樹花粉を伴う組成であり(星野, 1998など)、今回の場合も広葉樹花粉が優勢な結果が得られている。これより、コナラ亜属は主に本遺跡が立地する台地や周辺の山野に森林を形成していたと考えられる。コナラ亜属にはハンノキ属やクマシテ属-アサダ属、シナノキ属と同様、河畔や湿地など湿ったところを好む種類も含まれていることから、これらとともに低地縁

辺部や河畔などに生育していた可能性もある。なお、冷温帯上部にあたる北海道南部地域では、コナラ亜属などの広葉樹と針葉樹がモザイク状に混交する、針広混交林とよばれる森林が多くみられる(小野・五十嵐, 1991)。検出された針葉樹花粉には標高の高い場所から飛来した可能性も残されるが、その立地を考慮すれば、当時針広混交林が存在しており、その構成種に由来する可能性が高いと思われる。

(2) Tピット周辺の古植生

調査した5基のTピット底部の腐植土層からは、花粉化石・シダ類胞子がほとんど検出されなかった。わずかに産出する試料をみると、コナラ亜属・イネ科・キク亜科などが認められ、V a層下位～V a層から得られた群集と同様の傾向を示す。しかし、産出量が少ないことから、当時の植生を推定するには充分ではないと考えられる。基本土層V a層下位より下の層準と同様に、土壌中に取り込まれた花粉が分解・消失したと考えられる。

これらのTピットでは、いずれもクマザサ属を含むタケ亜科とイチゴツナギ亜科に由来する植物珪酸体の産出が目立った。これより、Tピットの周囲でもL-33地点と同様にイネ科植物などが生育していたことがうかがえる。なお、TP-75やTP-76ではクマザサ属の機動細胞珪酸体、TP-91ではイチゴツナギ亜科が目立ち、これらのTピットが構築された場所では局所的にイネ科の中でも優先する種類が異なっていた可能性がある。ただし、斜面下方と平坦部による産出の違いは明瞭ではないため、斜面下方と平坦部ではほぼ同様な植生であったと思われる。

ところで、静岡県三島市の下原遺跡や加茂ノ洞B遺跡では、旧石器時代の陥穴状土坑がスキ属などの草本類が地面を覆う、土坑の存在の判りにくい場所に構築された可能性が指摘された(植木ほか, 1996)。本遺跡で産出の目立ったササ類やイチゴツナギ亜科などの草本類は、他の種類の草本類とともに群落を作って、地表面を覆うように生育する。そのため、上記の調査例同様に、本遺跡のTピットも斜面下方や平坦面の中で、草本類により土坑の存在が判りにくい場所を選んで構築された可能性がある。

【引用文献】

- 星野フサ(1998) 北海道の植生史(2) - 南北海道。図説日本列島植生史, 安田喜憲・三好教夫編, p. 51-61, 朝倉書店。
- 近藤隼三・佐瀬 隆(1986) 植物珪酸体分析, その特性と応用。第四紀研究, 25, p. 31-64。
- 中村 純(1967) 花粉分析。232 p., 古今書院。
- 小野有五・五十嵐八枝子(1991) 北海道の自然史 永期の森林を旅する。219 p., 北海道大学図書刊行会。
- 佐瀬 隆・近藤隼三(1974) 北海道の埋没火山灰土腐植層中の植物珪酸体について。帯広畜産大学研究 報告, 8, p. 147-183。
- 徳永重元・山内輝子(1971) 花粉・胞子。「化石の研究法」, p. 50-73, 共立出版株式会社。
- 植木真吾・馬場健司・中根秀二(1996) 陥穴状土坑をとりまいた古環境。静岡県埋蔵文化財調査研究所 調査報告第72集「下原遺跡Ⅱ」, p. 62-86, 静岡県埋蔵文化財調査研究所。

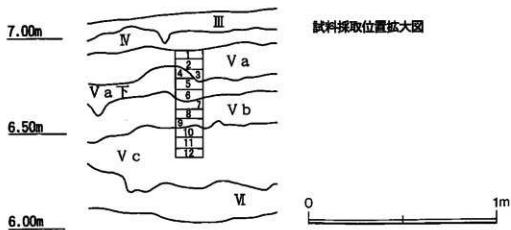
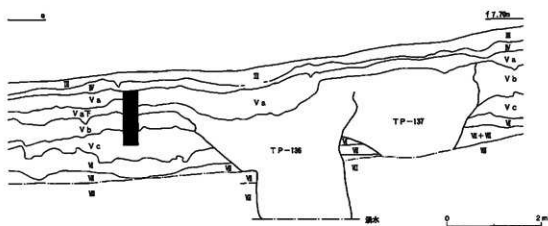
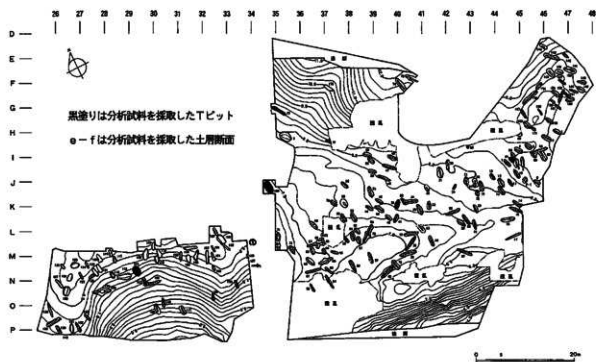
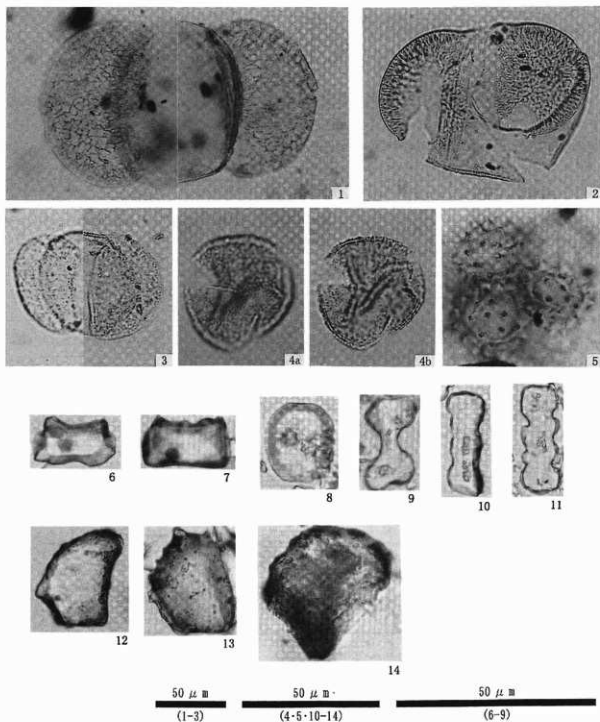


図3 分析試料採取位置

図版1 花粉化石・植物珪酸体



- | | |
|-------------------------------|-----------------------------|
| 1. モミ属 (Va層①;1) | 2. トウヒ属 (Va層①;1) |
| 3. マツ属 (Va層①;1) | 4. コナラ属コナラ亜属 (Va層③;3) |
| 5. キク亜科 (Va層①;1) | 6. クマザサ属短細胞珪酸体 (Va層①;1) |
| 7. クマザサ属短細胞珪酸体 (TP-75;13) | 8. ヨシ属短細胞珪酸体 (Va層③;3) |
| 9. ススキ属短細胞珪酸体 (TP-91;15) | 10. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体 (Va層③;3) |
| 11. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体 (TP-91;15) | 12. クマザサ属機動細胞珪酸体 (Va層①;1) |
| 13. クマザサ属機動細胞珪酸体 (TP-75;13) | 14. ヨシ属機動細胞珪酸体 (Va層③;3) |

3 浜厚真3遺跡のフローテーション資料

浜厚真3遺跡の焼土（F-2～14）について、炭化種子等の微細遺物を回収する目的でフローテーション作業を行った。回収作業にあたっては、浮遊物に2.00mmと0.425mmの篩を、沈殿物に1.40mmの篩をそれぞれ用いた。

当センターの整理作業所でこれらの資料の選別を行ったが、時間的な制約から今年度の報告書に掲載することができなかった。このため、次年度以降発行の報告書（日高自動車道関連）に分析資料の報告を予定している。表1は回収資料の概要についてまとめたものである。（山中）

表1 浜厚真3遺跡フローテーション資料一覧

遺構名	調査区	検出 層位	時期	水洗前乾	水洗前乾	浮遊物	沈殿物	炭化ケルミ殻	黒曜石フリイ?
				燻重量 (g)	燻体積 (l)				
F-2	I45c	Vc層上面	縄文時代早期後半	2900	4	18.95	106.36	0.07	
F-3	I43d	*	*	1800	2	10.34	73.86		
F-4	J44d	*	*	3300	4	39.45	216.96	0.05	
F-5	K44b	Vc層上位	*	3500	5	4.08	113.75		
F-6	K43b	Vc層上面	*	1800	2	2.15	96.59	0.74	
F-7	I45c	*	*	1900	2	1.72	88.91	0.15	
F-8	K43b	*	*	10700	17	11.69	537.71	3.28	
F-9	K41c、K42b	Vc層上位	*	9500	13	8.03	431.87	0.18	
F-10	K41c、K42b	*	*	4100	11	14.55	182.74	1	
F-11	K41c、K42b	*	*	11100	15	5.48	374.44	1.55	
F-12	J44a	Vc層上面	*	2400	4	1.48	105.02	0.23	
F-13	L38c、L39b	Vc層上位	*	2400	4	2.21	78.15	0.24	
F-14	N38c	*	*	2700	4	1.33	53.51	0.15	
F-12 の崩落	J44a・b	TP-13 の覆床	*	1900	2.5	2.94	69.14	0.05	1
F-9～11の周囲		Vc層上位	*	-	-	-	-	6.53	
合 計				60000	90.5	124.40	2529.01	14.22	1

VII 成果と問題点

1 浜厚真3遺跡のTピットについて

これまで述べてきたように、今回の調査では3,390㎡の調査面積から173基のTピットが検出された。本遺跡の所在する勇払平野東部では、これまでに「苫小牧東部工業地帯の遺跡群」（以下、「苫東遺跡群」）等の調査によって、500基を越すTピットが報告されている。ここでは、本遺跡と「苫東遺跡群」のTピットとの相違点について若干の比較を行い、本遺跡の特徴と問題点のいくつかを明確にしておきたい。なお「苫東遺跡群」の位置は、図Ⅱ-4-5に示されている（表Ⅶ-1-1の番号は図Ⅱ-4-5に対応）。

(a) 立地

本遺跡は台地から低湿地へ地形が変化する部分に立地している。台地と低湿地の間には標高7～8m（中央部の調査終了面）の平坦部が形成されており、Tピットの大半はこの部分で検出された。

一方の「苫東遺跡群」中の各遺跡は、いずれも厚真台地（40等のある台地）、静川台地（100等のある台地）、柏原台地（16等のある台地）、遠浅台地（81等のある台地）の頂部、標高約10m以上にあり、本遺跡とは対照的な立地である。

(b) 分布密度

Tピットの分布密度は、「調査面積（㎡）／Tピット基数」から割り出され（厚真町教委2001）、本遺跡の場合、19.6㎡につき1基となる。

「苫東遺跡群」のうち、最もTピットが検出されている静川14遺跡（40番）では130.1㎡につき1基、次いで多い厚真7遺跡（100番）では90.9㎡につき1基である（表Ⅶ-1-1）。台地ごとにみると、各台地とも約300～400㎡に1基検出される程度で、本遺跡に比べるといずれもTピットの密度は低い。遺跡の範囲のとらえ方で計算上の値は変わるが、本遺跡が高密度にTピットの分布する一帯であることは理解されよう。

本遺跡のTピットを「苫東分類」によって分類したところ、B1型にあてはまるものが最も多く67基、次いでA1型、A2型、C2型、B2型、C1・C型となる（表Ⅳ-2-1）。

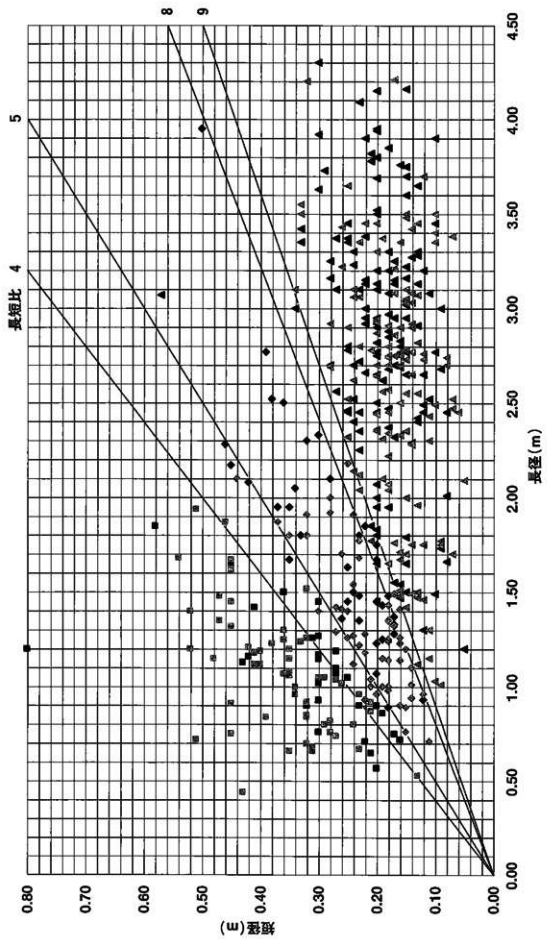
これに対して「苫東遺跡群」全体（534基）では、A1型が248基で半数に近く、以下B1型、C2型、A2型、C1型、B2型の順になる（表Ⅶ-1-1）。ただし、B1型とC2型の差はわずか3基で、台地によっては両者が逆転する場合もあり、これらはほぼ同数とみてよいであろう。

このように「苫東遺跡群」では、A1型のTピットが最も多いが、本遺跡ではB1型が多い。また、「苫東遺跡群」におけるB1型の検出数をみると、調査面積177,830㎡に対して71基にとどまる（約2,500㎡につき1基検出される程度）。これらを合わせて考えると、台地と低湿地の間に平坦部のある本遺跡のような場所に、台地頂部よりもB1型の多い可能性がある。

(c) 形態

図Ⅶ-1-1は厚真台地と静川台地のTピット約500基について、底面の長径と短径の相関をあらわしたものである。本遺跡での相関図（図Ⅳ-2-4）と比べると、両者ともおおむね同様の分布を示しており、とくに異なるまとはみあたらない。

各分類についてみると、A1型は、両者とも2.5～3.5m付近にまとはみられる。本遺跡のA1型は2.4～4.0mのまとはみがあったため、あえてA1-L型として区別したが、厚真・静川台地のものをあわせてみると、2.4mとした境界は曖昧になり、2mを境としてA1型とA2型に分けることで充分であったかと思われる。2m以下のA型（A2型）については、本遺跡の場合、B型との境界



△A型 ◇B型 □C型 (黒塗りは厚真、薄網は静川台地)
 図Ⅷ-1-1 Tピット底面における長径・短径の相関図 (厚真・静川台地)

が不明瞭であり(図Ⅳ-2-4)、配列を想定する際には、A2型、B1型をあわせて検討した方がよいと考えられる。

B型は、本遺跡では約1~2mに集中しているが、厚真・静川台地では約1~1.5m程度のものが多い。C型でとくに目立つ点はない。

以上、(a)~(c)の3点について、本遺跡のいくつかの特徴を明確にしたつもりである。続いて、本遺跡のTピットの問題点について若干ふれておきたい。

Ⅳ章でも述べたが、TP-74の覆土1・2層は隣接するTP-73の掘り上げ土と推測される。一方、覆土3~10層は晩秋から春先にかけて、土壌中の水分が凍結・融解を繰り返したことにより、壁面等が崩落して堆積したものとみられる(本頁25~33行参照)。このことから、使用されなくなった74がくぼみとして確認できる時点で73は構築され、その掘り上げ土で74のくぼみを埋めたと推測される。さらに、73・74ともA1-L型で、規模・長軸方向についても概ね同じであることを考慮すると、74が使用されなくなってから1年ほどの間に、その代わりとして73は構築されたのではないかと考えられる。

さて本遺跡のTピットの中には、重複するものや、隣接するTピットの掘り上げ土によって埋められたもの(以下、埋め戻しと略)があることから、全てが同時に構築されたわけではない。ここで本遺跡における重複と埋め戻しの差を整理すると、①同分類・同規模のものは重複しないが、長軸方向をほぼ同じにして隣接する場合、埋め戻される例がある(TP-73と74等)、②異なる分類どうしては重複する例があるが(TP-56と78等)、隣接するものに埋め戻しは確認されていない。

①と②、さらにTピット覆土の堆積を合わせて考えると、同分類で規模・長軸方向も概ね同じTピットどうしの隣接は、Tピットが埋まりきっていないため重複しないとみられ、構築の時間差が短い可能性がある。異なる分類のTピットどうしの重複は、Tピットがほぼ埋まりきっているため重複するとみられ、構築の時間差が長い可能性がある。以上のことから推し量ると、本遺跡でのTP-73と74(ともにA1-L型)の隣接等は同分類のものがほぼ同時期(時間差が短い)に構築されたことを、TP-56(A1-L型)と78(B1型)の重複等は異なる分類のものが時期も異にして(時間差が長い)構築されたことをうかがわせる。

ここで本遺跡のTピットを冬季に観察する機会があったので、簡単に紹介しておきたい。

2002年10月25日：現場調査の最終日。初霜が降りる。

2002年11月初旬(曇り、正午頃)：TP-9に枯葉がかなりたまっている。

2002年12月1日(晴れ、午前10時半頃)：調査終了面は霜柱が立ちブカブカである。観察された全てのTピットは、壁面から崩落したⅥにより半分近くまで埋没している。埋まりきっていない壁面にはⅥの付着した霜柱がびっしりと立ち、小さな崩落を起こし続けている。まだ積雪はない。

2003年1月26日(晴れ、正午頃)：積雪20cm程度。TP-99は調査終了面から約45cm下まで埋まっている。地表はピンボールが刺さらないほど凍てついて固い。TP-145の開口部は長径が40cm程広がっていた。積雪により多くのTピットの位置は不明である。

花粉分析・植物珪酸体分析の結果によれば(Ⅵ章2参照)、Tピットが構築された頃の本遺跡は、キク亜科やイネ科などの生育する開けた草地であったと推測されている。また、ヨシ属等も検出されていることから、近くに湿潤な場所があったとみられており、本遺跡の低湿地部分が該当するのであろう。すでに述べたが、浜厚真3遺跡は台地から低湿地へと変化する地形の境界部分に立地している。Tピットの構築にあたってこのような立地条件がいかに好適であったかは、173基にのぼるTピットの数によって示唆されている。(山中)

表Ⅶ-1-1 「苫小牧東部工業地帯の遺跡群」 Tピット一覧

台地	番号	遺跡名	面積 (㎡)	基数	1基/㎡	A 1	A 2	B 1	B 2	C 1	C 2	C	D	不明	合計	報告書
厚	42	静川	18,234	41	1/444.7	17	5	6	1		12				41	Ⅳ
	40	静川14	15,608	120	1/130.1	41	13	23	8	12	23				120	Ⅵ
	41	静川15	2,187	1	1/2187.0	1									1	Ⅵ
	44	静川18	2,974	2	1/1487.0	2									2	Ⅶ
	45	静川19	2,974	11	1/270.4	5		1	4		1				11	Ⅴ
	46	静川20	2,687	17	1/158.1	9	1	1	2			4			17	Ⅳ
	47	静川21	2,544	4	1/636.0	1		3							4	Ⅳ
	48	静川22	13,064	21	1/622.1	11	4	2			1	2		1	21	Ⅸ
	49	静川23	2,770	1	1/2770.0							1			1	Ⅶ
	50	静川24	2,562	2	1/1281.0	2									2	Ⅶ
	51	静川25	8,174	13	1/628.8	12			1						13	Ⅶ
厚真台地合計			73,778	233	1/316.6	101	23	36	16	13	43		1	233		
静	95	厚真1	5,208	12	1/434.0	5		2	1	4					12	Ⅰ
	96	厚真2	3,241	8	1/405.1	3	1	3			1				8	Ⅰ
	97	厚真3	6,366	31	1/205.4	21		2	3	4	1				31	Ⅲ
	100	厚真7	7,185	79	1/90.9	27	10	10		10	1		21		79	Ⅱ
	101	厚真8	6,829	9	1/758.8	5								4	9	Ⅰ
	103	厚真10	2,707	3	1/902.3			1	1	1					3	Ⅰ
	105	厚真12	1,812	2	1/906.0	1		1							2	Ⅲ
	106	厚真13	3,200	9	1/355.6	7	1				1				9	Ⅳ
	107	共和1	5,711	7	1/815.9	3	1				1	2			7	Ⅱ
	30	静川4	2,300	17	1/135.3	12		2	1	2					17	Ⅹ
	34	静川8	15,660	50	1/313.2	25	1	6	3		2		13		50	Ⅲ
	74	静川29	1,938	3	1/646.0	1							1	1	3	Ⅶ
	75	静川30	9,375	17	1/551.5	12		4			1				17	Ⅶ
76	静川31	1,094	2	1/547.0	1					1				2	Ⅶ	
78	静川33	3,375	2	1/1687.5	1		1							2	Ⅶ	
79	静川34	4,713	6	1/785.5	6									6	Ⅶ	
80	静川35	3,281	1	1/3281.0	1									1	Ⅶ	
静川台地合計			83,995	258	1/325.6	131	14	32	9	22	10	1	35	4	258	
柏原	15	柏原16	3,778	16	1/236.1	9		2	2		3				16	Ⅳ
	16	柏原17	5,007	4	1/1251.7	1					3				4	Ⅳ
	17	柏原18	4,904	15	1/326.9	1		1	2		9		2		15	Ⅴ
	18	柏原19	2,125	6	1/354.2	4	2								6	Ⅳ
柏原台地合計			15,814	41	1/385.7	15	2	3	4		15		2	41		
遠浅	81	遠浅1	4,243	2	1/2121.5	1								1		Ⅱ
合計			177,830	534	1/333.0	248	39	71	29	35	68	1	38	5	534	

Tピットの報告されていない遺跡は含めていない
 番号は図Ⅱ-4-5に対応 報告書は「苫小牧東部工業地帯の遺跡群」の報告書シリーズ名

写 真 图 版



1 Tビット検出状況（西から）



2 西側拡張部Tビット検出状況（北西から）

写 真 图 版



1 調査風景 (南西から)



2 Tピット検出状況 (北から)

図版 2



1 Tビット検出状況 (西から)



2 西側拡張部Tビット検出状況 (北西から)



1 調査区完掘（西から）



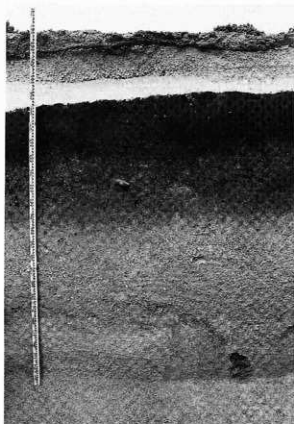
2 東側拡張部完掘（北から）



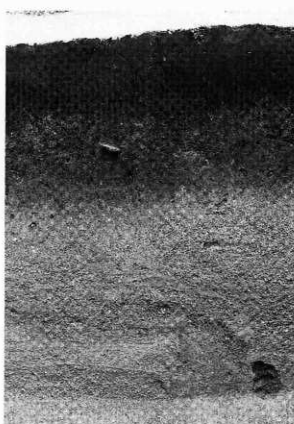
1 西側拡張部完掘（北から）



2 調査区全景（南西から）



1 基本土層（南西から）



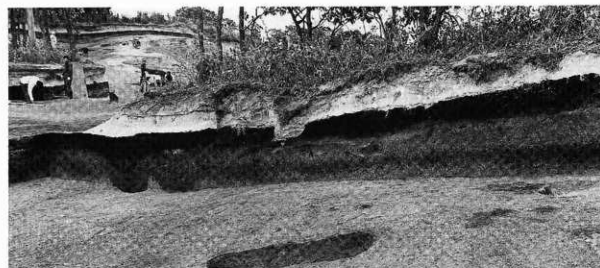
2 基本土層拡大



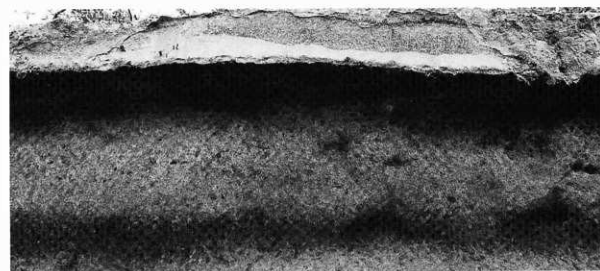
3 南北土層断面（南から）



1 西側拡張部調査区全景（北から）



2 西側拡張部南北土層断面（西から）



3 西側拡張部東西土層断面（北から）



1 TP-1土層断面 (南東から)



2 TP-1完掘 (南東から)



3 TP-2土層断面 (南東から)



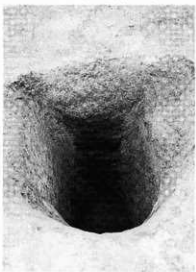
4 TP-2完掘 (南東から)



5 TP-3土層断面 (南東から)



6 TP-3完掘 (北から)



7 TP-4土層断面 (南東から)



8 TP-4完掘 (北西から)



9 TP-5土層断面 (南から)



1 TP-5完掘 (南西から)



2 TP-6土層断面 (南西から)



3 TP-6完掘 (南西から)



4 TP-7土層断面 (南から)



5 TP-7完掘 (南から)



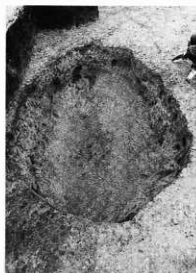
6 TP-8土層断面 (南東から)



7 TP-8完掘 (南東から)



8 TP-9土層断面 (北東から)



1 TP-9完掘 (南から)



2 TP-10完掘 (南から)



3 TP-11土層断面 (南から)



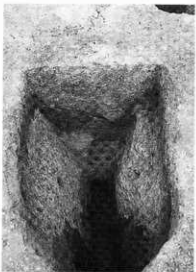
4 TP-11完掘 (南から)



5 TP-12土層断面 (南から)



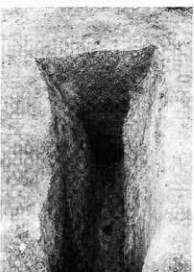
6 TP-12完掘 (南から)



7 TP-13土層断面 (南から)



8 TP-13完掘 (南から)



9 TP-14土層断面 (南から)



1 TP-14完掘 (南から)



2 TP-15土層断面 (南から)



3 TP-15完掘 (南東から)



4 TP-16土層断面 (東から)



5 TP-16完掘 (南東から)



6 TP-23土層断面 (南から)



7 TP-23完掘 (南から)



8 TP-24土層断面 (南から)



9 TP-24完掘 (南から)



1 TP-25土層断面 (南から)



2 TP-25完掘 (南から)



3 TP-27土層断面 (南から)



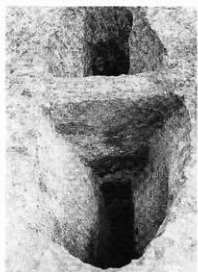
4 TP-27完掘 (北西から)



5 TP-28土層断面 (東から)



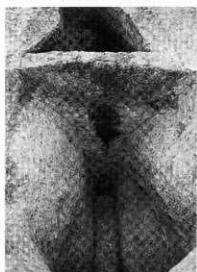
6 TP-28完掘 (西から)



7 TP-29土層断面 (南西から)



8 TP-29完掘 (南西から)



9 TP-31土層断面 (南から)



1 TP-31完掘 (南から)



2 TP-32土層断面 (南から)



3 TP-32完掘 (南から)



4 TP-33土層断面 (南西から)



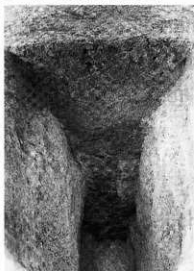
5 TP-33完掘 (南西から)



6 TP-34土層断面 (東から)



7 TP-34完掘 (東から)



8 TP-35土層断面 (南から)



9 TP-35完掘 (南から)



1 TP-37土層断面 (西から)



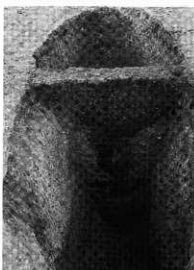
2 TP-37完掘 (西から)



3 TP-47土層断面 (南東から)



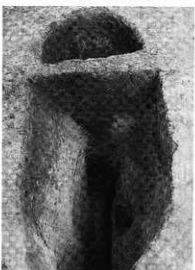
4 TP-47完掘 (南東から)



5 TP-48土層断面 (南東から)



6 TP-48完掘 (南東から)



7 TP-50土層断面 (東から)



8 TP-50完掘 (北西から)



9 TP-54土層断面 (南から)



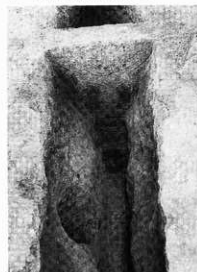
1 TP-54完掘 (南から)



2 TP-56土層断面 (南から)



3 TP-56完掘 (南西から)



4 TP-57土層断面 (南から)



5 TP-57完掘 (南から)



6 TP-58土層断面 (南から)



7 TP-58完掘 (南から)



8 TP-59土層断面 (南東から)



9 TP-59完掘 (南東から)



1 TP-62土層断面 (南から)



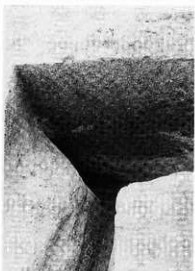
2 TP-62完掘 (北西から)



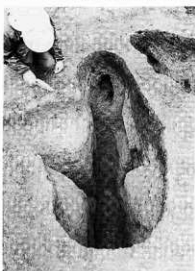
3 TP-63土層断面 (南から)



4 TP-63完掘 (南から)



5 TP-66土層断面 (西から)



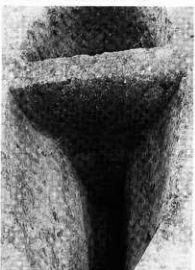
6 TP-66完掘 (南から)



7 TP-67土層断面 (西から)



8 TP-67完掘 (西から)



9 TP-70土層断面 (南から)



1 TP-70完掘 (南から)



2 TP-72土層断面 (北から)



3 TP-72完掘 (北から)



4 TP-75土層断面 (南から)



5 TP-75完掘 (南から)



6 TP-76土層断面 (北東から)



7 TP-76完掘 (北東から)



8 TP-78土層断面 (南から)



9 TP-78完掘 (南東から)



1 TP-82土層断面 (東から)



2 TP-82完掘 (東から)



3 TP-85土層断面 (北東から)



4 TP-85完掘 (北東から)



5 TP-88・89土層断面(南から)



6 TP-88完掘 (西から)



7 TP-89完掘 (北から)



8 TP-91土層断面 (南から)



9 TP-91完掘 (南から)



1 TP-97土層断面 (南から)



2 TP-97完掘 (南から)



3 TP-99土層断面 (南から)



4 TP-99完掘 (南から)



5 TP-100土層断面 (南から)



6 TP-100完掘 (南から)



7 TP-102土層断面 (南から)



8 TP-102完掘 (南西から)



9 TP-103土層断面 (南から)



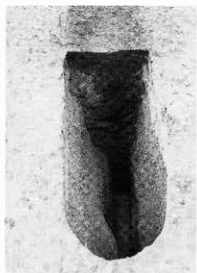
1 TP-103完掘 (南から)



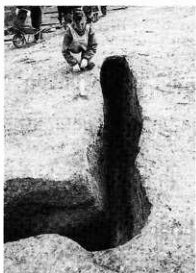
2 TP-104土層断面 (南から)



3 TP-104完掘 (南から)



4 TP-108土層断面 (東から)



5 TP-108完掘 (西から)



6 TP-111土層断面 (南から)



7 TP-111完掘 (北から)



8 TP-113土層断面 (北から)



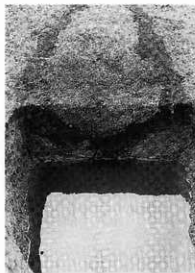
9 TP-113完掘 (南から)



1 TP-114土層断面 (南から)



2 TP-114完掘 (北から)



3 TP-121土層断面 (南から)



4 TP-121完掘 (北から)



5 TP-125土層断面 (北から)



6 TP-125完掘 (北から)



7 TP-127完掘 (北から)



8 TP-128土層断面 (南から)



9 TP-128完掘 (北から)



1 TP-130土層断面 (北から)



2 TP-130完掘 (北から)



3 TP-131土層断面 (北から)



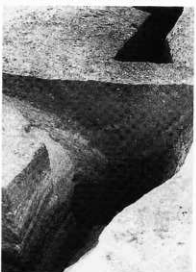
4 TP-131完掘 (北から)



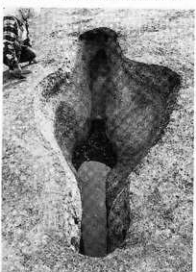
5 TP-132土層断面 (北から)



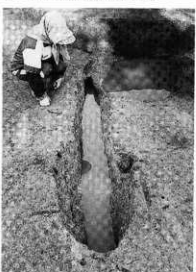
6 TP-132完掘 (北から)



7 TP-134土層断面 (東から)



8 TP-134・169完掘 (北西から)



9 TP-135完掘 (南から)



1 TP-136土層断面 (西から)



2 TP-137土層断面 (西から)



3 TP-138土層断面 (南から)



4 TP-138完掘 (北から)



5 TP-139土層断面 (南から)



6 TP-139完掘 (北から)



7 TP-140土層断面 (東から)



8 TP-140完掘 (東から)



9 TP-141・158土層断面 (南東から)



1 TP-141・158完掘(南東から)



2 TP-142土層断面(南から)



3 TP-142完掘(南から)



4 TP-143土層断面(南から)



5 TP-143完掘(南東から)



6 TP-144土層断面(南から)



7 TP-144完掘(南から)



8 TP-145土層断面(南から)



9 TP-145完掘(南から)



1 TP-146土層断面 (東から)



2 TP-146完掘 (東から)



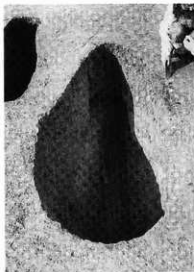
3 TP-147土層断面 (南東から)



4 TP-147完掘 (南東から)



5 TP-148土層断面 (南東から)



6 TP-148完掘 (南東から)



7 TP-149土層断面 (南東から)



8 TP-149完掘 (北西から)



9 TP-150完掘 (東から)



1 TP-150杭跡土層断面 (南から)



2 TP-151完掘 (北から)



3 TP-153土層断面 (南から)



4 TP-153完掘 (北から)



5 TP-159土層断面 (南西から)



6 TP-159完掘 (南西から)



7 TP-160土層断面 (南から)



8 TP-160完掘 (南から)



1 TP-161土層断面(南から)



2 TP-161完掘(南から)



3 TP-165土層断面(南西から)



4 TP-165完掘(北から)



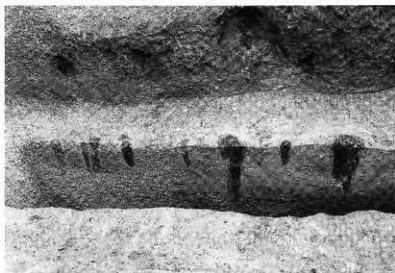
5 TP-167完掘(北から)



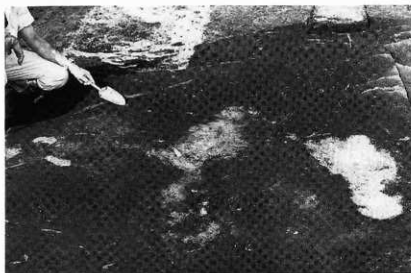
6 TP-168完掘(南から)



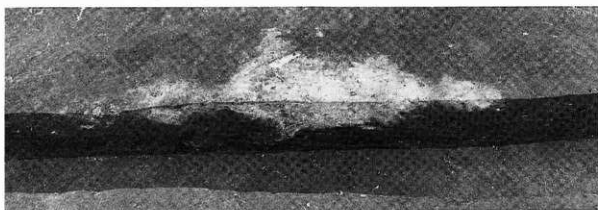
7 TP-170完掘(南から)



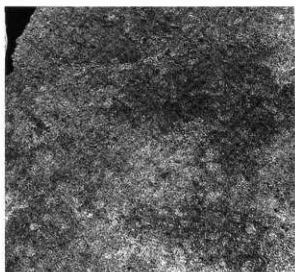
8 TP-170杭跡土層断面(南西から)



1 F-1 検出 (南東から)



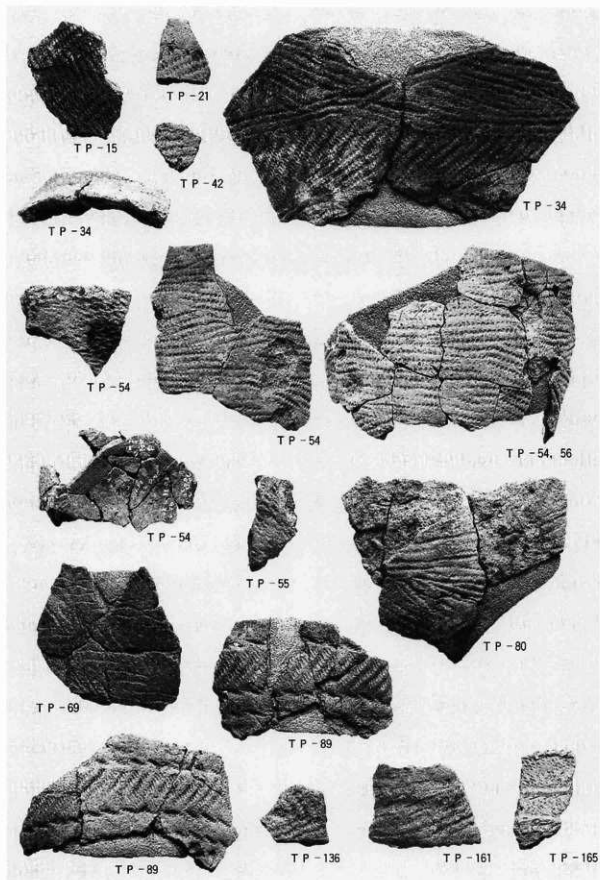
2 F-1 土層断面 (南東から)



3 F-5 検出 (西から)



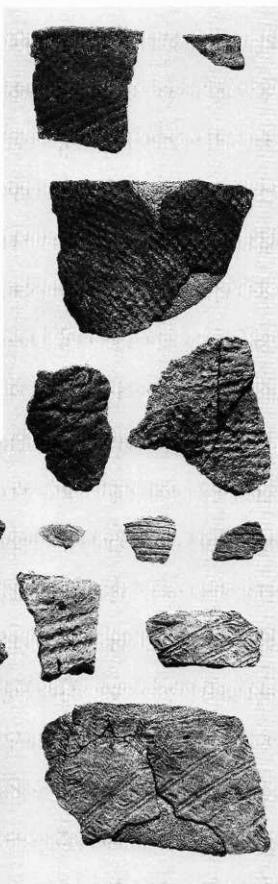
4 F-9・10・11 検出 (西から)



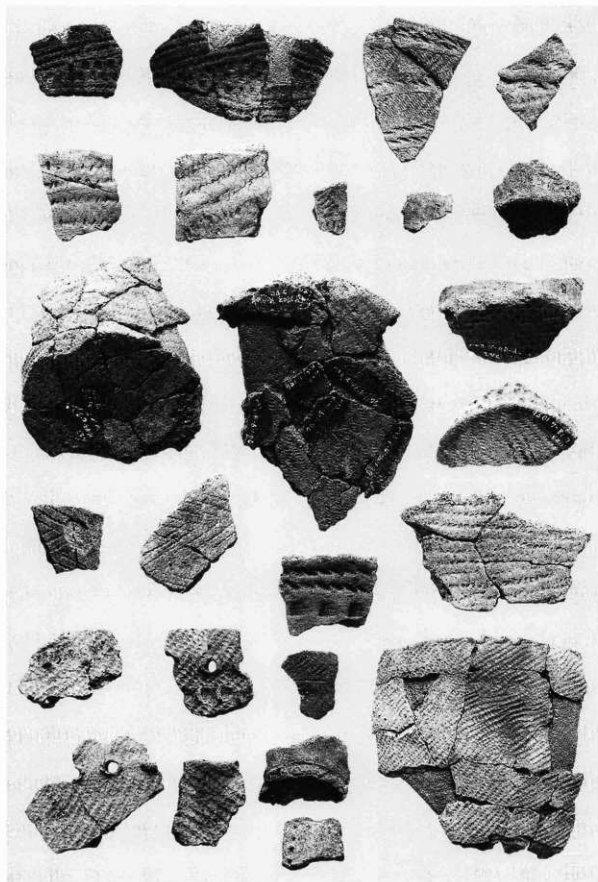
1 Tピット出土の土器



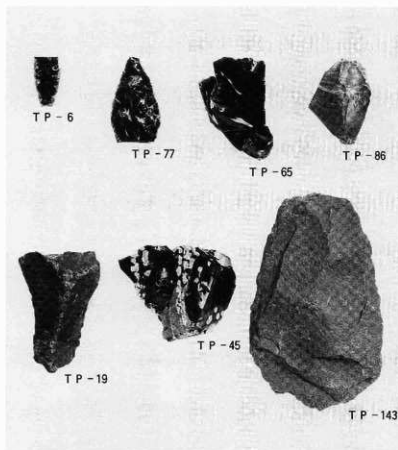
1 F-11出土の土器



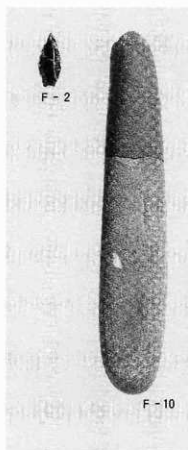
2 包含層出土の土器 (1)



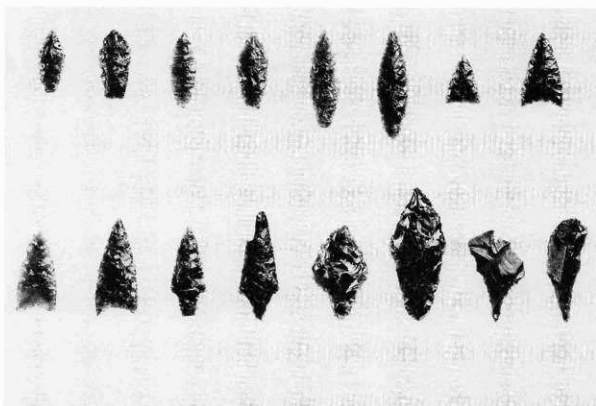
1 包含層出土の土器（2）



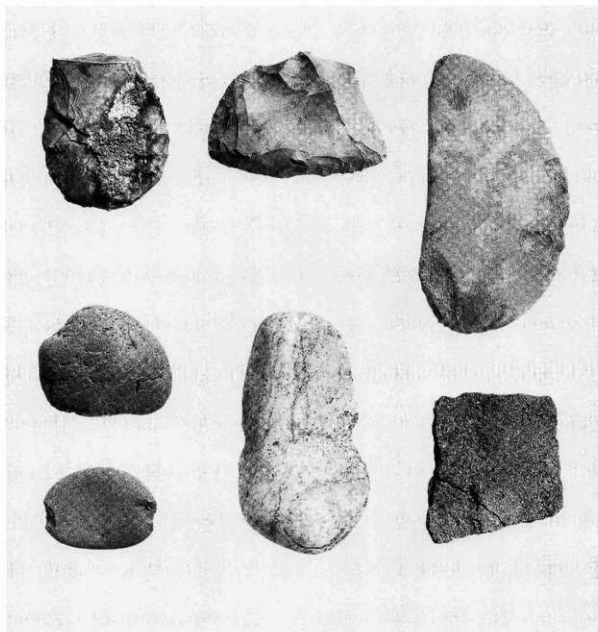
1 Tビット出土の石器



2 焼土出土の石器



3 包含層出土の石器 (1)



1 包含層出土の石器(2)

引用・参考文献

- 赤石慎三 2002『苫小牧市東部工業地帯の遺跡群Ⅵ』苫小牧市教育委員会
- 厚真町編 1986『厚真町史』厚真町
- 厚真村郷土研究会編 1956『厚真村古代史—村内に所在する先住民族の遺物—』同会・厚真村教育委員会
- 厚真村広報委員会編 1956『厚真村史』厚真村
- 池田国昭・羽坂俊一・村瀬 正 1995『北海道勇払平野の完新統分布と地形発達』『地質調査所月報』第46巻第6号
- 池田 実・亀井喜久太郎 1976『厚真の旧地名を尋ねて』
- 犬養哲夫 1952『北海道の鹿とその興亡』『北方文化研究報告』7
- 今村啓爾 1983『陥穴（おとし穴）』『縄文文化の研究2 生業』雄山閣
- 大泉博嗣 1987『第2節 遺構の分類 落とし穴』『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅱ』苫小牧市教育委員会
- 大嶋和雄 1991『地球温暖化の影響量評価とその対策』『地質ニュース』445号
- 大森司 統 2002『切り合うTピット』『北海道考古学』38
- 大沼忠春 1986『縄文原体の変遷—東網路式土器』『季刊考古学』17 雄山閣
- 木村尚俊 1980『縄文早期』『北海道考古学講座』みやま書房
- 工藤藤・兵藤千秋ほか 2002『苫小牧市東部工業地帯の遺跡群Ⅸ』苫小牧市教育委員会
- 河野広道 1972『統北方文化論』河野広道著作集Ⅱ 北海道出版企画センター
- 古原敏弘 1982『駒場7遺跡における考古学的調査』静内町教育委員会
- 小山正忠・竹原秀雄 1996『新版標準土色帖1996年版』
- 近藤 務・五十嵐八枝子・吉田克夫・赤松守雄 1984『北海道苫小牧市静川ボーリング・コアにみられる第四系』『第四紀研究』22
- 佐々木利和編・山田秀三監修 2000『北海道の地名—アイヌ語地名の研究— 別巻』草風館
- 佐藤一夫・工藤肇ほか 1986『苫小牧市東部工業地帯の遺跡群Ⅰ』苫小牧市教育委員会
- 佐藤一夫・工藤肇ほか 1987『苫小牧市東部工業地帯の遺跡群Ⅱ』苫小牧市教育委員会
- 佐藤一夫・工藤肇ほか 1990『苫小牧市東部工業地帯の遺跡群Ⅲ』苫小牧市教育委員会
- 佐藤一夫・工藤肇ほか 1992『苫小牧市東部工業地帯の遺跡群Ⅳ』苫小牧市教育委員会
- （財）北海道埋蔵文化財センター 1983『旭町1遺跡』北裡調報10
- （財）北海道埋蔵文化財センター 2001『鶴川町 米原3遺跡・宮戸3遺跡・米原4遺跡』北裡調報153
- （財）北海道埋蔵文化財センター 2002a『鶴川町 宮戸4遺跡』北裡調報168
- （財）北海道埋蔵文化財センター 2002b『白老町 虎杖浜2遺跡（2）』北裡調報172
- （財）北海道埋蔵文化財センター 2003『鶴川町 米原4遺跡（2）・宮戸4遺跡（2）』北裡調報185
- 許 成基・山崎 誠・佐高裕之・中川昌巳・秋山泰祐・平野令緒 2001『支笏火山噴出層年代の再検討』『地球科学』55巻
- 田才雅彦 2001『豊川1遺跡』厚真町教育委員会
- 田才雅彦・宗像公司ほか 2002『米原5遺跡』鶴川町教育委員会
- 土肥研晶 1996『川端遺跡・川端2遺跡』由仁町教育委員会
- 戸刈賢二・土屋 肇 2000『北海道の石』北海道大学図書刊行会
- 苫小牧市編 1998『苫小牧市のあゆみ』苫小牧市
- 苫小牧市編 1975『苫小牧市史上巻』苫小牧市

- 永田方正 1984「初版 北海道蝦夷語地名解」復刻版 草風館
- 西田 茂 1993「ふたたび東釧路Ⅱ式土器について」『考古論集』潮見 浩先生退官記念論文集
- 西田 茂 1995「東釧路Ⅱ式土器について」『北海道考古学』31
- 西脇対名夫・宗像公司 2001『舞沼2遺跡』厚真町教育委員会
- 北海道廳編 1918『北海道通史第一』
- 北海道編 1970『新北海道史 第二巻通説』北海道
- ペドロジスト懇談会編 1984『土壌調査ハンドブック改訂版』
- 松浦武四郎著・吉田常吉編 1984『新版 蝦夷日誌(上)』時事通信社
- 松浦武四郎著・秋葉實解説 1985『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』北海道出版企画センター
- 宮夫靖夫 2000「苫東遺跡群における集落の様相」『苫小牧市埋蔵文化財センター所報』2
- 宮夫靖夫 2002「苫小牧市東部工業地帯の遺跡群Ⅵ」苫小牧市教育委員会
- 宮夫靖夫・工藤肇ほか 2002a「苫小牧市東部工業地帯の遺跡群Ⅶ」苫小牧市教育委員会
- 宮夫靖夫・工藤肇ほか 2002b「苫小牧市東部工業地帯の遺跡群Ⅷ」苫小牧市教育委員会
- 森田知忠・遠藤香澄 1984「Tピット論」『北海道の研究1 考古篇Ⅰ』清文堂
- 山田秀三 1972『北海道の川の名』増補版 モレウ・ライブラリー
- 山田秀三 1988『アイヌ語地名資料集成』草風館
- 山内清男 1979『日本先史土器の繩立』先史考古学会

報告書抄録

ふりがな	あつまいし ほんまつまごんいせき							
書名	厚真町 浜厚真3遺跡							
副書名	日高自動車道厚真門別道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	財北海道埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第186集							
編著者名	遠藤香澄・鎌田 望・笠原 興・芝田直人・山中文雄							
編集機関	財北海道埋蔵文化財センター							
所在地	〒069-0832 北海道江別市西野幌685-1 TEL011-386-3231							
発行年月日	西暦2003年3月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査 面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あつまいし いせき 浜厚真3遺跡	ほっかいどう 北海道 厚真町 勇払郡 あつまいし 字浜厚真 525-1 ほか	01581	J-13-72	42° 36′ 36″	141° 51′ 37″	200207029 ～ 20021025	3,390	高規格道路建設に伴う事前調査
所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
浜厚真3遺跡	遺物包含地	縄文時代 早期・後 期	Tピット 焼土 土坑	173基 14か所 1基	縄文・統縄文時代の土器 780点 (東鋼路Ⅱ式、東鋼路Ⅳ式、 タブコブ式、御殿山式、後 北式) 石器等 2,648点 (石鏃、石槍・ナイフ、石 錘、スクレイパー、ピエス・ エスキュー、石核、石斧、 すり石、たたき石、くほみ 石、石錘、砥石、礫、フレ イク)		Tピット 群	

北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第186集

厚真町 浜厚真3遺跡

一日高自動車道厚真門別道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成15年3月26日

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832 江別市西野橋685番地1
☎011(386)3231 FAX011(386)3238
[E-mail] mail@domaibun.or.jp
[URL] <http://www.domaibun.or.jp>
印刷 社会福祉法人 北海道リハビリ
〒061-1195 北広島市西の里507番地1
☎011(375)2116 FAX011(375)2115
